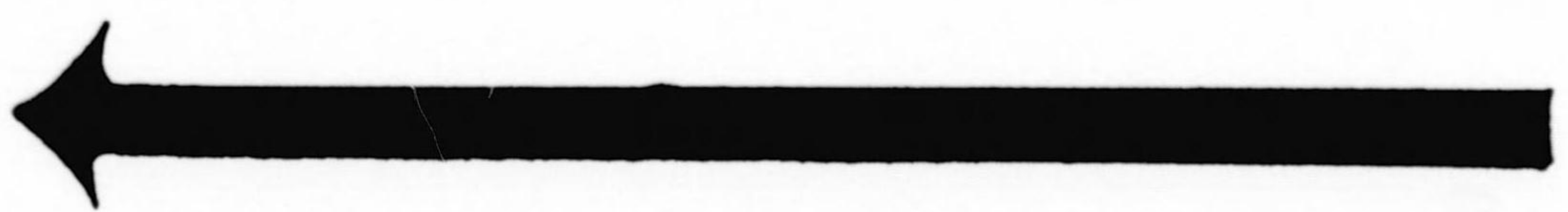


217.7
Su674 &
(t2)



始

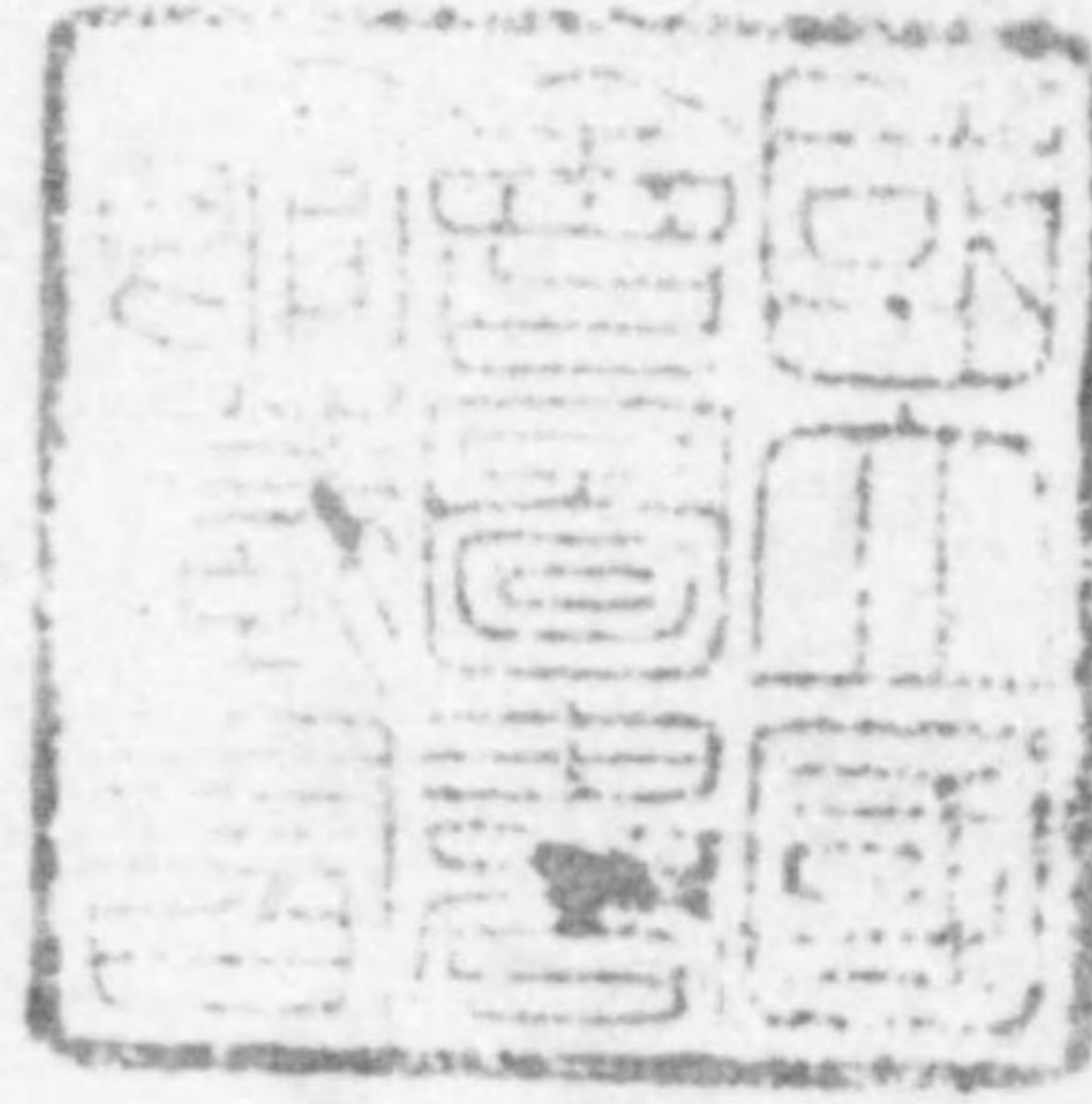


8-2-5

防長回天史

第五編
中
八

樞密顧問官帝國學院會員正三位勳一等文學博士子爵末松謙澄著



286383

防長回天史第五編 中

目次

慶應記

第十七章	慶應二年春期の大勢	一
第十八章	慶應二年春期の毛利氏	九
第十九章	接幕事件 (其一)	三一
第二十章	接幕事件 (其二)	六三
第二十一章	長薩提挈并に乙丑丸及び薩英事件	一三三
第二十二章	慶應二年夏期の大勢	一八一
第二十三章	慶應二年夏期の毛利氏	一九一
第二十四章	接幕事件の進行 (其一)	二三一
第二十五章	接幕事件の進行 (其二)	二七八

第二十六章 接幕事件の進行 (其三).....三〇五

第二十七章 第二奇兵隊脱走始末并諸隊暴發兵嚴罰.....三三九

第二十八章 長薩聯合及び英佛關係.....三六九

第二十九章 四境戰爭 (其一).....四〇八

第三十章 四境戰爭 (其二).....四三〇

第三十一章 四境戰爭 (其三).....四七二

第三十二章 慶應二年秋期の大勢.....四九九

第三十三章 慶應二年秋期の毛利氏.....五二〇

第三十四章 接幕事件の餘波 (其一).....五三八

第三十五章 接幕事件の餘波 (其二).....五六〇

第三十六章 四境戰の進行 (其一).....五八〇

第三十七章 四境戰の進行 (其二).....六一九

第三十八章 四境戰の進行 (其三).....六四四

第三十九章 長薩聯合.....六六一

第四十章 長藝關係.....七〇三

防長回天史 第五編中 正誤表

頁數	行數	誤	正
一〇	九(註)	萩野隊	萩野隊
二七	四	根さず	根さず
二八	八	命する舍密局總裁を以てし	命するに舍密局總裁を以てし
二九	五	辨別	辨別
四一	四	間隙を窮ひ	間隙を窺ひ
四三	五	御筋合歟と	御筋合歟と
四三	三	狼藉者	狼藉者
七〇	一	處分令を傳へんが爲め	處分令を傳へんが爲め
八三	一	三支侯	三支侯
八三	九	狂て	枉て
一〇八	二	柄鑿相容れず	柄鑿相容れず
一一〇	二	長藩提掣の協約	長藩提掣の協約
一二二	二	板椽	板椽
一二五	五	風色あるを持ち	風色あるを持ち
二四三	二	己下牌	己下牌
二七八	八	(第二の)小田村素太郎	小田村文助
三〇三	一〇		

三〇五	八	病尙愈へず	病尙癒えず
三〇七	四	藍輿	藍輿
三〇七	八(註)	藍輿	藍輿
三〇七	一三	揮淚斬馬穆	揮淚斬馬穆
三六六	二(註)	開戦間隙に	開戦間隙に
三六七	六	酒勾	酒勾
三七六	二(註)	酒勾	酒勾
三八二	二(註)	酒勾	酒勾
三八三	四(註)	酒勾	酒勾
三八三	九(註)	或軍	我軍
四七九	一〇	炎旱水溢	炎旱水溢
五〇五	三	病未だ愈へず	病未だ癒えず
五一二	七	玉座に咫尺し	玉座に咫尺し
五一六	一二	冠を掛けんと乞ひ	冠を掛けんと乞ひ
五一六	九	繁を去り髻を除き	繁を去り髻を除き
五一九	九	太に諫す所あり	大に諫す所あり
五二五	一三(註)	蘆萩	蘆萩
六五五	一二(註)	議論往々軒結し	議論往々軒結し
六六四			

防長回天史第五編中

子爵 末松謙澄 著

慶應記

第十七章 慶應二年春期の大勢

防長案件○紀州の建言○幕府の内情○處分案の奏上○朝旨○小笠原閣老の下藝○公父子孫及び三支侯吉川氏等召致の命○其辭退○五卿事件

慶應二年春將軍家茂大坂に在り防長案件は當時實に幕府惟一の難問題たり先手
總督徳川茂承州紀州は書を上りて紀藩栗山俊平田邊藩宮川六郎の建言に基づく云ふ一舉奏効を期し姑息に陥るべ
からざるを言ふ以爲らく此舉にして一勞永逸の功を收めずんば他諸侯の異心亦
抑ふべからずして海内擾亂し其弊に勝へざらんとす我紀藩の如き再三役に従ふ
の力を有せざるなりと是れより先き永井主水正尙志廣島より歸りて長藩推問の状

を復命す然れども防長の内状は曩きに尾張總督が復命せし所と相似ざるの報陸續として到り甚しきは福原以下三大夫の首級も亦眞に非らずとの説を傳ふる者あるに至れり是を以て幕府の要路亦區々の論あり滯坂の閣老等と在京の一橋會桑等と各、未だ其見る所を一にせず或は更に峻嚴の措置を施さんと主張し或は稍、寛洪の説を執り板倉伊賀守小笠原壹岐守は入京して一橋等と謀り既にして一たび大坂に歸り幾も無く復た入京して議纒に定まれり正月二十二日一橋慶喜松平肥後守二閣老と共に參内して處分の議を奏せり要は毛利氏父子朝敵の名は之れを除き封地十萬石を削り父子に蟄居を命じ家名は他に其人を選で之れを嗣がしめ三大夫の家は永世斷絶を命ずるに在り

(奏疏)

毛利大膳父子家政向不行屆家來共一昨年七月父子黒印之軍令狀所持京師へ亂入奉對禁闕及砲發候段不恐天朝所業不屆至極に付大膳父子可處嚴科處益田右衛門介福原越後國司信濃於出先條々之主意取失非禮非義之及暴動に候に付三

人斬首之上備實檢并參謀之者夫々加誅戮任用失人候段深恐入悔悟伏罪相愼罷在候趣自判之書を以申立猶其後疑敷件々相聞候に付永井主水正戸川鉾三郎松野孫八郎差遣相糺候處彌恭順謹慎罷在候趣付於大膳父子朝敵之罪名は相除候乍去畢竟不明統御之道を失ひ家來之者共犯朝敵之罪候段其科不輕雖然祖先以來之忠勤を思格別寛大之主意を以高之内十萬石取上大膳は蟄居長門は永蟄居家督之儀は可然者相選可申付右衛門介越後信濃家名之儀は永世可爲斷絶候此段遂奏聞候以上

朝廷之れに與ふるに批答を以てす其文に曰く

長防處置之儀祖先より勤功も有之候付寛典被爲行思食候處今度決議之趣言上被聞食候猶國內平穩奉安宸襟候様被仰出候事

始め朝議慶喜等請ふ所を以て酷と爲し答旨を内示すること再回に及ぶ其一に曰く

長防處置決議之趣被聞召候方今外患内憂紛亂候ては拘國體彌被惱宸襟候間厚

加仁惠早く至當之處置を施し國內平穩奉安宸襟候様被仰出候事
其二に曰く

防長處置決議言上被聞食候祖先より勤功も有之候に付寛典を被行候思食候間
其邊相心得猶國內平穩奉安宸襟候様被仰出候事

慶喜等其趣旨を奉じ難しと爲し固く執て動かす廷議已むことを得ずと爲し遂に
其文を更めしなりと云ふ處分案既に決す將軍乃ち命を傳へんが爲めに閣老小笠
原壹岐守を廣島に派す二月七日壹岐守海路廣島に着す其二十二日に至り三支侯
吉川氏及び宍戸備前毛利筑前を廣島に召すの命を發し藝藩をして之れを山口徳
山長府清末岩國に傳へしむ皆病と稱して之れを辭し別に各書を裁して國情を
陳す藝藩は幕命に接したるも宍戸木梨兩大夫を措きて直に之れを三支藩及び岩國に達するの當否を
議し爲めに兩三日を費し遂に小笠原閣老の督促に遇ふ乃ち其藩臣植田乙次郎寺尾生十郎をして
之れを宍戸木梨兩大夫に内報せしめ別に神尾尙太郎山香篤之允を山口
徳山岩國に若月準二戸島龍之允を長府清末に遣はし又之れを傳へしむ三月二十六日更に公父子
孫三支侯及び吉川監物并に老臣を廣島に召致し限るに四月十五日を以てするの
命を發し藝藩をして之れを傳へしめんとす藝藩異言あり三支侯及び吉川氏等召

致の初命未だ果さずして更に此命を發し且つ限るに此短日數を以てするは妥當
ならずと爲し未だ再命傳達の命を奉ぜず以て春期を終る而して幕府が處分令を
講究するの間に於て毛利氏の主張は益々世の同情を博し且つ長薩の提携は二藩
の間に密約せられ幕令は遂に畫餅に歸するの外なきの形勢に陥れり事は別章翻
に詳なり
て五卿事件の經過を観るに幕府は客臘通知の趣旨に基き三月十五日更に命を五
藩に下し小林甚六郎派遣の事を告げ五卿護衛の藩士等をして命を甚六郎に聞か
しむ其文に曰く

此度御目付小林甚六郎筑前宰府へ御取締として被差遣候に付ては三條實美始
五人之者爲護衛差遣置候家來共へ於場所甚六郎より申達候儀も可有之候間可
被得其意候

十九日筑藩周旋方寺田嘉兵衛高井儀兵衛五卿に隨從せる水野溪雲齋の旅寓に至
り告るに甚六郎等不日來着すべき旨を以てし且つ曰く其際彼れ若し五卿を洛
外に迎へんとせば五卿の決意遂に如何豫め之れを示さんことを請ふと溪雲齋之

れを五卿に報ず五卿乃ち溪雲齋及び土方楠左衛門當時楠太郎と稱す等を會して議する所あり翌日口述書を二人に付し寺田等に答へしむ其文に曰く

(口述)

五卿方御渡海に相成候儀は美濃守様爲天下厚御盡力被爲在薩州にも周旋有之儀にて御進退之儀に付ては御渡海以前美濃守様御約定も有之今更別段不被申入候且薩州周旋之役々西郷吉之助吉井幸輔等委細事實相辨居候に付御聞合被下度候事

同日溪雲齋は薩藩肥後直右衛門に示すに此口述を以てし肥後は翌日五卿に謁し二十三日太宰府を發し歸國の途に就けり小林甚六郎は徒目附高橋平之丞大原道藏以下小人目附五人別手組等と共に二十三日博多に着せり此時筑藩の態度稍變じ小林等の着するや之れを遇すること極めて鄭重にして二十三日藩侯父子は之れを箱崎の別館に招き變應美を盡し漁父數十人をして綱網を海濱に曳かしめ其覽に供せしと云ふ五卿は之れを聞き豫め進退を決し事に臨み狼狽することなからしめんが爲めに二十七日旨を從士に内諭す其文に曰く

此度幕府目附渡海之由に付ては其末若し東歸を促し或は五藩へ分離を謀り候程も難計候得共前年長州下向之次第固より一身の浮沈を顧候譯にては決して無之偏に天下の興復を計り候事にて心事不得止事より一時權道に處し候處時勢變遷之今に至り候ては宿志盡く沮廢致し多年尊王攘夷之志も一も其効驗無之依ては前年之次第も全く一身之事に相成上は奉對天朝下は萬民に向ひ恐懼慚愧之至りに不堪戀闕の情に於ては申迄も無之候得共今更何之面目有之敢て東歸致候哉萬々其存念無之候殊に分離之儀に至り候ては尤其謂無之徒に餘命を保ち候存念に候得者如何様共進退可致候得共兼々申被聞置候次第に候上は若し右之兩條相迫り候時我等は不及申孰も夫迄と相心得決して不覺悟無之只誠心を千歳に期し從容指揮相待べく候事

季 知
實 美
基 修

是に於て從士等皆小林にして若し暴令を下さば一死以て之れを争はんと決せり
從士中山本兼馬は疾に罹り危急の際其用を爲さざるのみならず同志の累を殘さんことを慨し屠腹して死したりと云ふ而して小林甚六郎は三月晦日二
 日市宰府の南に二十丁許に至りて宿し將に五卿に對する交渉を開始せんとせり

第十八章 慶應二年春期の毛利氏

對幕の狀況○新年の賀禮○赤根武人の處刑○木戸貫治等の歸國○戰期の切
 迫○藩内警戒○關門の注意○世子の萩行○集義隊萩野隊の徳山派遣○戰時
 病院○公館修造○公の湯田駐在○其歸館○世子の歸山○世子の成器塾教育
 の親裁○公の各地巡廻○長防士民合議書の頒布○醫學舎密學及種痘の獎勵
 慶應元年春毛利氏雪冤の期は愈々切迫せり一面は廣島に於て小笠原閣老西下し
 て處分令を傳へんとし藩の使節宍戸備後助木梨彦右衛門死を決して善く藩の主
 張を辯ずるあり事は別章に詳なり一面は木戸貫治潛に京都に入り薩藩士と會談して遂に
 提挈の約を結び汽船一條も長薩兩藩の意思次第に疏通し高杉晋作接薩使の命を
 奉じて長崎に赴くに至れるあり事は別章に詳なり當時幕軍既に四境に迫り我亦諸兵を部
 署して之れに備ふ此間藩内の形勢如何は即ち本章の記述する所なり
 正月元日公父子山口に在り是れより先き徳山老侯毛利兵庫頭卒し歌舞音曲停止

中に在るを以て命じて歳首の諸儀を止む四日公證直垂を着し便殿に出で執政加判手廻頭奥番頭小姓以下の吏員を引見し歳首の賀禮を受く十七日特旨を以て坪井竹槌を士格に復し更に家祿百五十石高九十五石切錢百目合計百五十石を賜ふ是れより先き文久三年父坪井九右衛門罪あり斬に處し其子竹槌は遠流に處し其家祿を沒收す竹槌深く前非を悔の謹慎の狀著明なるを以て萩に復歸し外出することを許し尋て明倫館に入り文學修業の際袴を着することを許す爾來益々謹慎の實を表し讀書を勉め且つ槍術に長じ師範の補助を成すに至れり故に此命あり嘉川駐屯の浪士團を解き集義萩野二隊に分屬す但馬人八木龍藏小山太郎原六郎桑名南二郎駿河相馬魁太郎對州桃井清之助豊後淺江又八八木龍藏の僕喜三郎等を集義隊に因州景山桂遠藤義夫岩崎基三郎京都澤田眞造同震太郎姫路淺井勝之助紀州西太郎左衛門等を萩野隊に加入す二十二日大檢使役小笠原太郎兵衛をして干城隊軍監を兼ねしむ二十四日山縣箴を以て軍制用掛と爲し毛利宣次郎の指揮を受け萩手當の事を掌らしむ二十五日前奇兵隊總管赤根武人を斬に處し其首を梟す

赤根は調和論に失敗し去年正月二日國を脱して筑前に走る其二月幕府の五卿

の護送を筑薩等五藩に命ずるや五藩は委員を派して總督徳川慶勝に面せしめ其命令の曩きに總督より下せし所と相反することを陳し之れを辭せんと欲し筑前藩は筑紫衛早川養敬等に上京を命ず會、薩藩西郷吉之助も亦上京の途次太宰府を過ぐ赤根之れを聞き久留米の浪士淵上郁太郎と共に筑紫早川に頼り京都に隨行せんことを請ひ又西郷に會して謀る所あり或は曰く客冬西郷の馬關に至るや赤根は調和論者たるの故を以て西郷と相知るに至りしならん故に今此事ありしならんと此説中れるに似たり是に於て二人身を商人に扮し各、姓名を變じ柴屋 和平 松屋長兵衛上國に向ひ大坂に至る既にして其二十七日幕吏の爲めに逮捕せらる早川養敬此際の經過を手記せり曰く

此回五卿東送猶豫請願の爲め予(早川)筑紫衛と藩命を負ひ三月七日諸士と共に發程上京の途に就き(中略)二十二日大坂に達し中ノ島用達津島屋藤藏方に投ず過日黒崎の驛に別れたる柴屋和平松屋長兵衛過る十七日到着を告げ來り上京に隨行せんことを請ふと雖ども聊か支あれば我輩一旦上京して邸内の景況により更に報知せん夫迄の所當所に待べしと云ふ松屋曰僕上京の節藩の留守居東郷用人大音兵部には屢々面會したることあり必ず忌避あることなしと云ふ予筑紫に云ふ其實大音東郷は頗る佐幕論なり(中略)大切の機會なりと諭して滯坂せしめ二十三日京着して淵上赤根上京の事を大音に謀る大音大に之れを不可とし速かに追返せよと指揮するを以て西郷吉之助に之れを謀る西郷曰く薩筑と長を勝ひ京師に兵を出すに至れば諸藩或は尊意を受けて砲發する事あるべし赤根は因備に知人多しと聞く依て彼れをして彼の二藩を説かしめ薩筑長京師に出兵する時援兵なさしむるに幸あり故に足下復た下坂して彼兩人に面會して共に他日の謀をなさんと欲し小松帶刀に謀りたるに同意し

たるを以て筑紫早川復下坂して赤根淵上に面會し北の新地妓樓に誘ひ京師の事情を説き(中略)西郷は君等兩人の爲めに今明日必ず來るを約し置きたり同人來坂の上進退を決せよとて其夜別れて我輩兩人は津島屋に歸り赤根淵上は其樓に泊す翌朝に至り津島屋の門前最騒々敷何事やらんと階を下り覗き見しに赤根淵上の兩人就縛幕吏に曳れ行く云々

既にして二人共に京都の獄に移さる其後の消息未だ詳ならず或は曰く獄中よりの書を幕府に上り中國西國の形勢を述べ若し放たれて國に還ることを得ば藩主及び長府侯に謁し主意の存する所を聞き吉川監物と力を合せ恭順伏罪の狀態に復せしめんと告ぐ幕議之れを許し其十一月永井主水正等を廣島に遣はずに際し新選組近藤勇伊藤甲子太郎をして二人を護送し藝州に至り之れを放還せしめたりと二人は共に馬關に至り淵上は筑前に歸り赤根は周防熊毛郡阿月村に至り浦氏の臣秋良敦之助芥川十右衛門木谷修藏等に面會し修藏等後ち各尋て故郷柱島に歸りて潜伏す事漏る第二奇兵隊軍監林半七命を承けて往て之れを搜索す得ず十二月に至り榎村半九郎事を以て徳山に赴く因て又佐藤清兵衛等と共に搜索の命を受け百方物色遂に之れを柱島に捕へ本年正月三日引て山口に歸り之れを盜賊改方に交付す十八日罪案成り二十五日之れを鰐石に斬り其

首を梟す梟首の夜覆面の士三四人來りて刀を抜き番卒を脅かし首級を奪ひて去り其往く所を知らず罪案に曰く

浦 滋之助元家來

赤 根 武 人

右一昨子冬奇兵隊總管所勤中脱走せしめ於上國被相捕獄中より存外之書面をも差出候由相聞へ此度歸國之上も數十日之間所々忍び隠れ候始末旁多年之御厚恩を忘却し不忠不義之至罪科難遁依之斬首被仰付候事但武人事去る亥夏奇兵隊御取立初發より役付をも相勤尊攘之事に艱難せしめ拙て有志之者に付其身一代御雇被召出候以來段々無比類難有被仰付をも有之同隊總管所勤中一昨子冬不容易御時節に立至り候處前件莫大之御厚恩を忘却し隊を捨令脱走筑前へ渡海夫より上國罷登被相捕獄中より御國事情委曲書面にして差出候由相聞へ此度出獄歸國之上は悔前非可奉報御國家心底も有之事に候得ば早速自訴可待罪之處更に無其儀數十日之間處々潜伏せしめ候次第全叛逆悖亂之重科難遁事に付本文之通り被仰付三日之間梟首をもちいたし候様被

仰付候事

二十六日井上小太郎を以て小姓と爲し其職務を免し山代徳地兩宰判の軍監を命じ榑崎八十槌も亦小姓と爲し都濃宰判の軍監を命す二十八日山田七兵衛を以て藏元役と爲し現務を免し海軍頭取を命す同日第一第二第四大隊に命じ二月以降各半大隊交代して山口に駐在せしむ又小笠原彌右衛門花岡干城隊總管に命じ其隊をして故の如く歸て山口學校内に居らしむ二月三日曩きに上國に遣はしたる木戸貫治等歸る同日公御神本主殿を召し親く干城隊總督を命じ且つ學校奉行の意を以て力を盡さしめ前原彦太郎に命じて藏元役を兼ね馬關越荷方の事務を專掌せしむ四日高田健之助に命じ其部下第十二大隊を以て清末に赴き清末藩兵の援助に備へしむ玉木文之進の請に因り藏元役を免し郡奉行役を擔當せしむ六日諸隊に令して更に間諜を警戒せしむ八日北條新左衛門を以て毛利筑前手元役と爲し國用方勤務を命す九日世子將に明日を以て其生父の忌を除かんとするを以て國貞直人を廣島に遣り公父子より各、之れを幕府に報告せしむ此後幕府は服罪の實未だ擧らざるを名とし曩きに提出した

る公父子居喪の申告を却下せり故に此除忌の申告も均しく却下せしならん 十日世子喪服を除き館に登り公に謁す公亦奥番頭福原藏人を其居館に遣はし鮮魚一筐を贈る十一日兒玉糺に使番役を命じ徳山の軍監たらしめ寺内暢三をして清末應援の第十二大隊軍監たらしむ十二日佐々木男也を以て右筆役と爲し現務を免し故の如く南園隊の總管たらしむ是時に方幕府の老中小笠原壹岐守處分令を齎らし廣島に來らんとするの諜報至り戰期漸く迫るを以て九日三支藩及び岩國の邸監十二日山口駐在の諸臣を公館に召し均しく警告する所あり且つ之れを士卒に頒布す二月二十日高杉より木戸への書中に曰く後如脱兎御廟算相立候様伏奉祈候弟輩乍不
及又々矢丸之間に相立事を得欣喜之至に候 其文に曰く

今般閣老小笠原壹岐守殿永井主水正殿其外近々藝州發向之由到來有之候處舊臘永井殿其外應接之節御國內之情實委細御聞届相成候事に付御寛大之御沙汰振も可有之候處却て存外之幕令有之戦に相聞素より請込も難相成其期に至り候得ば又候軍勢四境に迫り候は必然之事に付兼々御手組被仰付置候通諸手規律を相守御指揮に隨ひ不墮御武威孰も一致義勇決戦之覺悟可有之此段可相達

同日又令して關門の誰何を嚴にせしむ十三日公各郡代官を便殿に召見し民政の状況を聽き畢りて酒肴を賜ふ世子山口を發し萩に至り明倫館駐在諸士の文武講習を觀る十六日京都變動の際失踪して存亡を知るべからざる士卒にして嗣子なき者に養子を許す遺族往々生計を失ふを以て之れを愍むなり

(令文)

去る子年京師變動後今以不罷歸生死不相知に就ては嗣子無之面々之儀は養子之願申出存命にて追て罷歸候はゞ至其節何分之御斷申出候様被仰付候事
十七日曩きに船木出衛を免ぜし梶杜駿河部下を率ゐて山口に歸る公之れに調を賜ふ十八日京都變動以來公恭順命を竣つを以て祖先の法會を延期せしも是に至り命じて故に復し舉行せしむ同日清水美作の請を聽し其家兵を第二奇兵隊に合同せしむ又千切口關門の守衛を益田石見に命ず二十一日諸郡代官所に命し豫め戰時の病院を準備せしむ其文に曰く

諸處病院被差立候處戰爭之節怪我人療治相加候場所之儀は戰地より一里内外之外に無之ては差湊に付前以戰地の取極難相成事に候得共凡之目途を立諸郡村處々に於て寺院其外相應の家宅引當置候様被仰付候事

二十二日曩きに根來上總に命じたる毛利讚岐守補佐防備參與の任を解く二十三日公湯田の別業に赴き暫く駐在す公館を修造するが爲めなり二十七日乃仙美吉の岩國軍監を罷め坪井竹槌を以て之れに代ふ二十八日公山口の館に歸り世子も亦萩より歸る

杉梅太郎より木戸に寄せたる書あり當時の事情を見るに足れり左に録す

(杉の書)

前上國邊之事情旁縷々被仰知初て細悉承知仕不一方心得にも相成別て難有不堪感銘奉存候就中御内輪一致一定の儀御尤千萬と奉存候いづれ此結局は決戰之外致方無之候處衆寡大小を以論じ候ては所謂鄒之楚に敵する類にて勝算逆も無之唯可恃ものは君上之御正義御誠忠と御内輪之義勇一團結之外は有之間

敷何も高諭之通と奉存候處御上之儀は多年之御積誠今更申上迄も無之候處團結之儀いかゞ御手を下され可然哉無御疎儀御座候へ共御熟議御盡力奉祈上候差寄り爰許にても上總殿御氣付有之明倫館講釋にも君辱るれば臣死之儀を一統之腹へ入り候様説き可然との事今日學頭へ御授け相成筈に御座候何卒此義理さへ眞に落着行き候はゞ俗論も出來仕間敷奉存候此度之若殿様萩御越莫大之御益と奉存候第一上國存外之風聞有之候へども廟堂臺も迷亂之體無之泰然是に當られ候御模様相見へ大に世人之意を強くするに足り申候且又萩地且つ御家來中御見捨無之文武之諸稽古御引立被遊候段御家來中而已ならず下々迄餘程之御作興に可相成奉存候只今御家來之多き所は萩に付萩居合之諸士奮激仕候はゞ自然と一統へも押移り可申旁誠以難有御妙處置と奉存候此往きは政府其外樞要之有司彌戒慎修省之念無油斷凜然卓立して御闔國士民之信を取りづれも依頼仕候様之御處置一團結之御一助かとも奉存候後(二月十三日)是れより先き同月二日公は徳山の兵制未だ完備せざるを憂ひ集義隊萩野隊を以

て應援に充て徳山の山崎隊と合併し當時合併と稱するは共同動作の意なり其世子毛利平六郎をして其指揮に當らしめんと欲し命を山口駐在の徳山邸監に傳ふ

(徳山への命令)

此度集義隊萩野隊徳山表應援被差出候付山崎隊と三隊合併被仰付山崎隊同様平六郎様へ御指揮被成御頼度思召候此段及御達候様との儀に候
集義隊萩野隊徳山表爲應援被差出候に付山崎隊之儀も右兩隊へ合併一隊之心得を以て申合せ規律相立候様に思召候此段及御達候様との儀に候
尋て平六郎山口に來り公に謁す九日後數日徳山藩老臣森主水を政事堂に召し公の旨を傳へ平六郎をして軍務を練習せしむ

(命令文)

此度山崎隊集義隊萩野隊合併被仰付山崎隊同様平六郎様へ御指揮被成御頼候趣に付被仰付之次第被成御承知候處即今可然人柄難被差出に付其中差向合併御規則御十分に被爲立候様被爲成候就ては御入隊同様之御心得を以て御修業

被爲在度平日學校御引立御一藩御指揮等も萬端淡路様へ被爲伺御處置被成度との御事

其十八日に至り都濃郡軍監檜崎八十槌をして集義萩野山崎三隊の軍監を兼ねしめ二十一日に至り集義萩野二隊の請に因り山崎隊と共に富田善崇寺に屯集せしめ後ち又三月六日野村靖之助を徳山に遣はし毛利平六郎の内用を聽き且つ集義隊の參謀を兼ねしむ三月三日藏元役松原音三に命じて臨時奥阿武郡都合役の事務を聞かしめ六日作間神太郎を以て長府の軍監と爲し松野四郎右衛門に代らしむ同日宇都宮眞名助藝州僧默霖なりの文學に長じ勤王の志篤く且つ我藩風を欽慕するの深きを以て終身藩の儒籍に列し俸祿若干を給す十八日崇文公著す所世子誥文刻成る乃ち執政加判及び政員に各一部を賜ふ同日小倉宗右衛門を以て徳山の軍監と爲し兒玉糺に代らしむ二十二日成器塾の教育法は世子の親裁たるべきことを命ず其文に曰く

成器塾之儀は大身幼少之面々人才成育追年成長上は御國家之柱石とも可相成

事にて成立方別て肝要之儀に付諸世話は是迄之通服部良輔へ被仰付教諭筋之儀は若殿様御差引可被遊事

二十四日公三田尻鞠生に至り諸兵の銃陣演習を觀其營に宿す翌二十五日梅ノ木原に至り小郡附近諸兵の演習を觀て臺道村に宿す二十六日秋穂に至り二十七日嘉川に至り寄寓の浪士に謁を賜ひ小郡津市に宿す二十八日八幡隊の演習を柳井田關門に觀て山口に還る晦日笠原隼之助を以て長府の軍監と爲し作間神太郎に代らしめ瀧彌太郎を以て毛利讚岐守一手參謀と爲し北第二大隊用掛兒玉小民部軍監重見多仲をして御神本主殿名代とし其家老一人同行奥阿武郡都合役木梨平之進在住諸士一人同行南園隊總管佐々木男也と共に清末に至り石州口防禦の軍議に參與せしむ此月長防士民合議書を印刷して盛に之れを頒布す此書實は在藝安戸備後助等の草する所に係る公の内覽を經て活刷し又木版に刻せしものもあり其書扉に曰く長防二州臣民合議局活版製本三十六萬部有奇同腹同心之士各懷一部以備死生緩急蓋使天下萬世知決死快戰臣子之分不可止也其戸は又其標紙に割松喪木日月並應政缺其文奢者不久と書せり公明正大の隱語なり長防士民一統臣子之分無餘儀情實申談書取

我兩君上之思召は元來皇國一致大義名分相立忠節信義被爲盡度との御素志に

候既に嘉永癸丑外夷御處置之儀に付幕府より列侯へ御尋之節も叡慮御遵奉にて待夷之御良策被爲建度書面を以被仰出候儀も有之畢竟皇國一致不致候ては外侮防禦方難相成皇國一致之根元は叡慮遵奉より外他事無之との御見込に被爲在候處乍恐於幕府待夷之御處置振叡慮御遵奉之筋にも參兼候哉上櫻田一件坂下等種々之禍變も出來此餘如何様之内亂に可立至候哉と御煩念に不被爲堪兼て忠節信義被爲盡候御誠心よりして右等御傍觀には難被爲忍何卒於幕府叡慮御遵奉被爲在公武御合體皇國一致いたし候様にと東西奔走御盡力被爲成候處於幕府も建言之廉篤と被爲知召分不被爲捨置御採用にも相成就ては江戸并二條御城等にて御直之仰聞も有之天朝幕府君臣御遭遇風雲會合之御場合を以御誠意を被爲凝久敷廢絶之御盛典を被爲舉行將軍家を始め列侯方迄供奉被仰付加茂石清水神廟へ行幸君臣相共に親敷神明に被爲誓候上攘夷之儀御布告にも相成候儀は天下億兆仰感罷在候儀にて萬一も其御實効不被爲遂候ては乍恐天朝及幕府信を天下後世に御失ひ被遊筋にも相成後來天下人心之歸向にも

相拘り可申哉苟くも皇國にあるもの天朝及幕府如此之御大事を等閑に相考候様にては大義名分不相立而已ならず臣子一己之分においても不相濟と一層御煩念之餘涓滴之御手傳をも被成度との御主意にて御感奮被爲在身家を顧みず國力を盡し候ても平生之御鴻恩に被爲報皇國一致候様にと一途に被思召込候よりして聊なりとも其驗被爲立度赤間關にて攘夷之御手始被遊候處恐多くも天朝よりは不被爲捨置監察使被差下叡感不斜との御褒詔被下賜闔國感戴罷在候次第は申迄も無之御互に承知に候所其後此御方堺町御門警衛御免被仰出加之昨日迄聖上被遊御信任股肱心膂と御倚賴被思召候七卿方俄に御嚴譴之御沙汰等も有之且追々被仰出候勅詔台旨等もいつとなく相變じ御處置之程翻然別人之手より出る様被相窺於下は疑惑を生じ悲憤之餘り議論沸騰致候に付我兩君上には殊の外御心配精々御鎮撫被遊候得共壯年の者は過激に相涉り脱走等をも致し遂に去秋京師變動に立至り候兩君上には元來不被知召御事に候得共奉對天朝御示方御不行届に被爲當別て被爲奉恐入京師變動巨魁參謀之者早速

夫々御處置被爲成候て御詫被仰上候然は京師暴動之罪は既に歸着する處有之
 兩君上積年御忠誠は公明正大一點も天地鬼神に被爲慙候儀無之候然處東西藩
 邸被相毀而已ならず御官位御稱號等被召放との御沙汰相成是も尖御請被仰上
 尙も恭順謹慎を被爲盡候尾州總督においても我兩君上御心事并士民一統情實
 委細御洞察被爲在御陣拂に相成候事と被考候兩君上天朝及幕府へ被爲奉對候
 て大義名分御立被爲遊度重厚の御心事は即最前攘夷之義勅旨台命を被爲重身
 家を顧みず忠節信義被爲盡度被思召立候御誠意同様之御儀にて前後一貫終始
 不渝皇國中一同かく有之候てこそ海内一致にも可立至と申儀は御領内之者は
 御互に一統疾より承知仕候得共動もすれば外向にて因循姑息偷安苟且之輩は
 皇國之大義名分等一切度外に致し置只管身家之安逸を謀り候心底より差起候
 にて可有之哉我兩君上最前之御處置を何歟御異心にて有之候様申觸し候
 族も有之或は去冬以來御恭順之次第は實に朝敵之御大罪有之候故御悔悟御伏
 謝被遊候事之様申觸候者も有之由多年忠敬被爲盡候御心事巨細不致承知萬々

恐入候事に候此度之儀は一時雲雨晦冥日月光を失ひ候同様にて縱令晦冥中九
 り共天上にありては日月之光毫末も増減無之先年聖主將軍家を被爲召將軍上
 洛君臣相共に神明に被爲誓候時之叡慮台旨に溯り相考候に天朝よりは叡感の
 御旨御褒詔をも被下賜將軍よりは江戸并二條御城等にて御直接被仰聞之次第等
 兩君上至誠を以て御奉公被爲遂候御心事は兼て被知召候御儀にて京師變動之
 罪已に歸着する處有之候上は速に御冤罪明白被辨知候て御疎外御咎等被遊候
 御事は無之筈と相考候萬一も此餘御沙汰之筋に付兩君上へ御譴責様之儀有之
 候時は決て叡慮台旨にては無之其中間にて罪名を羅織致し候もの有之より起
 り候に相違無之御互に先祖以來長防二州に生育仕數百年莫大之高恩を荷ひ奉
 り候者傍觀坐視する筋は無之乍併右様罪名を羅織し至誠之御心事を擁蔽し徹
 上不致冤罪に被爲陷候に立至り候は乍恐幕府の御不處置にも被爲當後來天下
 忠義之道を被爲塞自から皇國不一致儀に候得ば天下列侯方誠實に國家を被爲
 憂候御方々は決て御傍觀は被爲在間敷候得共此儀は我々等預り知る處に無之

只々我々御互に臣子之分にては兩君上積年天朝及幕府へ忠敬を被爲盡候處兼々觀感欽慕罷在候へば我々等は又兩君上へ至誠を以て前後一貫終始不變御奉公申上候は即臣子當然之分にて萬一も御冤罪不晴候へば是非雪ぎ不申ては不相濟然る上は天子及將軍へ御直訴申上候外手段無之左候得ば不被爲辨知儀は決して無之候右様情實巨細申出候ても讒誣之ために壅蔽御採用無之節は即雲雨晦冥日月光を失候儀に付不得止一同退て封境を鎖し嶮岨に據り防備を設け雲雨開晴之時を相待可申候其中萬一兵力被差向候節は假令其名は天朝及幕府を假り候共堂々たる王者之師に右様御不當之御處置無之筈叡慮台旨にて無之は必然に候得ば飽迄も平生之忠義を相勵し及防禦候外手段無之事に候昔元祿赤穂遺臣大石内藏助以下四十七人其主君淺野内匠殿之爲に吉良氏へ讐を復し候内匠頭殿事は幕府大禮之節自身大不敬之振舞有之候故其起原を尋れば畢竟吉良氏へ之私怨候へば幕府より罪科被仰付候も當然之次第に可有之左候へば一通之常例を以申候得ば主君之爲とは乍申内藏助以下大法を犯し吉良氏復讐す

るはいかにも暴動之様相見へ可申乍併主君吉良氏への怨は私怨にもせよ幕府より之罪は當然にもせよ臣子之分無餘儀情實より起り候得ば不得止次第にて後世誰一人にても不感服者無之演史に載せ劇場に傳へ見るもの聞くもの感泣流涕し忠臣烈士と爲ざる者無之是天性彝倫の根さず所言語號令を不待して人々同きもの有之により候然る處今我兩君上は前に述る通り積年之御忠誠終始一貫一途に皇國之御爲を被爲思召乍恐天朝及幕府信を天下後世に御失ひ不被遊候様爲致度と忠節信義之御心事にて全に淺野内匠頭殿如き私怨より差起りたる譯にては無之候又京師變動は素より申迄も無之奉恐入候筋に候へ共其根元を尋れば闔國之士民兼て天朝幕府神明に被爲誓候御精誠に感奮仕居候故其後之御沙汰に疑惑を生じ壯年之過激より起り候事にて兩君上には御心術と申御處置と申忠誠始終不被爲變唯多人數之御家來多端之御事務に付ては思召寄せられざる處より之齟齬出來も致候得共畢竟御身上に被爲取候ては功績こそあれ御罪としては毫末も無之然すれば國內一統決死防戰七度人間に生れ候ても

此御冤罪を晴し奉らずては不相濟萬世青史に載られ候ても毛利氏數百年之高恩を蒙りながら其主人の冤罪を傍觀坐視致したりと口々に申觸らるゝは手足耳目を具し此世に生じたる甲斐も無之次第にて大石内藏助以下四十七人をし我々等の地位に居らしむる共尤至極と同腹同心致し候に相違有之間敷候此度合議衆決を遂げ士民一統相誓候處如件天地照覽鬼神在旁抵死不渝依て天下後世我々等臣子之微志傳聞の謬誤なからん爲め各一本を懷にする者也

是れより先き正月九日好生堂醫員に命じ防長二國藥草生育の事務を擔當し其繁殖を謀らしめ二月七日中島治平に命ずる舍密局總裁を以てし好生堂教諭等と協議し舍密學の擴張を謀らしめ又好生堂教諭等をして醫業の進歩を謀らしむ

(好生堂への命令)

先般處々病院被差立候處御醫師御無人に付追々御雇をも被仰付候然る處好生堂之儀は醫業録所に被仰付候段先年御沙汰之趣も有之彌以醫業成立御間闕無之様心遣ひ肝要候事

二十一日病院總督竹田祐伯に命じ痘苗の選擇を慎ましむ

(令文)

牛痘引種法被行候以來幼孩之者自然痘之災を免れ候様相成候處遠在之地にては自然痘に罹り令天折候者も有之哉に相聞へ牛痘引種も歲月を歴候内には自ら眞偽之辯別も等閑に相成候儀も可有之良法被行ながら人民其禍を被るもの有之候ては御主意不徹底にも當り不相濟事に付假令牛痘引種候共篤と眞偽を令検査候儀肝要に被仰付候事

三月十三日更に諸醫に令して其業の研鑽に勉めしむ藩國不時の用を思ふてなり

(醫師への布令)

醫業御引建之儀は先年以來追々御沙汰之趣も有之候に付於御醫師は彌以業筋相勵可申之處御時勢をも不顧問々不心得之向も有之業事不精に打過處々病院其外御遣方にも差湊無據追々御雇をも被仰付候次第に付尙又御詮議之趣有之

向後一ヶ月宛好生堂面着取調へ申出之上不勤之輩は屹と御咎方可被仰付候此段爲心得内意達被仰付候事

二十一日舍密術修業學生の好生堂寄宿を奨勵し其十人に官食を給し又銀五貫目を好生堂に下付し舍密學研究の費に充てしむ

(寄宿の命令)

此度御詮議之趣有之好生堂内に於て舍密術爲修行學生十人入込被仰付御賄をも被立下候條御家來中其外右學術心掛追々御用にも可相立人柄見込之上入込願出候はゞ可被差免候事

但士列に無之學生之儀は月俸をも可被立遣候事

二十三日山口氷上山眞光院の從臣松永周南が本草學を研究し功あるを以て終身二人口の俸米を給し藥草生育方頭取と爲す

第十九章 接幕事件 (其一)

通牒に對する在藝使節の意見○政府の回答○藝藩に致せる内々演說書○使節淹留の決意○木戶品川等の着藝○再度の内々演說書○閣老下藝の報知○處分令に對する在藝使節の意見

慶應二年正月元日在藝使節は客臘二十四日の政府の通牒に對し通牒文は第十三章末尾に在り 答書を裁して復申す政府通牒の趣旨は幕府最後の斷案を下すの日に至れば使節一行は一篇の陳情書を遺し速に歸藩すべしと謂ふに在り蓋し一行をして死地に陥らしむるは公の忍ぶこと能はざる所なるを以てなり使節等は以爲らく公の仁志は固より感荷する所なるも一行の途に上るや始めより生還を期せず幕府にして最後の暴斷を下さば死を以て之れを争ひ機に應じ進で上國に抵り朝幕に直訴するも以て初志を貫徹せざるべからず故に斷案の下るを見て容易に歸藩するが如きは敢て従ふこと能はざる所とす斷案に對し藩内の事情を陳述するは反て別

に其人を派して可なりと乃ち其旨を復申して進止を候せしなり

(赤川小田村の書)

去臘二十四日御仕立の飛脚同二十七日到着御紙上之趣逐一致承知候先以各位
彌御壯剛御奉職の由爲國家奉賀候然ば松原廣澤兩氏も去月二十一日歸國にて
當表滯留中示談の廉々委曲御當役方へ被相伺尙及御聞候處大略其筋にて可然
との御事併決案御沙汰下り候節自然御支封様方登坂の達にて可有之候處此
度大小監察御應接直掛々御支藩様御病氣代り兩大夫衆被相勤候事故此往とて
も御同様有之候得共應接中は兎も角も決局上坂の達有之節は看々大夫衆其外
一人にて可死地に被投候には御忍難被成との旨に付事機に先達ち藝藩迄御別
紙の趣を以て演説仕候由の儀被仰越致領掌候尙又結案一條萬々一も闔國存外
に出候節は不得止決戰の外致方も無之其期に至り候ては恐多くも天幕へ御直
訴等可仕邊の歎願書差出置只今出先に被差置候面々は歸國決死戰勝手傳をも
可致との儀逐一大夫方へも申入候御地の御評議被致承知候得共猶又出先の者

中別に見込も有之少々御地にて御評定の廉とは異同も可有之哉に候得共其
儘申越今一應御地の御衆議相伺候様との事に御座候此段御當役方へ被仰上
尙御上向御思食とも被相窺候て急速御回示可被下候爲右如斯御座候恐惶謹
言

正月元日

小田村素太郎
赤川又太郎

山田宇右衛門様
廣澤藤右衛門様
中村誠一様

(別紙)

當節四境攻口御出張之形狀闔國見聞仕候て士民一統彌安堵不仕折柄大小監察
御應接結案に付自然家老之中登坂被仰達候共其節に至り領内不殘疑惑之餘情
より領内士民多人數押ても御當藩へ罷出家老之上坂を押留可申勢にも相見候

趣を口に籍藝藩へ責難は不好手段候得共兩大夫方に於て已に御支封様に被相代隨分上坂にても可被致口氣は先日粗藝人へも相洩被置候得ば今日に至り豫しめ上坂斷り度との意申出苦敷共には有之間敷哉最君上御仁慈之御思食に出て大夫方を始一人にても看々死地に被投候儀御忍不被遊難有御至情に可有之候得共此迄之應接振條理を追ひ次第を立て公明正大を本とし腰強く張込被置候儀故其後とて十分之壓力丈けは有之度事にて上坂を達候節は尖に上坂仕候て自然意外之暴斷を發し候時は大坂表に於てはねち戻しく受込不申様争辯仕候儀即ち長州家御條理之大結局大段落と奉存候ヶ様御評議被決置候得ば最前藝人へ申懸け置候始末も能調候様被相考候尤御國之議論にては四境之兵を口に籍き上坂之事申試候得ば四境兵退不退にて幕府結局之所置も被下可申萬一四境之兵を不撤して上坂申付候節は必然闔國意外之御沙汰を下し候事に付其節は歎願書差出置時宜により候て引取候様と申御趣意に相見申候いかにも四境兵撤不撤にて結局を下し候との主意は御尤之事に候得共此は爰許にては

先達て申立置候次第も有之候に付小生抔よりは取計苦敷に付爲其態と御國より御使者被差越被下候様有之度乍併假令四境兵不撤にて上坂申付候共小生抔處にては其段に立至り爰元より歎願書差出引取候様には相成苦しく最前より暗夜之上坂承知之前のみならず至其節候てこそ別て以死國論民情ともに押込不申ては不相成哉と奉存候此段出先之議論に付得御意候間何分之儀急に御答被仰聞候様兩大夫被申付候以上

(兵庫の書)

君寃未霽星曆又改乍併御三殿様益御機嫌克御座被遊御超歲被爲在恐悅至極奉存候將又各位彌御安清不相變御忠勤御迎陽被成候半と恭祝不過之奉存候二に小生碌々依舊罷在迎陽丈けは御同様仕候間此段御安慮奉希上候借去臘二十七日夜二十四日立之飛脚到着にて御用狀之趣拜承兵庫頭様御事奉恐入候次第右は御用狀にて御答申上候間御承知可被下候尙又藝藩へ申入候様との御別紙拜披奉承知候右は御國の議論にては四境の兵を口に籍き上坂之儀藝州迄申試

候へば四境兵の撤不撤にて幕府結局の處置をもトし可申右様藝迄押込候ても四境兵をも不撤して上坂申付候節は必然闔國意外の沙汰を下し候に相違有之間敷其節は爰元より歎願書面差出置時宜を以御國へ引取候様にとの御主意と相見へ申候いかにも四境の兵撤不撤にて結局の沙汰振をトし候との御主意は御尤の事に候へども此は障岳翁編者曰く廣澤の雅號には御承知の通先達て爰元滞在御沙汰相待度添演説迄も差出し大小監察聞届いたし候節藝人は小生杯登坂隨分可致口氣も相洩し候儀も有之旁此度被仰越の御趣意御尤には候へども爰元にて小生杯より取計候儀は甚以いたし苦敷候間何卒此儀に付ては態と御國より誰にても宜く御使者として被差越被下候方に御取計被下度奉存候御使者にて被仰越候へば實以都合宜敷に付何卒其取計に相願小生とも爰元滞中に付其國情の儀は別段御使者にて被仰越候へば藝州より幕へ押込候便利にも可相成勞御熟慮相願候乍併此餘假令四境兵不撤候て上坂申付暴令相下し候は眼前に御座候ても其節に至り小生杯元より歎願書差出置引取候様には無之哉障岳先生御滞在中御談申置候通三監引當に不相成候へば聖天子賢將軍へ御直申上度との歎願は闔國意外の沙汰差下

し候後の儀に付一應上坂申付候へば上坂にて右暴令被下れ之時は前文の筋を以歎願可仕覺悟に御座候假令四境兵引取不申とも上坂申付候のみにて先達て推察を以右等歎願候てはいかにも畏縮の次第にも相當且條理も立兼候次第最前より小生等儀は暗夜の登坂は承知の前にて候處彼暴令を下し候節に至り候てこそ別していづれへ罷出候ても國論民情とも腹強押込不申ては相濟中間敷と奉存候兎角出先に罷在候ものは孰迄も條理に倒れ候てこそ御國の正氣も數倍いたし天下後世への申譯も相立然後決死決戰の儀は御國居合の御方に死力を以御任し被下度事と最前山口發足の節よりの素志於小生は今日迎も難相變次第に奉存候間億萬一も小生存慮の次第義理に相叶不申儀にも御座候はゞ被仰合御熟慮の上早々御答奉希上候素より孰れにも國家未曾有の重事件何も公平至當萬世青史に垂れ候ても毫も不慙場合に爲落付度候へば於小生私意を遂げ又は強情等申張候主意は無之に付旁の所各位篤と被思召分御熟考御答是祈候先は右申上度如此御座候恐惶謹言

正月元日夜

備後助

三八

璣 (花押)

尙々幾重にも時下御愛齋爲國家御盡力申も疎に奉存候木戸氏上國行一件至極同意に奉存候尙又長防士民一統臣子の分無餘義情實申合せ書取と申もの相認め右を上板して御國中外とも流布爲致度事と奉存認掛け置き候兩三日後の便に差出可申候間何卒被仰合文面其外等も御添削御氣付被下候て御評議次第上板被仰付候へば假令決死決戰候とも其情實の次第後世迄へも相残り可申事哉と一片婆心是又御愍笑可被下候尙又奉勅始末第二編去五月相認候儘世子公へ差出置候間何卒御取下げ被下候て御校訂被下此も初編二編とも公然御國內へは差出し前文申上候士民申談書取一同見合に爲致候方可然と奉存候餘は委細後便可奉申上候頓首

宇右衛門様

藤右衛門様

誠一様

與次右衛門様

直人様

各侍史下

(小田村私翰の一節)

永井大に當てか相違仕一言も無之事歟とも被考候併正義に感じ自身の罪を悔い前非を改候者幕之中にも一人か二人共の外は有之間敷先は幕威を張候儀を第一と仕候者滿天下同様に御座候へば必定當度接應之主意貫徹難仕事に可有之歟然らば決戰必死之覺悟は何迄も怠慢仕候ては不相成事故御更張之儀彌嚴重被仰出度は申迄も無之候其期に至候て私輩一人二人へ目を御懸被下候にも及不申因て本書御用狀にも申述候通可相成は當表も引取候儀本懐に無之我々を合せて御打潰被下度候

報山口に至る公深く宍戸等の決意を嘉し其見る所に由りて進退することを允し

復申中に言ふ所の別使は今俄に之れを發するの要なしと爲し八日再び其旨を使節一行に通牒せしむ

(藩政府の通牒)

前略は藝藩迄御申入相成候との演説書の事先達て於其御地兩大夫滞在歎願の節被仰立の趣も有之於御出先は御取計苦敷に付態と御國より御使者被差立候様との事委曲致承知候右は此往き決局御沙汰下り候節長防闔國士民意外之暴令出候上は戦争は眼前にて大夫初め一人にても見す々々死地に御投被成候ては難被爲忍との難有思食にて應接一件相濟候上は我藩の御條理は屹度相立候次第にて攻口諸兵抔引取不申て登坂之幕令下し候節は如何にも幕不條理故兎角御登坂は無益の事に可有之との御決議に御座候併最前より千軍萬馬之中決して生還無覺東何處迄も條理に御倒れ被成候てこそ御國の正義は彌通暢天下後世へ之申譯も彌相立候との御決心にて以往迎も趣に寄終に乍恐聖天子賢將軍へ御直訴迄にも可被及との御確定之處は不堪感銘次第に付右御素志之所是非

々々被爲成御差留事には無御座事故將來之幕令に應じ御見切を以被仰合御存分御進退被成候様存候就ては態と使節被差立候邊も餘り延引に相成且左程之功能も有之間敷に付丸々御差止に相成候間此段御承知可被下候藝火輪船歸着にて上國之模様振相分り御察之通り長評議にて我間隙を窮ひ暴威を以相迫り候は必然に付素より持久之策は勿論如何程百千萬年相掛り候共短氣を出し輕擧無之様之事は精々御鎮撫被爲在武備御更張無御疎候間は其邊は決て御煩念被成間敷にて萬端御都合能御取計可被成候略下

此間在藝使節は是月二日を以て演説書を藝藩に致し陳情する所あり以爲らく曩きに大小監察の尋問に對し既に答辯し既に其諒察を得たり闔藩擧て寛大の命を待つこと久し今や幕府反て四境の兵を増す事甚だ異むべし長藩既に藝藩に依頼す請ふ爲めに謀る所あれと暗に詰問の意を寓し且つ上國の消息を知らんと欲するなり

(演説書)

松原音三廣澤藤右衛門歸國にて當御表にて大小監察御役向御尋之始末も士民中重立候者へ申聞せ候處主人父子底意尙二州國情委細被聞召届監察方御落意承知之場にも至り從來之國情も漸暢達仕り此上は無間天幕之御疑惑も相霽平常之御沙汰可被仰出と士民一統待兼居候由就ては尊藩御重役政府御一達も當日御尋席被相詰尙御答申上候件々三監察方御落意承知之段も具に御存知に候へば此餘御裁許一條決て意外に御處置は有之間敷候處十萬一も領内士民等思も不寄御沙汰共被仰出候へば急度尊藩に於て御取計振も可有御座候哉と士民等尙更御依頼に存込候由尤大小監察方は御疑惑御氷解にて御引拂も被爲成候處四境御攻口は彌嚴重に御手配相成候儀を士民一統見聞仕頃日益切迫に立至り右鎮靜には國元役方も手段に絶果候様子只今之姿にて此往時日も經候へば下情鬱塞其末如何様の事に可立至も難測素より尊藩に於て御疎は有御座間敷候得共監察方御引拂後之御物振猶更差急候心情御推察可被下候借又監察方は御落意承知に相成候共御廟議之處何角御六ヶ敷哉之下評も有之候得共國元

役方之者は決て虚説に相考其儀には頓着不仕候元來當度御下向の御役方は即ち天幕之御耳目に被爲代是非曲直公平至當に御聽斷可被成筈之御監察に御座候へば其向に於て御疑惑御氷解之上は天幕之御疑惑も直様御霽不被遊筋は萬々無御座筈と此邊をのみ相持み候て精々説得鎮靜苦配中に罷居候只御攻口御同勢嚴重に被相増候儀は如何之御筋合歟と頑固之士民餘程疑惑を生じ監察方御落意承知の件々即今御實行齟齬にも相見候故此儀に就説得方便には國元役方擧て困窮罷在候由前段音三藤右衛門歸國後之下情一層切迫之狀態改て御合に入置候間毎々乍御面倒上國向御聞合被成下領内士民疑惑を可相釋種とも相成候旨を早々御聞繕被成下度御内々願置候以上

九日藝藩は植田乙次郎をして一書を携へ小田村素太郎の旅寓に就き一旦演説書を還付せしむ曰く弊藩重臣の國泰寺應接場に臨席せしは唯、貴藩と幕府との間を媒介せしのみにして應接を見聞するの意に非ず亦固より之れに容喙すべきに非ず況んや朝幕將來の命に於てをや文中貴藩士民の弊藩の措置に依頼する等の

意あるは弊藩の甚だ苦む所なりと因て少しく演説書の文字を更改し十二日小田村等之れに一書を副へ再ひ植田乙次郎に託して之れを藝藩に致す

(藝藩の書)

松原廣澤之兩氏御歸國後之事情御口演御手控之趣致承知候折を以て監察方之御耳にも入可申候得共左之通一應及御不審候弊藩重役始云々取計振も可有御座と尙又御依頼之旨過當之御依頼甚迷惑之事に候先般御尋之節弊藩重役始其場へ罷出候儀は一昨年來御藩之御書付等取次差出し仍ては幕府より之御達も取次を被命既に御末家始大坂へ被召候節も弊藩差添罷出候様被仰出候次第も有之候に付當所に於ても同様相心得次之間へ控居候儀にて見聞之趣意には無之殊に御直對之御問答外より容喙可致事にも無之況や天幕之御沙汰を弊藩に取計振も可有之との御儀は存外之事に候心廉は公邊へも申上御藩へ御相談も致候儀は勿論に候得共御廟議に不預と申事は松原廣澤之兩氏も御承知と存候處御氣取違之方角へ御理解も無之被仰越候次第は如何之儀に候哉別紙は一

應返戻及御尋候事

(赤川小田村の副書)

前略然ば被仰聞候書取面御不審之件々承知仕候尊藩御附添之御心得迄にて御重役方を始め御場處御出席尙幕府御廟議に御參聽無之儀共素より音三藤右衛門は承知仕居申候只々此迄弊國上下一統之情實は連々御耳へ入置幕府へ之御取次事も尊藩を相頼候儀に候得ば士民抔心得には實に御依頼に存込候様子に御座候就ては只今迄の御手續に因り國情底蘊無遺漏處を御含置度意にて別紙も掛御目候尤文面旁少々相改候得共尙御嫌疑に涉り候件も御座候はゞ書取は尊藩切にて御預被爲置書中之意味御斟酌被成下監察方御許迄御達暢被下度奉願候

是れより先き宍戸備後助は隨員と共に防長士民の情實を縷陳するの書を作り同月四日之れを政府に致し且つ之れを潤飾上梓して以て國內并に他藩に頒布せんことを申請せり所謂長防士民合議書即ち是れなり

章首宍戸書翰の追書を参看すべし合議書は前章に詳なり

(宍戸の書)

餘寒未だ去兼候へども先以御三殿様益御機嫌克被遊御座恐悦至極奉存候將又各位彌以御清勝御忠勤可被爲在奉恭賀候二小生無異碌々御休慮可被下候扱先便申上候様幕兵四境を相圍居候折柄萬一も御内輪一團結少しの間隙も無之様有之度且彼持久之策にて睨み合我虚を伺候ても少しも其隙無之候へば彼も随分疲弊に堪へ不申に付其間我より暴動無之様精々御鎮撫詰り封境を鎖し嶮岨に據り嚴備を設け四民は各其業を安じ百年千年の久しきも長防二國にて桃源中之人之如く此處よりも持久之根本出來候へば少しも氣遣事に無御座候尤右様相成候處には餘程意を用ひ不申ては萬々懸念も不少儀に付別冊相認候間被仰合御熟覽被成下御削正等被爲在候上早速上木にして御國中は素より他邦へも配り度奉存候事に御座候間御同意に候はゞ早々御運被成下候様奉願上候早くなければ間に合不申事に御座候萬一上木に相成候はゞ内輪は跡にても他邦へ早く配り度に付御手繰を以餘所にも御遣し出且四五十部位は爰元にも御

送方奉希上候尤文字上あまりかたくな候間今少し丸くいたし候へばよろしくと相考候へども今日飛脚差返し其間合も無之に付不得止此儘差出候に付何卒被仰合此主意にて今少し丸く御直し被成下候へば尙更よろしくと奉存候此は爰元にて之婆心を盡し候迄にて此餘はいか様とも被仰合可被下候木戸氏上行にも候へば彼方へも急速差送り度寫本にては夫程之功能に不相成候故上坂後と奉存候間幾重にも被仰合被下候様奉願上候此篇相認候主意は付紙へ廉書にして大略相認入御覽候に付御高案を被爲廻候て御直し被下度願上候先便申上候小生去夏相認候奉勅始末第二編も何卒被仰合御直し上下二編として流布爲致度事に御座候此も相認候節之主意別紙にて御承知可被下候小田村赤川より御用狀にて申遣候通二日藝蒸氣船歸着にて様子相分り候永井監も十六日火輪船にて發藝十七日華城へ相達し十八日登城二十二日に一橋一同上京其後下坂にて再び上京此節は又々下坂いたし居候由多分彼にても議論六ツヶ敷事に可有之先日被仰越候通最前永井胸算用とは應接向意外に相成候故大分をせ面にて

彼意内は一言も不申出候て丸々此方より申立候旨を受込罷歸候事にて上國にてはさそかし難遊に可有之乍併我國論さへ動搖無之千百年如一日相待詰居候へば假令戦争に相成候ても天下萬世へ申譯は有之事にて此餘は何も煩念には及不申候へども只々千萬御苦勞に候へども御在國之先生方には何卒御油斷無之御國內へ能々御目を被爲配ことゝも不申様御配慮專一に奉願候先は爲其如斯御座候恐惶謹言

尙々幾重も々々前文之次第被仰合よろしく御取計可被下候尙又先便申上候四境兵之儀にては何卒御國より誰にてもよろしく只々御口上書さへ特參候へば其餘は爰元居合より取計候に付早速被差越旁御取計可被下候あなかし

是時に當り在藝使節は頻りに上國の形勢を探くると雖ども一も確説を得ること能はず唯幕府亦區々の議論ありて容易に其決定を見ざるべきの風説頻々たるを聞くのみ使節は荏苒として日を送り費用を徒費するに過ぎざるの觀あり是を以

て使節一行間には寧ろ姑らく國境關戸に退き幕令を待つに如かずとの議なきに非ざりしも亦之れが爲めに藩内士氣の弛廢せんことを憂ひ二十二日書を藩政府に致し其事を告げ且つ益々持久對敵の方略を堅くし滯藝の士亦本藩の氣脈を承け堅忍不拔以て氣勢を張るべきの意を陳す當時藩内の少壯者間に在りては寧ろ開戦の速ならんことを冀ひ使節の爲す所を以て緩漫と爲す者少からざりしと雖ども使節一行は飽まで平和の手段を以て我が正義を主張し幕府の先ッ手を下すを待たんとし固く其方針を執て事に従ひ公の意亦素より茲に在るを以て政府は使節の行動を是認し而して内に在りては頻りに武備の充備に力め致々として怠らざりしなり

(赤川小田村の書)

前擬監察方引拂後の物音藝藩迄無間斷及催促に候處今以爲何物振も不相分當表眼前の模様就相考候ても四境之兵も依然屯住尤出張相揃候後格別増減等有之様にも不相見候下評には上國も御國結案議へ衆論多端に相建ち候て幕府

に於ても炫惑仕不知所適從共歎之噂有之併卷説にては信考にも不相成候故當藩政府へも相糺し即別紙植田寺尾へ掛合之返書其儘差送り懸御目に候此紙面にては上國向埒明不申形狀御推察可被下候御國は彌持久待敵之御方略堅固に被相建候て此際に當り候て闔國兵士倦怠遲慢之色を生じ不申様益御作興有之度就ては爰表滯在一達も御國之氣脈を承け尙以堅忍不拔之儀は勿論奉存候只々當表へ之長滯留御物入も不容易事に付關戸邊成りと一步相答み幕令を待候へば御物入の廉も相減じ此迄之面目も革り候て可宜哉との議大夫を始め存附も有之候處側はら案思候儀は何分即今幕府も御國と壘を對し息を詰め睨合候場に候得ば御國方一步にては相答候時は幕府には氣勢を張り御國兵氣は遲緩仕候様に共有之候ては眼前之小利を視て大利を失ひ候事とも可相成哉と此邊には大夫を始苦案罷居候儀に御座候彌持久と相決候節爰許滯在一達之進退豫じめ及御掛合に置候間前件申陳候御國と上國形勢御斟量之上宜御駈引可被下候萬一關戸邊迄相答候儀に被仰付候とも岩國へ御掛合彼此前弘より御手數

をも經候事に可有之故其御運び被成置度候併し當節之幕令は所謂時雨のことく御座候得ば今日ヶ様申述煩御廟議を候共明日直様何とか之幕令相發候も難計此邊の幕狀兼て御承知にも相成候はゞ此表出先之面々幕情に先見無之儀定て御疑念も有之間敷何も御地の御指揮を相同度候間早々御答可被仰下候尤兩大夫を始一達中月俸其外當正月一杯の御仕向にて其餘は何こそ御手當も無之最早當月も今纒かに相成手之元差問候間此段御藏元役被仰合早々御仕送り相成候様可申進旨兩大夫被申付候此件逐一御當役中へ被仰上御指揮可被下候略

正月二十三日

(六戸の書)

前上國之模様も于今相分り兼種々議論も有之よし乍併古今未曾有之絶大事件且明暮諸向繁忙之際にも有之旁推察いたし候へはいかにも左様早速に可相運事にも有之間敷待ものゝ心には寸刻も被差急候へども於彼方は諸向異議有之のみならず早急相運兼候も尤之事哉と奉存候然處於爰元只様長滯留相成候に

付ては御雜費彼是不容易儀にも有之不得止次第には候へども奉恐入候次第に付御國境迄引取罷在候てはいかゞ哉と申議論も有之此も尤至極御雜費相省候爲には可然事に御坐候乍併去冬歸國御沙汰相待候様にと監察より達有之候節申出置候行懸りも有之詰り候所今纔か二月中歟遅し三月中も相待候へば何と歟模様振は可有之且只今引取候ては御國人氣之緩に相成候而已ならず只今迄爰元罷出居候ものも一統退屈之氣を生じ再び越境にて出候儀に付懸念も不少只今之通居懸り敵軍之中に被圍罷在候へば出先之者も怠氣不生且於御國人々奮興の氣も緩み申間敷候此所深く懸念就ては御雜費入には奉恐入候儀に候へども小利を視大利を失ひ且大害を醸し候次第にも立至取返し不相成候ては今日迄之刻苦も畢竟水之泡と可相成哉左候へば遅し二月歟三月中には結局にも可相成候へば夫迄之所は小生ども動搖無之様有之度儀纔か自他國一境界之進退にても人心之關係は不容易儀に可有之且又御存之通於爰元諸價高直には候へども夫をば事といたし不申儀は隨分人心を買候事不大形千金を費せば萬金

の功能有之萬金なれば十萬之功能有之事にて此儀は鳥渡不相分様に候へども申立候へば下手之長談議廣澤兄杯には頓に御承知に可有之事に御座候尤御國に於て諸口出張其外彼此多端之御雜費中小生杯今一二ヶ月も滞在候ては此また不容易御費にも相成可申此儀は幾應にも承知決して夫には構ひ不申と申譯にては無之候へども今一二ヶ月の費を厭ひ大利を失ひ大事を生じ候ては誠以死とも不瞑目次第に可有之左様候へば何卒篤と其段被思召分至當公平爲國家深重に御熟慮御評議を被遂被下たく奉願候御雜費之儀に付ては其引受役方にては隨分八ヶ間敷儀も可有之推察仕候所より右等氣兼論も有之御國にて之御心痛は隨分承知不仕候にては無之此儀も篤と御承知可被下候尤登坂論に不相成候へば用心金等は前度より少々減じ候ても不苦哉賄方并に人夫其外諸勘渡は餘り減じられ候ては困り不申にも無之此等は不申上とも疾より御承知には可有之候へども爲念申上置候委細は御用狀にて小田村赤川より可申上候得とも右にては不盡所も可有之哉と懸念旁右細註之心得にて御内々小生よりも申

上置候尤此は御國之御議論も可有之何と歎御差圖可被下奉待候出先にて模様も出來候ては差懸り境上迄可引取機念にも相成候へば關戸へ急に可罷越も難計候へども小生共見込にては御國も持久出先も持久こんくらべに睨み合只今は容易進退不致方可然事と奉存候乍併機會之來其間不容髮儀に候へば時機見合候て進退は自由にいたし國辱不相成様取計可申段兼々御許容被成置候へば可然事共には無之哉差當り懸合等十餘日懸り不申ては一事之運も六ヶ敷に付此等は殊更御推察被成置被下度奉存候先は御狀細註之心得にて御内々此段申上置候餘は御評議次第と奉待候恐惶謹言

正月二十二日

備 後 助

再白尾兩老代り之事并二閣上京等之事は小田村赤川より委細可申上に付不申上候上國にては永井杯は苦心いたし候よしいづれ此大事件容易に決議可相成にも無之夫位はいかに待ものゝ心得にては推察いたし不申ては不相成千萬一三月に相成候ても爲何沙汰無之とも少しも於我國退屈する事は無之

千百年之久しきもこんくらべにて押し勝候心得專一に奉存候二三月後の様子次第にて境上にて待命候儀も可有之必竟最前歸國之達し有之候節申立置候儀は御國內外之形勢に相當り候儀にて於彼も此位は可申立筈と申居候との事廣澤兄にも御承知に付決して此儀は小生見込に御不同意は無之事と奉存候尙も公平至當の御評議相待候間御仰聞被下たく奉希上候

先日申上候長防士民申談書取は追々御添削被成下候哉御様子御聞せ被成下度候様奉願候已上

宇 右 衛 門 様

侍 史 下

藤 右 衛 門 様

内 呈

二十五日公小姓大庭此面を廣島に遣はし在藝使節に酒肴料金二十五兩を賜ひ其勞を慰す二十七日曩きに上國に赴きたる木戸貫治品川彌次郎等は廣島に着し前

二十二日幕奏に對し下りたる勅諭内議の分并に栗山俊平宮川六郎より紀州侯に呈せし建議書等を齎し來る勅諭は第十七章に詳見す建議の要旨は公父子を江戸に召致して退隱べきことを論じ紀侯建白の根元を爲したるものなり在藝使節は未だ幕府の奏疏を詳知せざるも勅諭に依り之れを考ふれば幕府が將に下さんとする處分案は略推知すべきを以て翌二十八日山口より其勅諭を報じ來るものと稱し演說書を作りて藝藩に致し意外の嚴達を蒙るの虞あることを説き幕府の奏疏如何を知らざるも幕府の處置叡慮に齟齬するなきやと爲し事の真相を聞知せんことを迫れり

(演說書)

別紙寫一通國元より急使を以致報知定て於尊藩頓に傳聞仕候事とは存候得共尙爲心得申越との事にて偕々彌別紙之趣に候得ば實に闔國意外之御沙汰に可立至士民一統驚愕仕此迄主人父子底意士民情實共逐一縷述仕り於大小監察方も巨細被聞召届候御甲斐も無之儀孰も仰天致居候様子に御座候併道路之説全取留候事は無之萬一虚説歟も難測候得共追々入御耳置候通國情切迫之砌虚説

ながらも懸念仕候故鳥渡及御聞繕候彌右様之御沙汰共被仰出候節は國內鎮撫も行届兼遂には御沙汰承伏をも仕兼候事にも可立至哉尤朝廷への奏聞書は如何可有之哉未拜觀不仕候得共朝廷より被仰出候御文面に就き推考仕候へば幕府御處置振叡慮とは齟齬仕候歟とも相見へ旁疑敷御座候に付彼是御聞糺之程相願度毎々御面倒には候得共國元よりも態と申越候儀故何とか返答不申遣候ては彌一統不安心に存候に付何分之處御聞せ可被下候以上

藝藩は此書に對し三十日書を小田村素太郎赤川又太郎に復し告ぐるに事の初聞に屬するを以て未だ其虚實を決すること能はざるの意を以てす二月一日藝藩書を使節一行に送り閣老不日廣島に下り後に小笠原壹岐守なることの報あり大目附兼外國奉行永井主水正尙志大目附室賀伊豫守正容勘定奉行兼大坂町奉行井上備後守義斐外國奉行兼軍艦奉行木下大内記利義目附牧野若狹守小林甚六郎使番酒井數馬石川八十郎曾我權右衛門奥祐筆組頭片山與八郎奥祐筆湯淺貫一郎佐久間三藏等之に隨ふべきことを告ぐ既にして五日に至り幕府の奏疏在藝使節の知る所と爲り其の我れに下さん

とする處分案を明かにすることを得たり使節は直ちに書を政府に致して之れを報告し且つ此處分は素より我が服従し得べき所に非らざるも使節は命を受けて直ちに之れを拒むと一旦退きて更に之れを拒むと孰れか最も利なるやを豫定せざる可らず其事極めて重大なるを以て併せて政府の指揮を請ひ使節の意は後者に在ることを陳述せり蓋し受けて而して直ちに之れを拒むは快は則ち快なるも過激の動作たるを免れず故に頃來の經過と薩人士持等の勸告とに考へ一旦退き更に之れを拒むを以て我に利ありと爲せしなり

(小田村赤川の報告)

態と以急飛得御意候別紙幕府奏狀脇方より相洩手に入候故即差送り御目に懸候先般得御意候都合に候へば閣老以下之幕曹今明日内に着藝難測即別紙之趣を以て結局論を申渡候は眼前に相見候處右請込萬難相成は従前の御決議にて兩大夫を始め出先之面々此こそ必死を期し羽根戻し可申は勿論之儀にて孰も其覺悟を極居候得共右幕令を相渡候期を彌手切之場合と見切り歎願往返之手

數も丸に差休直様御國に於ては争戰之御手組に相成可申哉但しは右幕令は暫時預り置一應國元へ布告仕見候とて穩かに引取又々當表迄出候て彌國內士民等納得不仕故決て御引請仕候様には不相成と申斷然はね戻し可申哉當幕令書面は乍恐一昨年十一月御上御自判書に付斷案を決候由に被相考各御自判書は士民情實を口に籍不申ては塗抹仕様も無之哉に相考候間其ヶ輪に就論候時は一應取歸り士民共へ申聞け候處迎も納得可仕勢に無之に付御請は彌不相成と申切り其場を御手切と致し候て兩大夫を始め出先之面々死處を覺悟仕候儀は如何哉此間大庭此面歸便に申含置候通薩人杯其他も此邊を懇切に申すゝめ候尤御國に在りては今更他之周旋も扱も御待被成儀に及不申論は孰れ承知に候得共却て此迄之御條理に付相考候ても一先暫時幕令を預り歸候上又々罷出候て拒絶之談判に及候儀可然哉にも被考候其内藝人を以て永井其外へ迫込之手段は無遺様相運び可申候得共詰り之處置振一應及御懸合置候早々御答被仰越候様兩大夫被申付候間御當役方へ被仰上何分之儀御急報可被下候恐惶謹言

二月五日

素 太 郎
又 太 郎

宇 右 衛 門 様

藤 右 衛 門 様

誠 一 様

與 次 右 衛 門 様

追啓

別紙幕府奏狀切齒憤惋之至閣老共より相渡候節は即座に紙面をも引裂き候て閣老之顔面へ擲付候位にて其席に就覺悟を極候へば如何にも壯烈にも相見へ御國之膽氣も右一擧にて相顯候様に候得共却て狂人之體に幕府より取扱共仕候ては此迄心膽を碎き御父子様御誠意國內情實等水之泡と成り數通書取にして幕吏へ突込尙藝藩へ責詰も皆々反古に成殘念に候故此邊も可慮事と奉存候本より右様激烈心乏敷退縮未練之情より前件之議を建候には無之段は再應閣

老應接にて右幕令をはね戻候任他人に譲り不申處にて御承知可被下候尤幕府にては京師暴動以下の事に就結案を定め候得共京師暴動之由て來る處は幕府之罪と申す處は更に合點參り不申故此を指し付藝人杯へ吹込幕府自から耻入候迄に突込候積りには御座候得共幕府に於て已に奏聞をも經候位なれば挽回も六ヶ敷可有之候得共今一層條理を盡し曉諭の手を竭可申と奉存候決して早まり候歟又は幕令之無禮に暴怒を發しかゝり込候事は仕間敷候此邊迫候得ば迫る程從容之處置肝要と奉存候此意も爲念御含み入置候已上

二月五日

又 太 郎
素 太 郎

(小田村より木戸へ書翰の一節)

堂々たる長州豈に一浮浪之論位にて尺寸之地も他人に附し可申哉彌必勝待敵之策懇祈仕候間急度御充實之處有御座度候小藩にても今治島原杯五藩程薩論へ同意仕居候由折角土持申分此度下藝之閣老兩大夫之間へ暴令を傳可申處

於御國に御請無之は勿論之儀に可有之候得共一應幕令書を御預り被成置御國迄被引取候て又々御出浮に相成り何分此幕令にては國內折合兼候故沙汰之御書取は彌御受難仕と被仰懸候方可然哉に存込最此は土持一人之論に無之同意之五藩同様之見込に罷居候由申聞せ候右往復中には又々日數も相懸り幕府之暴斷世上へも弘く洩候故列藩にて幕府を責難に及び候機會も出來候様可相成に付爲皇國此場を一先御忍び被下度云々申居候此意味は入組候儀故大庭氏口頭より直に御聞取可被下候(二月三日夜半)

第二十章 接幕事件 (其二)

小笠原閣老着藝○使節の意見書○第三の内々演說書○國貞出使○藩政府の決議○使節の追申○三支侯吉川氏并に老臣出藝の幕命○小田村歸國○彦根藩人の來岩○木梨歸國○將來應接の方針○小田村着藝○有志の告冤書及上書○三支侯吉川氏并に老臣の出藝に關する藩議○藝藩世子上坂の策○寺尾龍野の來藩○藝藩の内情○公父子孫三支侯吉川氏并に二老臣出藝の幕命○藝藩の異議○幕吏と應接

二月八日閣老小笠原壹岐守等廣島に着す閣老は幕府の奏疏に基き廢削の命を以て我に臨むや明なり故を以て翌九日使節は一面に書を藩政府に致し一面に演說書を藝藩に致し藩政府に向ては幕命に關して取るべきの手段を陳べ大要疊きに稟申する所を反復し殘務整理の順序を告げ藝藩に向ては更に我が冤罪を纏陳し甲子事件の罪既に其處分を了せるの今日に於て幕府が事の根元を度外に措き獨り

枝葉に涉り重て嚴譴を下さんとするの不條理を説き之れを幕吏の聞に達せんことを促す藝藩以て彼我に利ならずとして之れを辭す使節の演說書を藝藩に致すや植田乙次郎來り告て曰く此書を發表せば互に抗争の態に出ざるを得ず永井主水正にして在らば往日以來の事情に通せるも此人未だ來着せず他の幕吏は尙事體に生硬なり幕府にして道路傳ふる如き裁斷を下さん乎吾藩亦容易に之れを傳達せざるべし且つ閣老下着後未だ何等の意を漏さず今にして此書を出さざるも時機に後るゝの虞なしと因て演說書を還す使節乃ち暫く之れを收め永井來着の比に更に之れを藝藩に致す藝藩傳達すること能はずとして再び之れを還し來る但し竊に之れを永井に示せしに永井爲めに憂色ありしと云ふ

(小田村赤川の書)

態と得御意候春寒除兼候得共各位御多勝可被成御所勤と奉大賀候然ば閣老一達も彌一昨日藝州へ到着夕方直様揚陸着宿被仕候様子未だ爲何達も無御座候得共此間得御意置候奏聞書之旨を以發令に相違も有御座間敷哉其内不取敢別紙之通當藩政府を以て突込置何の道廢削令は難引受之趣意切迫に申入幕府役方閣老以下自然と孰へも貫徹爲仕候様托置候乍去先般も申述候通已に奏聞をも經候上にて閣老西下之儀に候へば萬々挽回も六ヶ敷可有御座候得共精力を竭し手段を極め挽回の術を謀り候は出先之面々之職掌と相考候故今一層心膽

を碎き手術を盡し見度と一決仕候右に就ては此内得御意置候通幕令は閣老相達候即座にて拒絶不仕候て難引受條理并に御國內情實一通り及辯解置一先幕令預り置候とて兩大夫を始皆々當地引拂手廻り其外無用の人は惣て暇を遣候て改て兩大夫并に各共單騎同様にて再度當表へ出浮候て閣老杯へ及應接に云々之御沙汰振領内布令も仕見候處中々承服可仕體に無之故不及是非御返却仕候間此餘銘々共は如何様とも御處置に任せ候間御存分を被遂度と身命を擲出候て死處を覺悟仕置候儀可然と奉存候幾重も廢削の幕令即座に突戻し閣老以下在席之幕吏を罵り死に就不申は壯烈の風にも乏敷ヶ輪之見入も如何に可有之と側はら痛心も御座候得共御父子様御誠意御兩國之民情も十に八九處は貫徹仕り天下列藩へも漸く明白に相成候處を末一段にて早まり過ぎ功を一簣に虧候様にては殘念至極故ヶ輪之見入へ拘はり肝心之御誠意の瑕瑾を仕出候も口惜敷次第故何卒結局幕令引受方は連々得御意候通り被仰付度奉存候右幕令を一先預り廣島を引拂候得ば此迄借受候寺院其外挨拶并に破損處仕戻し等も

立派に形付度候左候節は彌御國之人望も景慕仕候儀深く相成り隨て御正義之道感受仕候者多く相成り可申候此邊之模様振并に出先の見留一通り書中にては難盡意も可有御座に付態と佐伯太郎左衛門早打を以て差返候間委曲同人より御聞取可被下候先便申越候趣も御座候得共彌閣老着藝之御報知旁太郎左衛門へ申合候て爲歸候間御當役中も直に御聞取被成諸彦にも何角御尋之御便利に可相成と之下意にて兩大夫太郎左衛門被差歸候右得御意度如斯御座候恐惶謹言

二月九日

素 太 郎 (哲花押)

又 太 郎 (淵花押)

二白先便千兩之辻被差越候處自然一應引拂之儀にも相決候へば寺院仕戻し尙謝物彼是御銀引足不申急速役人衆被差添御仕送り可被下候別紙土持佐平太より差送候紙面にては閣老も廢削議に取極め西下は仕候得共現場追々藝國迄の突込書を見てあくみ候共歎之様にも被察候全く宮川六郎建白に被歎

候て手易く廢削も出來候様に思ひ入候共乎土持其外共之所にて今一層張込候へば又々幕議變遷挽回の出來ぬ事は有之間敷と之考に候得共是は少しも可恃儀に無之御國は何迄も必戰と御覺悟可被成候挽回之術に焦慮苦心仕候は御出先之任と存込候間旁早まり不申様に被仰付度候即座に拒絕いたし手か切候ては士民の歎願之道も絶果申候元來乍恐一昨冬御自判之御書被差出候此を反古に仕候手段は士民之口を借り不申ては難打消此に甚困窮仕候此邊之苦心被體認候てケ輪より過激之儀出來仕候とも精々御鎮撫肝要に奉存候此件御急答被仰下候様仕度候以上

宇 右 衛 門 様

貫 治 様

藤 右 衛 門 様

誠 一 様

與 次 右 衛 門 様

一簡奉敬呈候春暖之節相赴候處先以御三殿様益御機嫌克御座被爲遊恐悅至極に奉存候將また各位愈御靜寧御忠勤可被爲勵恭祝不過之奉存候二に小生輩無異滯藝罷在候に付此段御安慮可被下候扱又一昨七日朝幕軍艦四隻閣老以下乗組着藝晩前揚陸いたし候よし尤永井は未だ着いたし不申由にも相聞へ人數は都合四百不足位之事未だ何とも彼より物音は無之彼是下地探索手組等をもいたし候哉乍併自此は先づ一本書を以藝へ突込永井へ懸合を付候覺悟に御座候て已に今日藝吏へ懸合いたし置候扱また大庭此面歸便に先便飛脚を以申上置候通り結局一事篤と御高案被成置被下たく呼出を懸け候節は素より緩々と返答及不急不迫彼是見合候儀は申迄も無之候へども沙汰筋達方之節即席にて小生輩押返し之儀は素より最前よりの覺悟にて至今日何かと異論可有之譯も無之候へども已に薩藩人等申分も有之いかにも此方には切迫に不相成候て一步の餘地を明け取計候へば士民一統歎願之筋も相運び且時日遷延中には薩其外

周旋の手立も可有之畢竟幕令一旦差出候上ならでは承知いたし様も無之筋に付別段歎願と申事も相成兼候次第に御座候大坂なれば右様の運も六ヶ敷候へども當表は御國境纒か十里位之所に付可相成は去秋之通士民一統よりも藝城迄老成人を選び書物爲差出候方よろしく最早無益には可有之哉に候へども戦争は彼より手を爲出候様に取扱ひ夫迄は飽迄も自我は條理を追ひ手段を盡し不申ては不相叶次第と被存候間何卒此場に至り候ては尙更奮激に不相成様不急不迫從容に御處置被爲在度御事と奉存候事に御座候尤小生杯幕令相達候節は此等重大事件に付去冬三監察御尋之節も士民情實迄委細申上被聞召届候儀にも有之就ては私ども此儀屹と御請合申上候儀は不相成何も先一應御預り仕歸國にて篤と説得相加へ見可申いづれ何と歎改て御答可申上と申置候へは可然事哉と被相考申候素より二件引請不相成は申迄も無之候へども右様にして先づ其餘地を置き關戸邊高森邊迄も一旦引退き改て歎願と出懸け士民よりも同斷幾度差返御取上げ無之と申付候ても此方よりは幾度も々々根強く鐵面皮

に押返し歎願彼より手を出し縛し候とも斬罪いたし候とも頓着なくして歎願と出懸け御國にては士民よりも同様に付削封は兵力差向不申ては不相成様にいたし候へば自彼軍勢をも可差出萬一侵境候へば此は狼籍者に付擊殺候て不苦節角此方歎願最中自彼右様鹿暴の所置可有之筈無之と申處よりして防戦之御手始に相成不申ては列藩人望にも相關し候儀に付此處篤と御考慮何卒最早條理には及不申との短氣無之様御取計被爲在度御事と奉存候天下萬世に對し青史に被載候て慙不申處を目途にいたし度事に御座候

且また爰元滯在中にては下部迄多人數道具類等も混雜且寺院借受賄方其外近邊世話に相成候もの迄へも厚く謝禮いたし一旦藝城引取候へは寺院其外近邊町家へも迷惑を懸け不申譯にて人望にも可然且多人數之下部等は一應御國迄連歸り眞之要用之もの一兩人を選び候のみにて其餘散し歸家爲致不申ては大坂なればいたし方も無之候へども近隣に候へば此儘にして爲縛候様にては無益にも可有之再び歎願として藝城へ出懸け候節は少人數にて不用之備道具は

不相用草津へ船住居之根據か或は關戸等根據にして罷出候方可然哉と被存候間此又篤と御考慮被下たく尤呼出し付候ては下地追々突込書尙談判も有之旁時機見合不申ては輕卒に罷出不申候へども自彼も多分輕卒に發令にも及申間敷彼是雙方人氣列藩様子等探索之上發令之運にも取懸り可申哉に相見へ候へども右等結局議論は何卒別して條理正しく凡その心組は付置不申ては不相成に付此度御用狀にても申越候に付委細御承知被成候て御評議御一決早々被仰越被下度奉待候尙佐伯太郎左衛門差返し候に付篤と被聞召被下たく奉存候爲其如此御座候頓首謹言

二月九日

備 後 助(璣花押)

尙々幾重もく本文御熟慮公平至當の御處置に御評決相成度奉存候尤御國御様子も可有之出先にて之取計方彼是御推量被下度候以上

良 輔 様
數 馬 様

孫 七 郎 様
貫 二 様
宇 右 衛 門 様
藤 右 衛 門 様

追啓

持久策決定は申上候迄も無之御疎無之との御事安心仕候乍併兵士退屈の氣を生じ候は第一の憂に有之就ては退屈の氣生じ不申様御慰撫御心を被爲用度奉存候乍恐兩君上輕行小隊にて屯所々々御廻在とも被爲在候てはいかゞ哉此等元より御疎有之事には有之間敷候へども思出し候儘申上試候進疾者退速なる譯にて餘り最初銳進に候へば持久に堪兼候て退屈有之間敷とも難被申就ては屯所々々いづれも紀律は嚴肅にいたし置當非番を以非番等に當り候ものは氣をも慰め候様有之度事共には無之哉いづれ持久は四民各安其業諸口之嚴備は兵士勤之其外は急變出來之上兼て之約束を奉じ四民いづれ

も持口を守り候譯に無之ては久を持ち難く哉に奉存候此等御疎は無之御事に候へども此また思出し候まゝ申上候間御笑草と思召御取捨奉願上候也頓首

(藝藩に出せる演説書)

此度御當藩迄小笠原公御一達御到着弊國結局御處置可被仰渡由に相聞尤御沙汰筋は未發に承知可仕様も無御座候得共道路之説にて云々之被仰渡可有御座由にも專承り何共取留候儀には無御座候得共億萬一も聊右様之御沙汰被仰出候ては誠以驚愕之次第備後助を始諸隊重立候者より申上置候主人父子誠意并に闔國士民一統臣子之分無餘儀情實等件々巨細被聞召届御落意御承知被成下候御甲斐も無之主人父子に於ては恭順謹慎天幕之御沙汰を大切に奉存候得共士民一統無餘儀情實申立候節は主人父子心底にも不任勢にも可相成借々主人父子從來之赤心二國民情は連々尊藩迄及陳述に尙備後助永井殿まで十一月二十日御應對席にて御直に申上候通り京師暴動之始末主人父子不存儀とは乍申兼て示方不行届にも相當候故東西藩邸御取揚げ官位御稱號等被召放之旨も尖

に御請申上三年掛り之今日迄も恐懼謹慎に引籠居暴動之巨魁は速に嚴重申付
 參謀之者も夫々令處置一昨冬尾州督府之御檢證にまで相備候儀に候へば暴動
 之罪は已に歸着仕候處有之主人父子示方不行届之御譴責は藩邸御取揚げ官位
 御稱號被召放候處にて被爲濟此餘は最早平常之御沙汰可被仰出と計り國內一
 統奉渴望候砌今般云々之通被仰出候ては乍恐苛刻之御扱振と悲歎泣血孰も辭
 塞之下情開散可仕期も無之此末如何可相成哉と役方之者共痛心此時に御座候
 畢竟攘夷期限御布告等列藩へ之御信義も明瞭に相貫き公武御合體之御姿何迄
 も御動搖不被爲在候へば京師暴動之可起様も有御座間敷候現在馬關攘夷天朝
 よりは監察使も被差下候處幕府に於ては御齟齬之御沙汰をも被仰達主人父子
 東西奔走國力を罷らし人命を損し大敵之鋒先に立候儀も乍恐幕府之御籠絡に
 係御愚弄に遭候形と相成りいかにも迷惑奉存居候次第にて達智明才を以御照
 覽被下候へば其是非曲直之由て判るゝ處は御洞察も可被爲在但公方様には江
 戸御城并二條御城に於て主人へ御直に上意被仰聞候旨も有之乍恐御代被爲替

候儀にも無之根元之參り懸りは可被知召御事候半と奉怨慕候次第畢竟根元之
 處へ御反省不被爲在只管京師暴動之枝葉而已へ御着眼被成候故歟と頑固愚直
 之民心兎角疑惑仕居俗々民口難壅ものにて上已上元之大變其外幕府重立候御
 役向毎々御進退も有之何角と不穩御模様にも被相伺尙外國人御取扱之始末近
 くは京坂御混雜等乍恐如何之御次第に候哉と偶語仕候模様にも相見何分にも
 京師暴動は不一方奉恐入候次第に候得共前文之通其巨魁參謀等處嚴刑御詫之
 次第をも相立主人父子不行届之儀は已に御譴責も被爲在三年掛り謹慎罷在候
 へば此餘弊國御處置は京都暴動へ計り御着眼不被爲成候て其由て來る所へ御
 反省も被爲在候はゞ於幕府御忠恕之道も相立御寬典之叡慮も尖に貫徹可仕事
 に可有御座候へば辭塞之下情も一時に開散無此上難有次第と士民一統懇願罷
 在候此段乍毎々國內情實不得止處を以て又々委細に陳列仕置候間永井殿には
 下地之御手續も有之且申立置候次第孰も巨細被聞召届被下候儀に候へば此段
 御耳へ被入置被下度相願候尤情實切迫之餘言語文字等には忌諱に觸候儀も可

有之哉と可成丈けは差控候得共先達て衷情底意無腹臆申立候様にと御達も有之情實有體不申陳置候ては萬一意味違の儀も可有之も難計左様候ては最早取返しも六ヶ敷候に付尊藩御合迄に申陳置候此餘永井殿方御役向思召も御座候はゞ御當地滞在之者被召寄御直に被聞召度候旁可然御取計被下度致御頼候以上(三月)

山口に在りては此月九日國貞直人命を受けて廣島に赴く世子實父の忌満るを報ず藩政府之れをして將來幕令に對する決議書を齎らさしめ十一日を以て廣島に至り使節に交付す要は廢削等の幕命決して受くべからずと云ふに在り決議書に曰く

(決議書)

一幕令決して不可受故強て抛ち置立去候はゞ此方にも顧みもせず退出すべし併し辭令丈けは何處迄も條理を盡し温順に有之度候事
 一 一身を潔する論は不宜可成丈け不死様仕り度如此様之御沙汰にてはとて人も人心居合不申に付決して御請は不得仕此以後は私共引取候て力の及ぶ丈け我

國の爲に可盡忠義段申置引取へし其内表に甘言を以遇し置陰に手を廻し召捕る事も御座候はゞ斬拂ても一人なり共歸國有之度事

一 病氣も凡そ目途あれば宜しけれ共格別其儀も無之候へば速に相對致し彌兵機相開候方可然候事

一 薩論は甚無覺束事柄に付周旋は彼の一心に任せ置我は追々張込み居候邊を以始終頑固愚直第一なり尤薩盡力之目途もあらば暫く病氣に相成居其中に運び吳候様斷り候ても可然候へども請込之論は決して不同意なり

政府の決議書は使節が九日を以て政府に致したる意見書と相伏して雙方に着せしなり是を以て其二十二日使節は更に前書に盡さざる所を條列して之れを國貞直人に托し政府に進致す政府附箋して之れを是認し二十四日之れを廣島に還付す幕命に對する方針是に至て全く定まる其書に曰く

一 薩人土持幕令一應請込之説を申立候得共國情民心決して難折合邊を以斷然辭之

但假りに預る論は全く土持之氣付より起り候譯にては無之素より暴なる幕府ゆへどの手に出候歟預め知るべきにあらざれば再三工夫は付ケ不置ては不相叶就中一先引取之論は前以御國へ懸合不置ては大きに人心之疑惑を生じ候件に付萬一此手に出候節は是等之策にも出る事あらんかと相考申越置候譯なり

一藝人へ話に仄に御決議之趣を承るに餘程暴斷の由にて決て御請難相成先達て貴藩迄此書面差出置佐伯太郎左衛門持歸候書付と申掛候處藝人微笑して曰其御勇決は乍御最左程切迫に不被仰とも猶手段不被盡と申すにても無之畢竟一浮浪の手に成候位之事なれば諸侯の力を以取返し不相成筈も有之間敷此書面は時機未だ早し能き場合あれば弊藩より御氣を付け可申とて未だ不請取候事

一閣老下藝已後病と唱へ更に他人に相對も不致我は勿論藝藩へさへ何事も不申掛承井を迎ひに遣し二月十二日比永井漸く來て又々戸川を呼に遣し候杯

色々不調子之様子に被相伺最初宮六之愚論に鼓動せられ浪華を發し候時と下藝後現場の様子は大きに意表に出候事も有之哉に相見へ央は當惑之體共には無之哉と被察候只今之形狀にては應接も中々隙取可申に付此方には從容不迫之心得を以徐々と手段を運し可申一旦應接に臨み突然暴令を下し候得ば舊冬大夫自判書差出候時之振を以國情を露呈し幾應も難請込情實を申述ぶべく候へば彼曰一昨年尾州督府に對し大膳父子自判書之趣も有之旁其方共一心に任せ候譯にも無之是非一應取歸り士民共へ説諭すべしと申懸るに於ては追々申立置候件も幕藝ともに徹底致し居萬々難請込は分り切りたる事ながら御自判書之趣も反古には不相成旁取計苦敷に付我曰如此の御沙汰人心不居合は必然之事に付御本書可取歸譯には參り兼候間御寫しなり共預り一先歸國説諭仕見候半此時雙方共預り云々の自判の證據もの取替し置と申置暫時宍戸高森迄なりとも引取宮市山口迄も曳取候ては大きに人心の疑惑を生ずる故なり

但當時藝國の人望大きに服し居候故決局に至りては益々深切を盡し度實

は引取をしほに旅宿を初め夫々之仕拂等も仕り他より喙を容るゝ事無之様一入人望を取り可申猶又借張之中小者杯は不決心之者も不少夫を見すく縛に爲就候ても不便は不能申却て後日の害にも可相成に付引取を相圖に右は勿論戦心充滿兵事之用に堪る者は一人にても御國に殘し置大夫其他兩三人單騎位之旅装にて藝へ参り如命一旦歸國説諭を盡し候處父子に於ては昨年自判書之通り天幕之御命令更に違背仕る心底は無之候得共何分闔國臣子の情實決て折合不申に付とても御沙汰難請段は幾應も歎願書面を以突込み候積り之由萬一も未だ着藝不仕に半途にして幕吏歸坂仕様之事あらば藝を以爲取次候ても宜敷詰り浪花迄も持参可仕心得との事併し右は常に出候節之條理なれ共幕府孰れ之手に出候も難計突然抛ち去る様なれば此方にも顧みもせず引取る事もあるべし其他臨機之取計は其場にあらずば預め期し難しといへども毛頭國辱を取る様之處置は決て不仕安心致吳候様との事

一沙汰書を以閣老顔面に抛ち候は一通り愉快之様には候得共狂人之所業に等く我れ曲名を受る而已ならず彼曰此者どもは狂人にて引當には不相成追々の申口反古同様に付最初より應接仕替候半杯申説起り候ては不相濟儀に付右は勿論一身を潔する様之事は不仕一身の仕末は縛も斬も彼之爲す所に任す心得との事

一京師變動之節杯も我より先立ち過激に出候故無實之曲名を被申掛候徴も有之に付此度こそ我は十分に條理を盡し彼には飽迄曲名を與へ可申様有之度は是非兵機は彼より發らせ候様仕り我は間隙なく兵備を堅ふし彼之亂暴を防ぐ心得に相成我より先ちて暴發無之様との事

但藝城には諸藩士も澤山入込居候事故一向長州には無理無之斯迄條理を盡し候に實に理不盡千萬之幕府無致方暴論なりと云はせ候様仕り度候事

一藝城在留の諸藩士之口氣を仄に聞くに中折れ之説を唱へ候様相見候其趣は

眞削土こそ出来不申候得共削封之名目丈けなり共折合武鑑上に於て少し幕府之顔を立て遣し候へば海内無事に治り可宜抔申底意らしく被察候處未だ一言も申出し候者は無之萬一右様之周旋致し候者有之時は我曰全體長州は第一に名義を重んじ候國柄故千載青史上之名目猶更大切に考へ敢て難折合邊を以斷然辭するとの事

(藩政府附箋)

本書六條とも致承知候就中第三箇條中暴令差出候節は兼て決議之通相斷不得止場合に候へば大夫自分閣老眼前にて寫取是を以一先歸國士民共へ説諭可致と申置暫時引取又々藝へ參り彌難折合邊を以申込候へば幕府よりも此上は一戰と申掛るに相違無之に付此方には然れば不及是非儀に付一同國元へ引取爲自國忠義を盡し可申と答引取候方可然と御決議相成候事

但閣老自判を取候事六ヶ數猶彼より寫し吳候書面よりは此方に寫し取方可然候事

時に小笠原閣老は處分令を傳へんが爲み三支候吉川監物并に老臣宍戸備前毛利筑前二人を廣島に招致せんとし二十二日を以て命を藝藩に下し之れを傳達せしむ藝藩未だ命を奉ぜず二十五日閣老更に嚴命を藝藩に下す翌二十六日藝藩使人を發し幕命を我宗藩及び三支岩國に傳へしむ山口徳山岩國へ神尾尙太郎山香篤之允長府清未へ若月準二戸島龜之丞

(小田村赤川より山田宇右衛門其他の政府員への書)

今朝飛脚來着本月二十四日御仕出の御狀拜見仕候(中略)直人様御歸着後之御到來有之御滞在中御示談仕置候廉々御附紙を以被仰報御地御決議之處逐一承知仕候殊之外降念仕申候其後爲差儀は無御座候得共去る二十二日別紙幕令藝藩まで相傳候様子に候得共藝吏考候處にては舊臘三監察引拂後之沙汰を待候て已に兩大夫も被殘居候得共結局に到り兩大夫へは沙汰も不仕直様御末家并に御國兩御家老を廣島迄呼出と申儀不條理にも相見へ滞在の兩大夫へ對し候ても不相濟儀彼是於内輪議論中兩三日も經候處昨二十五日亦々小笠原閣老藝藩重役被呼出二十二日幕令御國御末家様中へ通達延引之段及立腹候様之儀藝藩

不爲にも可相成杯罵り候様子即ち藝人も甚だ不快に存じ已後幕長間之取次は斷り當度之使者も不差立儀に決議仕候位に候得共此砌取次を斷り不申共折も可有之と一先使節仕立候丈は請込候由藝にも是等之事苦心不一方儀御察可被下右使節船行にて二組に分れ山口へ罷越候分三田尻より揚陸山口相仕廻歸りに徳山岩國を相勤長府へ赴候分は馬關より上陸清末を相勤候手筈に御座候申も疎に候得共早速三田尻へも御通達被成置道路無差支山口へ御引請有之尙御支藩様中へも御駈引被成置御答振り異同無之様前廉御示合置可被成候猶此等之議幕情并藝藩見込且御出先之兩大夫を始め從來之見込入組候説も有之紙上に難盡處不少候に付此飛脚へ差繼き一寸素太郎儀歸國にて直に申上候様被申付候間委細は其節を期し可得御意候只今之模様にては中々結局發令も埒明き不申儀と被存候先は藝使差向候件而已勿々得御意候様兩大夫被申付如斯に御座候云々（二月二十六日付）

品川彌次郎へ相渡候書取は同人拙生共旅寓へ申請相渡候御安心可被下候

長府領海漂流人之儀大坂より差圖有之是又藝藩に一應請取夫より小倉へ引渡可申由仍て藝吏兩三輩別に馬關迄罷下り漂客を受取直様小倉へ送り付候手筈に相成候右之使節も若月準二相勤候様子にて旁長府表へ早々御通達被置度奉存候紙外素太郎口頭可申述候

同日藝藩植田乙次郎寺尾生十郎より三支侯及び吉川監物并に老臣宍戸備前毛利筑前を藝州に召すの命ありたる旨を使節に内報す西川清六亦宍戸備後助の旅館に來り閣老の命を傳へ依然廣島に滞留せしむ使節乃ち直に書を山口政府に致して其旨を報じ翌日書を以て藝藩に告るに三支侯及び吉川監物并に兩家老は以前病を以ての故に上坂の命を辭し今に至り未だ快癒の報を得ざるを以て或は命に應ずること能はざるべしとの意を以てし且つ副使木梨彦右衛門に對し閣老より何等の命なきを以て其進退の命を得んことを乞ふ同日小田村素太郎は廣島を發して歸藩の途に上る廣島刻下の事情を報告し且つ三四の重要事項に政府の指揮を得んが爲めなり同時又別に使節の所見數項を述べて政府に致す所見の要は支

藩主等召致の命には應ずべからず離間の爲めに使節を疑ふべからず藝藩の苦心は察すべし藩内の士氣は弛むべからず持久對峙の方策を誤るべからずと云ふに在り

(小田村携ふる所の書)

一幕府決議件々紀彦杯より見入にては當表出先之面々過激論を相唱候故決議奏聞通りを引請兼候得共御國元政府にては左迄幕令を固く拒絶にも至り申間敷杯疑心有之哉とも被相考候遂には御出先之者を政府と離間仕候様の儀も難測候間此等之説入り萬々御疎は無之事ながら尙以御出先よりは懸念仕候事に御座候

一御末家岩國外御家老衆二人指付け廣島迄呼出之儀被相達此度不取敢出先之心附候儘と申し藝藩まで演説に及び置候通り必竟御出無御座儀可然哉と見込を付け居申候億萬一も不得止事御場合に至り候はゞ岩公共に候へば當表迄御出に相成候ても幕府より之暴斷御斷り詰にも可相成哉此儀も好み候事

にて無之候間可成丈けは去秋の通り兩大夫にて相濟候様被仰付度候事

一藝藩御國之間に立ち去秋已來心配候甲斐も無之候得共藝國に在りては有丈の力を以て盡し居候處何分先方無條理故遂に藝國苦配之實効も不相見其末幕府之嫌疑を受候にも至り今日從來共御國よりは藝國苦心焦慮能々御諒亮被爲致藝國苦心實効難被顯處に就き諸共に不足を不申出様有之度候事

一只今之形勢にては結局揚發に及迄は永曳き可申其間兵機張弛疾徐御駈引一大事にて永引候内に自然と情氣を生銳氣の撓み不申様肝要に奉存候事

一永引候儀は御國に取り候ては御利不少敵方客兵にては損も不大方儀故彌御内輪を被相固御國情向不平又は暴發け間敷儀無之様有之度候やはり永曳候内には御内輪之變動も生可申哉と此處相待候念は敵方にては十分可有之何分諸手一和一致肝要之御事に可有之泰山も蟻穴より崩れ候古語尤可慮儀に奉存候事

一敵方も此度之一舉三百年來之命脈に係り候儀故一生懸命と存込候て必戰は

勿論に候得共隨分大敵にて彌事に及候節も勅敵に御座候間必勝の策を被相運幾重も敵を侮り他日の悔を招不申様諸手へは篤く御號令有御座度候事

一彌御手切に至り候節迄は必ず早まり暴發抔無之曲名を不被爲負候様精々諸手へ被仰諭度且藝國も只今之通り御國より條理責に致置候へば自然事に及び候共紀彦共と鋒先を合せ御國へ打入候儀は仕間敷候故戰畧等荒都合申談可相成丈けは藝國人民に迷惑を掛不申様有御座度候事

一於出先に彦藩人抔面會の儀は岩國鹽谷鼎助共餘程辭退も仕候得共此段は兩大夫へ相談之上差圖を受面會且つ敵情探索之便利にも可相成考にて候間此邊疑惑説起り不申様有之度候全體ヶ輪より御本末間岩國抔は別物之様相心得候に付御本支離間を旋候向も有之此等之處打消候御手段肝要に奉存候間幾重にも疑惑説無之様御合置肝要に奉存候事

二月二十七日

時に岩國の鹽谷鼎助此月九日以來事を以て廣島に在り使節は前年尾張總督解兵當時吉川氏交渉の次第を詳知

するの要ありとして當路者の派遣を請ひし爲め此人を派遣せしなり彦根藩士田部全藏と云ふ者頻りに之れと會見せんことを請ふ鼎助乃ち宍戸備後助等に謀り赤川又太郡國貞直人と俱に之れに會す田部の言ふ所は幕府既に毛利氏の處置を決し之れを朝廷に奏し朝廷諸藩皆其處置を以て至當と爲さば毛利氏は宜く其命に従ふべし且つ彦根侯は之れが爲めに近日使者を岩國并に山口に差遣せんと欲するの意を告ぐるに在り而して二十四日田部全藏は田中三郎右衛門側目下部内記留守と俱に彦根藩主の内使として小瀬村に來りしを以て岩國に於ては新湊を以て會見の場と爲し翌二十五日吉川勇記今田靱負目賀田喜助長新兵衛出で、之れに接す田部等は竊に幕府の處分案を告ぐ洛下に在りては嚴譴を下すべしとの説多かりしも幕府は力めて寛典に出でたりと稱し藩主の意を以て岩國に説き之れをして幕命に服せしめんと欲す故に田部等は初より頻りに吉川氏に謁せんことを請ひしも遂に之れを辭し又其使命を述るの後ち幕令に對する藩論を聞かんことを求むること切なりしも岩國の應接者は其意の遊説に在ることを察し巧に之れを避け毛利氏は今にして再び責罰を受

くるの理なきことを辯じ吉川氏は徹頭徹尾宗藩と利害を共にし始終相離るゝの念なきことを説き其立脚地を明にし遂に彼をして空く還歸せしめたり蓋し彦根藩が此の如く内使を岩國に派せしは其實小笠原閣老の内旨を承けたるものゝ如し而して吉川氏の執る所今や確乎抜くべからざるの實を示したるを以て幕吏は頗ぶる其望を失ひたり

(廣澤より木戸への書翰の一節)

一彦藩人岩國へ罷越應接書一冊差送り御落手可被下候岩國は餘程確乎たる論にて今日に當り御支封様中にては第一之堅固にて實に不堪感銘次第委曲御熟覽可被成候幕之大失望は御兩國中正俗之差別無之日増一致一定之姿に付隨分十方に吳果可申可笑之至此往き如何之策に出可申哉奉存候幕は扱置御内輪においても俗論輩岩公に兎角依頼し廟堂今日之御確定論は決して岩公には御不同意抔と相心得居候者も不少哉被相考候事故右應接書之趣何となく萩地へ漏聞相成候は俗論沈滅之手段にも可相成篤と御勘考好御手段有之度

奉存候事

當時の應接書に據り其要領を摘記すれば二十五日彦使の云ふ所左の如し

(彼)格別之儀にても無御座實は今度御宗藩御處置之儀に付主人掃部頭此節要路に當り居候身柄にては無御座候得共内密承り及候廉も御座候に付折角岩國とは從來之御好義も有之御事に付御内々御處置振り之儀に付未發之儀にて御承知は被爲在候御答は無之候得共巷説共御聞及之事共は無之哉實は幕府に被爲置候ては極寛大之御趣意に候得共種々流言等も有之自然御貫徹不被爲在候様之儀も可有之候哉と主人に於ても至極御氣遣被申候御處置之儀は十萬石之御減祿御父子様御隱居御蟄居御跡目之儀は御縁類之内に可然御方を被仰出候様被仰渡候御治定之由左候得ば跡々之儀は岩國様御末家様方御引分にて御取をさめ被成候様被仰付右等之趣一同土州様肥前様御縁類に付御同様被仰渡岩國様猶御三末家様方被仰合候様猶岩國様方へも御兩藩へ被仰合候様被仰渡候由且又乍失禮岩國様三御末家様何とか御振り振りも

有之筈に候得共一向何之御メりも不被仰付猶世上よりは御宗藩之御家中正
 激之御立派も有之様申傳候處所謂激之向へも何たる御メりも不被仰付其向
 之内をも七八輩御一同被召出此度之御達し被仰聞候由是等之處即御寛大之
 御沙汰筋に候幕府においては右様御寛大之御趣意に候處京師にては段々嚴
 重被仰立候御向も有之夫ゆへ閣老方にも度々京坂御往復被爲在漸幕府之御
 趣意通り勅定相下り候御様子に御座候然るに世上姦雄之類色々と言言仕候
 哉に相聞御宗藩にても如何之御聞込可被爲在哉と甚御氣遣に奉存候何分と
 も岩國様へ申上幕府之御趣意能々御貫徹相成候様致度右體御寛大之御沙汰
 に候處萬一も御承服不被爲在候ては御一大事に可立至遂には皇國之御爲に
 も不相成次第に候へば屹度御取鎮無之て不相濟御見込之處如何可有御座候
 哉無御腹藏被仰聞度存入候主人赤心之處篤と御亮察何分之御見込相何度奉
 存候

右に對し二十六日岩國の藩議として書面并に演説書を以て答ふる所左の如

し

一御返詞

春暖之節時候御見舞猶當節柄御氣遣被思召態々御内使を以被仰越重疊
 難有奉存候此段御取繕宜被仰上可被下候

一演説

猶又今般公邊御處置之儀に付御聞込之趣有之御懸念被思召重大機密之
 事件を御洩し被成下千萬難有奉存候然に防長御處置振之儀に就ては宗
 藩父子豫奉謝罪置候心情之程末家之身としては只管泣血之至に付監物
 よりも厚奉歎願置候處今度御模様御内々拜承仕り素より監物且外末家
 共宗藩父子一同書面を以て謝罪之儀申立同様負罪之者共へ此度之御處
 置被仰渡候段彌以恐入驚愕之至に不堪途方に暮れ罷在兎角之勘辨にも
 不能今日何共御答申上候廉も無之次第に御座候最早御召出之儀も不遠
 表方被仰出候様可有御座左候へば現事に當り勘辨をも可仕儀奉存候此

等之趣宜御取繕被仰上可被下候

是れより往復論談數回に涉り彦使は頻りに監物に面せんことを請ひしも遂に之を固辭せり其間彼我問答の要領左の如し

(彼) 此度之御沙汰之旨自然も御承伏不被爲在時は皇國之御爲御宗藩之御爲にも不相成様立至り候ては不相濟且諸藩出張疲弊も不一通事に候へば幾重も右之趣御賢察皇國之御爲御盡力奉安宸襟候様之御取計被成度無左候ては君臣之名義も如何可相成哉に奉存候容易に御勘辨も難被爲附候處私共も御達し無之内申上度相考差急罷出候得共最早申上候上は差急不申乍御厄害滞留之儀は厭ひ不申何卒右之趣一應監物様へ被仰上少しにても思召之處拜承仕度存候私共頑愚彼是再三強情申上御氣受も如何可有御座哉奉恐入候得共篤と御勘考分被成下度存候

(我) 私共此處にて強て御斷申上候も甚失敬之儀にても可有御座候得共夜前罷歸監物へ申聞尙私共同僚其外機密之用向へ携り候者共召集申聞せ候處實

以一統驚愕仕居候計にて何共勘辨に不堪次第にて其段を御答仕候様被申付罷出候儀に付今一應御慕可申候段申聞候とても夜前に相更り候儀無之は必然之事にて却て私共御答申上振り不行届に付又々罷歸同様之儀を申述爲其空敷御引留を迄仕候段不束之儀監物より叱を受候様にも可有之左様御座候ては私共難澁之次第御座候間御滞留被爲在候は御頓着も有之間敷候得共夫丈けの驗も無之私共再應往反仕候て御氣濟いたし候譯にても有之間敷哉左候へば能々御亮察被成下右之次第御復命可被成下奉願候

(彼) 鳥渡相同度候今度御處置被仰出候は、御宗藩においては如何御引請被成候哉監物様には御宗藩之御差圖を御遵奉被爲在候譯に候哉

(我) 監物において宗藩父子之差圖遵奉仕候儀は不珍事に候へ共御所置振之儀に至候ては一昨年來父子之情狀如何にも不見忍泣血之至に付何卒御寛大之御メり被仰出被下候様此内幾應も奉歎願候儀に御座候右之通にて父子之誠情從來相替儀無之候へとも領内固結之人心事により沸騰仕候儀出來申

間敷とも難被申其邊は大に懸念之至に御座候人心之居合兼候情狀は先達て宗藩家老藝州出浮之者より底を叩き申上置候由に候へば定て可被聞召奉存候

(彼) 此度御處置被仰出候を御宗藩御承服不被爲在と申時は御一大事に可立至其時は監物様一昨年來之御手續も有之事に候へば御取押御盡力不被成候ては相濟間敷奉存候處如何可有御座哉

(我) 先にも申上候通如何なる御メリ被仰出候共宗藩父子においては甘て奉承服候儀と相伺候得共從來疑惑之人心如何立至可申哉之程も不被相計假令取押不申て相濟筋合に候迎も著者曰く原文相濟の上
不の字を脱せるに似たり中々監物微力にて相調候事共不被相考是内にも監物儀何一ツ宗藩へ向け候て之盡力仕候譯は無之此度迎も不筋之儀にて人心沸騰仕候儀有之時は勿論力之限りは取押へ不申て不相濟候へ共無餘儀筋にて沸騰仕候時は取押候様にも相成兼可申素より不條理に人心沸騰仕候筈は有之間敷哉に相考申候

三月二日深町三郎右衛門來り前月二十七日の演說書に對し小笠原閣老より三支藩及び岩國并に兩家老は疾を力めて召喚の命に應ずべく木梨彦右衛門は隨意歸國すべしとの命を使節に傳ふ因て一面更に演說書を藝藩に致し前日の演說書は萬一の豫想を陳べたるに過ぎざる意を告げ一面之れを山口に報じ木梨は一旦歸藩し必要に應じ更に出使するを可とし諸末家大夫等の出藝は寧ろ之れを徐々にすべしとの意を告ぐ政府は其六日を以て答書を送り木梨は一旦歸藩せしむべし諸末家等の出藝は將に之れを辭せんとするの意を復し并に藩内の團結は強固にして使節後顧の患なきことを報ず

(赤川之書翰)

前略然ば別綴之通過日演說差出置候處閣老用人よりの口達如此にて御座候御承知可被下候御三末様監物様并兩御家老殿御呼出之儀に付御進退は御決議之上可被仰越候其内別紙之通一應出先之見込を以手控差出置可申候是亦御承知被置可被下候閣老用人口達之趣に付木梨大夫には一應御國引取度都合に被申候

事に御座候左候は、却て御三末様以下御進退之一策にも可相成哉と奉存候委曲之儀は大夫方より被申越候に付彼是御勘合可被下候此段兩大夫被申付如斯に御座候御當役方へ被仰上可被下候恐惶謹言

三月四日

赤川 又 太郎

木 戸 貫 治 様

山 田 宇 右 衛 門 様

廣 澤 藤 右 衛 門 様

前 原 彦 太 郎 様

國 貞 直 人 様

(安戸より政府諸員への書)

略先日小田村發足迄之所は巨細歸山之上御承知にも相成可申と奉存候然所此度赤川より御用狀を以申立候通先日差出候演説手控へ當り閣老より差圖被致候由にて藝吏深町昨日持參兩通之通りに御座候右に付御末家様方并に二大

夫の儀に付ては於爰元は又々別紙此は赤川よりの書中にて御覽可被下候之通りにて差出置候然る所木梨氏の所最早用向無之に付勝手に引取候様にとの事藝吏を以被申達候所御末家様尙二大夫御出浮之儀は萬々六ヶ敷儀は申迄も無之候得共是非共木梨氏の所は引留度候得共幕吏見込にては何歟兩人よりは是非居滯度と申出候へば於爰元御末家二大夫方を御拒みいたし候様の嫌疑も不少左候へば國內事情一統一致之次第も貫徹相成兼候哉にも有之只々幕吏見込にては内輪に過激之徒と温順之徒と兩立いたし居候事にて全以出先之もの激徒のみにて内輪を峻拒いたし候様思入も可有之就ては木梨氏氣付にも勝手引取之差圖に任せ爰元一旦引取候方可然いづれ御末藩二大夫御出浮は被爲在間敷候に付其節又々去冬兩人自判の次第を以て申置罷出候方にいたし候儀可宜との事にて有之其意に任せ候方可然哉と於小生も被相考申候小生儀は滯藝罷在候様にとの事に付いづれ迄も踏留り候て右等往返相決し候は勿論に候へば此場は却て少人數にて滯在候方可然様にも奉存候尤此後御支藩様并に二大夫御病氣にて御出浮六ヶ

敷候へば其節小生一人にて不相濟との儀に候へば最前の參懸りを申立是非木梨氏被差出候様申立候覺悟にて其儀は木梨氏疾より承知之儀に候へば決然出浮有之覺悟は十分に候へば其筋に付ては何も御疑念等不被爲成候様に有之度奉存候巨細は木梨氏より侍御御役座迄可申參候付木梨氏心底之處は幾重も御推恕被成下候様奉願候就ては木梨氏より此度打廻り一人被差歸候に付委細は右の者より御承知可被成候へども爲念小生よりも申上候間右様御承知可被下候

此度御末家様二大夫方等去冬の參懸りにて御病氣また御快起も不被爲在押ても可罷出は勿論に候へども何とも藝州表迄出浮之儀急速相成兼候次第を以御斷御猶豫相願との事にて曠日彌久月日を費候へば於彼も別段叱り候申立様も有之間敷且其中風説之次第を以士民一統より歎願書をも繰込候様有之且士民申談書取等も流布爲致候へば國內事情も別して明瞭可相成に付御疎は無之に候へども萬々短氣に御處置不被爲在候様に奉存候尙また士民書面其外にても

言語文辭等はいづれ迄も恭順巽與にして事理正當之處を至誠感泣之場合に申立候様無之ては貫徹六ヶ敷たとへ幕吏姦骨を具し候ものにて心には感ずる様有之度彼の過失を申立彼之舊惡を發し候様過激に相成不申様にと奉存候此等御疎無之は申迄も無之候へども是また例の婆心にて饒舌を勞し候儘幾重も至誠感神之精神にて徹底爲致化姦爲正變曲爲直之氣力無之ては不相濟と奉存候儀に御座候尙此節小田村氏歸山中に候へば爰元事情御酌合せ篇と御熟議被爲在候様にと奉存候

黒田良輔儀も品彌一同過る二十九日昏際爰元出足草津より乗船罷登り申候黒良儀も御國之御様子篤と承知いたし候よしにて懇切に盡力いたし候心組よし彼是見付之次第も申候へども他邦人を吃と引當に相心得内輪心緩有之候様にては不相濟候へば別段不申上候

先日於岩國彦使應接書は疾御承知可被成右にても幕情は相分り候へども畢竟幕は固より彦抔にても我國情巨細承知不致且激徒論にてかく相成候事とのみ

存居候様に相考候へば別して此處は我より短氣無之温順公正之所を以て士民一統無餘儀情實を漸を以貫徹いたし候分に取計度事と奉存候其中彼より暴を以侵境候様立至り候へば防戦之外手段無之は申迄無之候得共夫迄之所は幾重も無智之小兒を諭し候心得專一と奉存候先は是迄にて閣筆餘は御推知奉希上候頓首謹白

重三

再白幾重もく爲國家御自愛專一に奉存候小田村翁には御歸山中篤と御盡力相濟候はゞ早速御歸藝奉待候尤も申も疎御半途にても御歸り差急ぎ候譯には無之候付可相成丈け御盡力之上早々御歸り奉願候

(政府の答書)

飛檄拜見仕候御三殿様益御機嫌能御座在せられ且又各位御忠壯御盡力なされ候段敬慕奉り候過日小田村氏歸國にて藝州表之近況承知仕候然處小田村出立後木梨大夫事勝手に御國引取苦しからず段幕より達御座候由仰越され候に付

爰元にて於ても幕達の通早速御引取然るべくと決定相なり候間兩大夫仰合され木大夫には一先速に御歸國相成候様御取計なさるべく候御支藩様方にも去年來の續を以て士民御鎮撫且御病氣等にて當分御出藝には相成らす事と存候併し御確答之處少々未決之儀も候間相決次第夫々御使者を以て仰越さるべく候其節委曲申上べく候尙又小田村歸國にて承り候へば御國中或は過激或は因循等にて何時紛擾も測り難く様思召し御出先之諸彦頗る御懸念之御様子に承り申候全御過慮に候御國は日に相しまり一致一定罷在候間必御懸念無之候様安戸大夫へも此邊篤と御申込置下さるべく候御出先之御苦心幾回も遙察致し候邦家の爲め御盡力偏に是祈候近日小田村出藝仕るべくに付其中何も縷々申上べく御回報斯の如くに候也

三月六日

前原彦太郎

中村誠一

廣澤藤右衛門

山田 宇 右 衛 門

二陳御支藩様并大夫出藝相ならず付宍大夫一人にては終に藝州表不相濟儀幕令之あり候はゞ其節又々木大夫出藝相成候はゞ至極都合然るべくと存候以上

赤川 又 太 郎 殿

十日木梨副使歸藩の途に就く其十八日に及び小田村素太郎再び廣島に還着す小田村は曩きに山口に在りて將來應接の方針に關する數項の要綱に政府の附箋を得たるものを齎らせり其文に曰く

一御三末様岩國并兩御家老進退御決議の上御銘々様より廣島迄御使者被差立此御方よりも別段御使者被差立候事

符 本書之通御決議に候事

一閣老小笠原或は大監察の内にては御領内被罷越候て結局被相達哉の説も有之其節は固く拒絕可仕は勿論に候得共千萬一不得止場合にも至り候はゞ兵

端を開不申内は從卒等相減平服にて應接の約束勿論と奉存候事

符 本書之通可然候尤も小瀬口境上に於て及應接内地引請の儀は斷然峻拒の御内評に候事

一彌御末家様方御出無之に決定又閣老大監察にも御領内被罷越候儀も無之自然備後助へ結局相達候儀に候得ば先々より伺定候通り一旦達書寫取を以中途迄引取候て又々罷出拒絕の心得に奉存候事

符 本書最前御決定之通勿論に候事

一此度御末家様出藝御斷の上は如何様の事變出來も難測候間當度山口迄諸隊總管軍監の間被召出御軍議を被相催毎隊策略等被聞食届且又御駈引を不待候て暴發無之様於御前被相戒度候事

符 本書御軍議は是迄追々有之口々先鋒救應之御手組相調居此餘は敵の來寇を待候而已猶不徹底の向は寄々可被及謀議候暴發の事は是又兼て被相戒決して不能煩慮儀と被考候事

一彦使岩國へ演説の趣も有之廢削暴斷は御國內へ洩聞候事故此儀に付今一度
士民歎願廣島迄持參候儀可然哉假令戰爭に立至候共合戦と歎願は并行はれ
て不相悖儀と奉存候事

但士民歎願は固より政府の差圖にては無之様仕度候事

符箋本書士民歎願は奸猾の幕吏いづれ眞實には不引請策略と心得候は被洞

察候現在舊冬の應接にて永井主水正落意承知の儀は士民の情實も十分相
盡したる驗に候其末暴斷今日之勢と相成畢竟無詮義に付旁被差止應接の
上條理を盡し結局に至り可然候事

右早々御評定有無之御様子御出先の者へ被仰授度候事

寅三月九日

是時に方り幕府の將に長藩に下さんとする處分案は藩内人士の知る所と爲りし
を以て人心は次第に昂騰し廢削の命の如きは斷々乎として之れを斥け決死以て
其志を遂げんとし有志相合して冤を諸藩に訴ふるの書を四方に飛すあり書を公

父子に上りて幕命の拒絶すべきを論じ廢削に妄從する如きは主命と雖も奉ずる
こと能はざるを言ふものあり開戦是れ待つゝの氣勢藩内に充滿せり

(告冤書)

長防士民泣血再拜謹て諸藩明公閣下に白す主人多年勅旨を奉じ台命に従ひ東
西奔走心力を竭され候處奸邪蔽明冤枉再生仰て天に號ぶ所なく俯て地に哭す
る所なく今日之急に迫候事君臣之不幸御憐察可被下候然共事既に此に至り候
ては最早冤枉を辯解も不仕又哀號して御救援をも請奉らず二州士民各臣子之
分を盡し死を以主恩に報ひ知己を千載之下に待ち公論を百世之後に仰候外心
中無他事誓て奉對天朝不遜之心底毫も無之天地鬼神昭明森列敢て赤心を披く
處に御座候間一樣暴舉之看を不被成下様奉賴候且又弊國之存亡は固より不
論候處弊國之事よりして自然天下分裂之勢を開き外夷術中に陥り候様可相成哉
と是而已遺憾に奉存候就ては何卒諸明侯力を戮せ心を同し上天朝を奉戴し下
幕府を扶け早く姦邪を誅鋤し忠良を登庸し天下をして正邪判然名義相立ち人

心一致仕候様御盡力有之度右様無之ては數年を出ずして遂に神州をして外夷に棄與せられ候様相成候事必然に存候間深く御遠慮被爲在度身後之至願惟此一事に御座候偏に御亮察被下度泣血奉懇告候頓首謹啓

寅三月

(上書)

御誠意貫徹之時可有之奉存候處又候今日之形勢に相成候は實に上天覆育之御聖意には決して無之御事はれ偏に是非曲直を不問只管二州必滅之定算を暗に贊成候向有之故に候最早如何程御誠實を被爲盡候とも決して御採酌は無之と奉存候然處御兩殿様兼て御奉上之御志厚く被爲渡候へば狂て其指令之通寸土をも削り小責をも御受被爲成候様之儀も御座候ては却て御名義は不相立一步を退候へば一步を進め遂に二州御泯滅に至り御罪名のみ天下萬世に遺り人之指笑を被爲招候事必定にて誠に不堪苦慮痛念の至奉存候然ば此御大難に當り候てはいかにも其宜を不失様其力を被爲盡社稷を御衛護無之ては上は御祖先之神

怒を被蒙下は二州士民決して其怨を歸する所可有之奉存候私共是迄生を儉み日を曠し何共無申譯此度一統議決仕候處有之假令公旨に出候ても上件之通不條理なる御沙汰有之節は暫て奉命不仕奉存候付乍恐兼て申上置候恐惶敬白

長防士民中

幕令既に下れり之れに對して應答を爲さざる可らず會藝藩に於て世子紀伊守上坂の議あり藝藩吏員の竊に我が使節に告ぐる所を以てすれば二十一日植田乙次郎來り告ぐ曰く二十三日を以て廣島を發し備前侯と共に大坂に赴き又使を因阿二藩に遣はし二藩主の上坂を促し俱に將軍に謁し閣老に接し毛利氏處分の極て寛大なるべき所以を論じ或は遂に京都に入らんとすと因て若し成らずんば藝藩は將に毛利氏と存亡を共にせんとすとの言を爲すに至れり當時藝藩は又使人を我に派するの議あり藝藩吏員の我使節に來り告ぐる所を以てすれば十七日夕植田乙次郎來り告ぐ是れ陽はに幕意を承け支候以下の出藝を促すに在るも實は此間に處して別に毛利氏の爲めに謀るの意ありと云ふ此等の事情の爲め藝藩は反て我が遽に應否の確答を發

せざることを冀望せり

(赤川の報告)

前略今夕植田乙次郎寓寺へ罷越今晚より寺尾生十郎立野一郎一同爲使者先三田尻へ着岸夫より山口へ罷出歸路徳岩へ立寄可申由申述候其故は小笠原閣老より御支藩様以下御出藝之儀に付何歟模様振は無之哉と毎々藝藩までせり込候由於藝藩不心配之廉有之様被見込嫌疑に涉り候趣も有之此度不得止儀にて使者相立候様子に御座候就ては藝藩見込も有之何角に付時日遷延候方周旋振可然様子に相見へ申候御支藩様以下素より容易に御進退は決して不相成儀に候得共一應御請は尖に御恭順を被表候儀可然と存候其上にて後圖は何角辭を設け遷延すべき策は如何様共可有之候しかし言語は成丈け恭順を主とし出藝難相成は言外に相見へ候様有之度存候且又藝藩事情追々及探索候處未だ表向には兎角相顯不申候得共内實は上下共不容易致周旋候様子に被窺申候追々拙寓罷越候政府之面々口氣も皆々其意隱然相見へ申候吾藩之事漠然度外に置候模

様にては無之實に唇齒相依り候勢に付吾藩之爲に計れば則自ら爲にする譯にて御座候此處能々御賢察被成候て寺尾以下へ御難責ケ間敷儀無之様所希候惟々何も御依頼之心底相顯候方可然と存候さて又幕府閣老以下も態々下藝に付無事にては難引取は勿論之儀に付二州之間隙を窺ひ離間之策を施す歟何角別策に出る歟不相知事に付彌以兵備充實闔國一致ならでは不相濟候事申も痴に存候長防士民申談書追々計策を以て傳播仕候然處寫取候事大に窮申候何卒活字板早々出來候はゞ御送越致渴望候浪士風說書も同様之事に御座候士民申談書は藝君公は勿論小笠原閣老邊迄も流傳致候様子相聞申候活版急に御送越候はゞ藝城は諸藩集會に候へば直に天下内へ充滿可致候御正義貫徹姦膽を破り候妙策に御座候何卒火急御配意致御頼候以下(十七日)

(赤川小田村の報告)

前略就ては此節御國許より御使者被差立候御決議之處只今被出浮候ては藝備上坂差支りに可相成に付今少し見合吳度段偏に相頼申候來る二十七八日頃より

出浮相成候て可然哉と存候上坂無之内に出先之御使者を取柄に致し萬一も例之暴令を發し候ては藝備周旋も無益に屬し可申候惟々一日も遷延に打過候方彼是可然と存候御國是一定之上外向之周旋可相頼筋は無之候得共藝藩之苦心不容易事に付一先其意に任せ置候て天下之向背相窺申候も一策と存候畢竟積年之御誠意致貫徹候向に相成一入可賀事にて御座候乍併油斷大敵申も痴に存候(二十二日)

時に山口に於ては三支侯吉川監物并に二老臣は均しく病を以て出藝を辭し而して宍戸備後助を以て老臣に代へ之れをして幕命を聞かしむることを請はんとし十二日内藤佐兵衛に命じ三支侯及び岩國の使人と共に廣島に赴き此使命を致さしむるに決したるも未だ發せず蓋し廣島の消息亦既に傳はり特に行程を急にするの要を認めざればなり

案するに内藤佐兵衛は宍戸備前毛利筑前出藝を辭する書を齎らし諸末家の使者と同行するに決せり其書面左の如し

(公より藝侯への書)

此度御達之旨有之宍戸備前毛利筑前廣島表罷出候様との御事御使者を以被仰達奉得其意候兩人へ其段申附候得共昨年來之病氣今以不致快氣遠路罷出候體に無之千萬御配慮之儀恐入候得共宍戸備後助差出置候事に付何卒此者にて相濟候様幕府向可然御取計偏に致御頼候尙委曲家老共より其御方御家老迄可申述候間篤と御察被下度候

(老臣中よりの演說書)

此度御達之旨有之宍戸備前毛利筑前廣島表罷出候様との御事御使者を以被仰達候趣主人より申聞奉得其旨候然處備前筑前儀昨年來氣分合今以不遂快起遠路罷出候體無御座且又去冬宍戸備後助木梨彦右衛門御地迄罷出大小監察御尋之件々兩人より御答申上猶衷情底意無腹臆申立候様との御事に付國內情實等も委曲申上候處何も御落意御承知之上大坂表迄御引取相成兩人儀は監察方御聞濟にて御地滞在何分之御沙汰被仰出候事と而已國內士民一統奉渴望候處如

何之御筋歟は不奉存候得共去冬以來御地迄出張之御軍勢今以御引拂無之當今殊更御人數被相増兵糧器械等日々御運輸之御様子をも傳聞仕彌増人心疑惑を生じ候折柄削封廢立等不思寄御沙汰可被仰出由既に於國內も疾致承知實は士民之憂憤不一方之砌改て末家并備前筑前御呼出に相成候ては遂に如何體之儀出來も難計右鎮撫方一統苦心焦慮罷在旁御地罷出候儀甚難澁之至に候此迄弊藩情實逐一入御承知置候事故此度も最前より行懸りを以て及演說候間可然御含被成下御達之御用向備後助にて被濟候様幕府向宜被仰立被下度此段程能御取成安藝守様へ被仰上被下候様偏に致御賴候

二十一日藝使寺尾生十郎立野一郎山口に來り政府諸員と款語する所あり翌日歸途に就き二十五日夜廣島に歸る而して此間廣島に於ては藝藩の議既に變じ世子の上坂を止め獨り老臣辻將曹二十三日を以て植田乙次郎を隨へて途に上り老臣野村帶刀は幕疑に觸れ大監察より先づ謹慎を命ぜられ將に糺問を受けんとせりと云ふ二十五日藝藩永田建助我使節に告ぐる所に據る蓋し世子上坂の計小笠原閣老の抑制に遭ひ事茲に至りしなり辻植田等は大阪に至り面謁を閣老に乞ひしも許されず僅に目附某に接し長藩

處分に關する意見を述べたりしも省みられず空しく歸國せりと云ふ

(廣澤より赤川小田村への書)

此度寺尾生十郎立野一郎鴻城へ昨二十一日晝到着即夕於三輪宗樓山宇中誠松音大津國重正木僕共一同及相對候處用向表は今般幕達之通御支封様并備筑兩大夫出藝如何哉との催促にて猶内實出不出斷立等決定之次第篤と聞合度との趣にて彼此於藝藩も一統苦心之至令吐露不堪感銘事に御座候就ては勿論幕府御沙汰筋等閑に打過候儀は決て無御座一昨冬以來之行懸り不容易事に付輕重大小となく何とか趣有之節は末家共篤と會議論定相成都合にて往復日數相立候儀故全不取合杯と申邊は毛頭無御座既に長府使節も昨夜か今夜迄には鴻城罷出都合にて着次第遅し明後二十四日には内藤左兵衛一同發途可相成段猶御出先備後大夫其外被仰立よりは一陪二州内士民一統憂憤之次第餘程切迫に付重役初鎮撫苦心焦慮せしめ候情實無腹臟相咄自然も只今於幕府御決定相成御沙汰相下り候節は不得止如何程之儀出來も難量恐入候次第於藝藩は一昨冬以

來不一方配慮之處所詮水之泡と相成而已ならず還て種々觸嫌疑何共難堪次第併列藩誰こそ可恃先方も無之乍御厄害猶又以往之處相頼候段鄭重に相托置候然處國情委曲聞合之趣も不日紀伊守様備前候とも御一同御登坂被爲在候由にて其邊御都合振も有之との事實に奇々妙々此策被相行候はゞ又幕之策變換にも可立到哉被相考何卒斷然御登坂相調かしと爲皇國奉專禱候右之次第も有之國情決局之趣も無殘處相咄置申候兩人共餘程差急ぎ候事故今晝出立大津松原國重僕共宮市まで遠乗相送覺悟にて安部旅宿離宴中相認例之宿醉中亂臺御推讀是願兩人へは餘程手厚く取扱置候間此段は御放慮可被下候此内小田村兄へ草案差上置候分少々添削相成候何も左兵衛到着之上御承知奉願候其中時下御加護奉專禱候武備御更張士民一統同心一致之處は日増堅固只々御手切手初のみ相待居尤輕擧は決して不仕御安心云々

三月二十二日

二十六日小笠原閣老遽に命を藝藩に下し公父子興丸公子三支侯吉川監物及び我

老臣に出藝の命を傳へしめ期するに四月十五日を以てす今や閣老の前命に對し我が答旨未だ達せず而して更に此命あり藝公父子以爲らく是れ甚だ條理に適はずと内藤佐兵衛の使命一條に關し其順序方法等藝藩我使節山口政府岩國等の間多少意見の相違ありて其交渉の爲め若干日子を費したるも煩にして重要ならざれば今省く翌二十七日書を小笠原閣老に致して曰く若し必らず此命を傳へざる可らずとせば今後幕長間の中介者たることを辭せんと是れ幕吏の苦む所なるを以て二十八日大小監察藝侯父子を見て之れを慰諭し且つ四月十五日の期限は多少之れを延期すべしとの意を示し僅に藝侯の承諾を得たり二十九日寺尾生十郎在藝使節の寓に來り竊に告ぐるに此事を以てし且つ閣老は宍戸備後助をして今回の命を傳へしめんが爲めに之れに歸國を命じ公若し病ありて出發すること能はずんば貴族中に選みて代人を出さしめんとする意あることを告ぐ翌晦日使節は書を山口に飛ばして之れを藩政府に報告す

(赤川小田村の報告)

切迫之折柄態と大急飛を以得御意候三公臺御震良御萬福奉恭祝候各位御忠壯

被成御精勤奉珍重候然ば當表之幕令兎角動搖勝にて過る二十六日藝迄相達候趣は全體山口表并長徳清岩共先達て相達候幕令一圓被打置御取揚げ無之共歎と餘程閣老輩相激候て乍恐御父子様興丸様御支藩四家外四家老來月十五日を期限に相立是非御出藝相成候様可相達と又々藝藩へ取次せ候積りに候處藝公御父子甚御腹立にて御評議有之最前之幕令を相達候て長州家よりは未だ有無之物音も不仕内又々期限を定呼出候儀如何にも不條理に付左様之儀取次苦敷以來長幕間之御取次丸々御斷りに可相成との儀に付二十七日夜中斷然御書附を以御斷り立被仰出候處二十八日晝過俄に大小監察相揃藝城へ推て罷出御父子様へ對面種々御理解申述何分藝藩にて右取次を被相斷候ては即今差支に候由達て申談候儀に付一應其意に任せ被置候事に相成候然ば藝公御心積りに右期限を被差延候儀相成候はゞ一先其分に仕置との儀に御内決有之由多分御父子様以下出藝之儀は可相達儀に可有之此邊を傳へ藝使又々山口表可罷越様被相考先達て之通藝使を二手に分ち長府清末と山口徳岩兩様に仕向可仕哉に付

早々其御手組被成置宮市邊へも右御移り置可被成候幕府にも餘程相迫り居小笠原閣老にも甚いれ付居怒り猪同様之氣形に成り藝藩にても取扱に殊之外困窮罷居候此時之事故何分相氣をばづし緩急疾徐時宜に隨ひあやつり置候方上策と奉存候肉大夫へも右之幕令爲傳達引取之沙汰を掛候様子に相聞只今之御出先一達皆々引取を可達手筈と承り申候就ては肉大夫一達引取を掛候得ば一應斷然引拂候儀に相決可申候押て滞在仕候共其所詮も有之間敷候尤御父子様へ出藝之令を傳へ御機嫌合に候得ば御貴族衆之内御名代被差越候様可相達哉に御座候間此儀も御斷り立に相成候哉又は御貴族衆之内被差出候て彼之暴斷御辭謝可相成哉此邊も豫め御廟議被成置度奉存候全體幕府思入には御國は溫激兩端に御内輪裂れ候故激徒之分を除候節は廢削之令も謹て承服に相違は無之只今之御出先一達は皆々激徒にて永井監察は右激徒に被引込藝藩の説に酔ひ候故總て御相手には不相成との幕疑に御座候然ば肉大夫一達も右達し有之候はゞ斷然一先被引掃候儀に被仰付度候云々

三月晦日

110

小笠原閣老は陽に威嚴を装て我を壓迫すと雖ども其實我が強硬にして容易に其命に服せざるの状あるを見て心甚だ安んぜず陰に我が承服を希圖して已ます是れより先き數日幕吏米田敬二郎等が來て我が使節に説く所ありし如き亦此に原由せずんばあらざるなり米田は幕府歩兵頭戸田肥後守家臣横尾貞之助と稱し岡田宗平赤松六郎の二人を伴ひ此月二十七日夜來て我使節の寓寺を訪ふ小田村赤川出て之れに接す其論する所大要曩きに彦根藩士の岩國に來りて説く所と異ならず要するに我をして廢削の幕令に甘せしめんとするに在り小田村等は固く我が條理を主張し廢削の命に服すること能はざるを辯す米田等強ゆること能はずして去る其夜米田は又戸田肥後守より示す所の一篇の書を持し來る大意は或は嚇し或は諭し以て我をして幕令を遵奉せしめんとするに在り小田村等は一閱の後ち藩論と柄整相容れずと爲し之れを還す

(當時の應接書)

赤松云

戸田肥後守は武役に付軍事出來迄は格別御用も無之候得共爲天下周旋致度下意に付僕等右家來同道貴寓罷出候様被相頼候全體肥後守自分にも罷越度意に候得共輕易に罷出候様にも難相成候に付僕等より御情實承り歸れとの儀に候

横尾云

尊藩御處置京師よりは餘程嚴刻に被仰出候得共幕府に於て殊更寛大に被處候小田村云

弊藩御處置振如何様之儀に候哉下説には云々之儀承り及候事も有之彌其通り被仰出候儀に候哉

横尾云

其通りに御座候

小田村云

111

左様にては幕府に於ては御寛大と可被思召候得共弊藩民情更に御寛大とは不心得却て過酷之御當り方と心得居候

赤川云

此迄國元年寄共尙士民一統よりも書取を以追々歎願も仕候得共始終情實徹底仕兼候折柄去冬三監察御下向にて備後被召出御應接有之此こそ幸之儀に存じ國內情底を叩き申上候所御落意御承知之場に至り頓て品能御沙汰も可有之と領内士民も渴望罷在候定て肥後守様には監察方より御傳承も被成國情も御分り被成候筈と心得居候

横尾云

御支藩御出藝之儀如何哉萬一御出浮無之節は期限を被定別に使者可被遣幕議に候

小田村云

不日に當地罷出候筈にて先日寺尾立野共國元罷越候節は已に出掛候處に御座

候委細同人どもよりも現場見受候所を幕府御役方へも可申上事に被相考候今日迄時日を経候は捨置候儀には更に無之元來本末申合候件有之節は各在所より本家元へ態と出浮打合せ之上在所へ引取夫より罷出候事故少々は隙も入候江戸において本末屋敷傳へに打合せ候譯にも参り兼候

横尾云

京師暴動之罪不輕天下人心不服に付廢削等の罰無之ては不相濟候云々

小田村云

暴動は弊藩において無罪とは難被申右故家老三入嚴重申付參謀之もの迄も夫々令處置御詫申上置尙東西藩邸御毀官位稱號御取揚げも無一言御請仕候元來弊國士民心得には京師暴動は末節にて其根元之所へ立戻り疑惑を生じ居候癸亥以來天下之形勢篤と御承知に候哉

横尾云

僕諸生故天下之大政委細之事は承知不申

小田村云

夫にては委細之儀御話可致候と奉勅始末之意を演去冬備後助三監察へ書取にして及演説候旨迄一通り申聞せ且曰手短に申候へば幕府において癸亥年比之御議論を不被變列藩へ信義を御失無之公武御合體之御姿も今日迄御持詰に候へば京師暴動之起り様も無之中へ邪魔を入れ天下之人心を疑しむる族有之右を除き候へば元の御合體も相調可申との赤心に相違は無之候得共形跡之上は暴動と申候て十口無之故前件之通り御詫之次第も立候

岡田云

京師暴動は誰を敵と御目指にて候哉と餘程かゝり込詰掛候

小田村云

世上よりは滅幕の主意とか天朝へ野心あると乎申觸候様子に候得共全く左様にては無之尤暴動巨魁は存生不仕故誰を直指候哉は尋様も無之候

此時横尾岡田に向て曰敵と申處は已に分り候故御尋に不及候

横尾云

一昨年尾公御陣拂之節僕等は事相濟候儀には無之と考候處事濟と御心得被成候には何ぞ確證共有之候哉

小田村云

三首級實檢も被爲濟候て御戻しに迄相成り主人父子誠意無他處を御洞察被成候故御陣拂にも到り可申然は事濟に被成候思召に相違も有之間敷候元來三首級實檢御受引有之時は暴動之罪も歸着する處有之主人父子兼て示方不行届之處へ御當り方は藩邸御破却官位稱號御取揚等にて相濟候儀と心得居候

横尾公

尾州老公御陣拂後又々再討之師被差向候は何ぞ原由可有之と存候

小田村云

國內において格別御再討を被差向心覺も無之世上よりは小倉より之譏説に因り候儀と申噂も有之萬一左様之事共より起り候へば幕府に於ては無根之語を

御信用被成天下之兵を被動候儀御不調へ共には無之哉益、領内一統疑惑を致候譯柄に御座候

横尾公

廢削は是非被承不申哉廢削と申候ても大方名目計りにて實事を御受被成候と申にも不及候且一旦御請込にて又々御斷立は如何様共可相成候左無之ては幕府にも致方無御座候殊外込り入候事に御座候

小田村云

萬々不被承候幕府にても一旦被仰出候儀を又々被差止候様にては彌御威光不相立夫より弊國情實被聞召分右之御沙汰未發以前に御再評は出來申間敷哉

癸亥公武御周旋より今日迄一貫之國論を説盡し幕府にては列藩へ信義を失候儀は御心付無之暴動以下を以只管罰名を被與候儀双方意味違之段を委敷及演説候

横尾云

夫にては幕長心得大齟齬に御座候君等之御議論を承り候へば一々に御尤に御座候

赤松云

東西御藩邸を被毀又は在府之御同藩を幽囚等無理と申幕吏へ張込候處此度之沙汰一旦御承服なれば御藩邸は夫々仕戻し可致との幕議に候

横尾云

遂に御承服無之時は合戰之外致方無之長州か幕府か幕府か長州乎勝負之上之事に御座候

同云

肥後守へ打入之心得を尋候處長州父子には決して承服可仕に付本より可罪事も無之只幕令に従者爲正論拒者爲激徒々々は征伐可致積り之由

小田村云

國元にては正激之分は無之承服不仕者迄爲激徒候時は領内之者不殘激徒に可有之候

横尾云

貴藩士民一統同論に候へば京師暴動も全く御出先之不心得と計りは被申間敷候器械兵糧之御運びも浮浪之徒之手にては調不申孰れ政府之差圖も有之然るに三大夫へ計り罪を爲負候儀三大夫は忠臣にて御座候

小田村云

器械兵糧之手當は若主人外夷攝海亂入を被案勅勘之身ながらも皇國之御一大事故右警衛之積りにて持運び有之分を直様浮浪押借にて暴動に及候事に成り其件は早速御届も仕置候事に御座候

横尾云

浮浪と申候ても貴藩へ寄食致居候者御取押出來不申は御不行届之罪道様無之

小田村云

其儀は無理之事にて現在幕府之大權に候得共筑波或は大和但州邊之浮浪は御取押も出來不申矢張幕府御不行届にて其罪道様無之共歎と存候

赤松云

公論に掛候時は幕罪は第一番にて其次は諸藩に御座候併爲皇國御互に忍び合候て事を爲濟候儀宜敷自古忠臣にて冤罪を蒙も有之候御主人公眞之忠臣に候へば廢削位之事は扱置京都へ被召寄兩國を丸に被取揚外國へ放逐之命有之共君臣之分にては辭退は相成間敷候

小田村云

君臣之分と申候ても無理無體を申聽せ候て承服爲仕候道は無之況主上と大樹公寡君と三つ金輪に成り親敷被窺定候儀に間違様は無之右間違之廉を取り寡君に暴斷を申渡候儀幕吏之無禮は萬一寡君は異論無之とも臣民は折合申間敷候

赤松云

双方間違有之候も幕府之御爲不宜故肺肝を碎候ても周旋不仕候ては不相濟候
横尾云

貴藩之説之様にては孰れ戦之外致方は無之いつにても戦は暴なるものにて其
段に到りては義理も何も構は不仕候

横尾赤松云

防長事情今夕始て詳に致承知候能々了解仕候

赤松云

幕府中も議論幾種にも分れ居申候

横尾云

先刻より承候御論之通りにては幕府も伏罪して早々引拂不申ては不相濟候

小田村云

幕府之罪科を強て兎や角と數立候儀にては無之又幕府と長州と五分々々に思

候事にも無之夫故先年東西藩邸御破却官位稱號之御取揚も無子細御請申候

横尾云

此度御裁許之幕令を輕くする共被請問敷哉尙又御主人公へ疵付不申候へば御
承有之哉

小田村云

取替無之主人故身上へ疵付候儀本より不被折合候

第二十一章 長薩提掣并に乙丑丸及び薩英事件

長薩提掣の協約○木戸品川等の往復○乙丑丸事件○薩藩士の來藩○接薩使
高杉伊藤等の派遣○薩英會盟に對する長藩の態度○高杉伊藤再度の洋行計
畫○長崎に於ける使事の授受○高杉伊藤の計畫一變○長薩の物産交通

木戸貫治一行の上京の程に上るや播州に至りて船を更へ進で大坂灣に入り天保
山外に繫泊せる薩藩汽船春日丸に移り既にして陸に上り薩邸に入る黒田嘉右衛門
綱出で、之れを迎ふ大坂より薩舟に搭じ淀河を溯り伏見の薩邸に入る西郷吉之
助村田新八等來り迎ふ伏見より歩いて竹田街道に由り京に入り相國寺畔の西郷
の寓に投ず後ち數日近衛家花畑なる小松帶刀の寓に移る居ること日あり待遇優渥を極む而も彼我互に未だ
全く襟懷を披くに至らず會、阪本龍馬長府藩士三吉慎藏と共に東上し三吉をば
伏見に留めて京に入り大に幹旋する所ありて談俄に其歩を進め遂に共に提掣の
約を協定せり坂本は此年正月十日長府藩士三吉慎藏と共に海路馬關を發し一旦兵庫に上陸し更に海路大坂に赴き薩邸に入り十九日伏見に着し寺田屋に宿し二十日三吉を伏見に留め

隨行の細川左馬介寺内新左衛門と共に入京せりと云ふ坂本は其前馬關より一旦長崎に赴けるもの、如
くなるも其時日未だ詳ならず三吉は未藩よりも一人上國に赴き實況を視察すべしとの論ありて坂本も
之れを懇應したれば長府藩にて協定の條項は後ち數日木戸が大坂より坂本に寄せ坂本
三吉に派遣を命じたりと云ふ

が之れに與書して返送したる書翰に詳なり其文に曰く
案ずるに木戸黒田等一行大坂着日は下に出す所の木戸公の自筆自叙の原本に
正しく正月四日とあり然るに正月七日付にて大坂發とせる黒田より在京西郷
吉之助への書翰の寫本に去月二十八日木戸外に上下八人同船三田尻出帆不順
にて漸く今夕方に着坂せり明五ツ時大坂出船少々夜に入るべし伏見に出迎を
願ふとの意を記せり隨て大坂着日符合せず四と七と孰れか誤書ならん歟姑く
後證を待つ

(長薩協約)

奉呈亂筆候に付得と御熟覽御推了不足之處は御了簡奉願上候
拜啓先以御清適大賀此事に奉存候此度は無間また御分袂仕候都合に相成心事
半を不盡遺憾不少奉存候乍然終に行違と相成拜顔も當分不得仕事歟と懸念仕

(追補) 薩右衛門 依り日記 門日木戸 依り日記 黒田等正 月八日正 伏見着の 證を得た 隨て大 阪着も七 日正と歟 第六編上 卷末補遺 頁(五七) 見

居候處御上京に付候ては折角之旨趣も小西兩氏等へも得と通徹且兩氏ともよ
りも將來見込之邊も御同座にて委曲了承仕無此上上は皇國天下蒼生之爲め下
は主家之爲に於いても感悅之至に御座候他日自然も皇國之事開運之場合にも
立至り勤王之大義も天下に相伸び皇威更張之端も相立候節に至り候はゞ大兄
と御同様此事は滅せぬ様後來之爲にも明白分明に稱述仕置申度乍然今日之處
にては決して少年不羈之徒へ洩らし候は終に大事にも關係仕候事に付必心は相
用ひ居申候間御安心は可被遣候弟も二氏談話之事も吞込居候へ共前申上候通
必竟は皇國之興復にも相係り候大事件に付試に左に件々相認申候間事其場に
至り候時は現場皇國之大事件に直に相係り事そこを不及して平穩に相濟候と
も將來之爲には相殘し置度儀に付自然も相違之廉御座候はゞ御添削被成下候
て幸便に御送り返し被成遣候様偏に奉願上候
一戰と相成候時は直様二千餘之兵を急速差登し只今在京の兵と合し浪華へも
千程は差置京坂兩處を相固め候との事

一戰自然も我勝利と相成候氣鋒有之候とき其節朝廷へ申上屹度盡力之次第有
之候との事

一萬一戰負色に有之候とも一年や半年に決て潰滅致し候と申事は無之事に付
其間には必盡力之次第屹度有之候との事

一是れなりにて幕兵東歸せしときは屹度朝廷へ申上直様冤罪は從朝廷御免に
相成候都合に屹度盡力との事

一兵士をも上國之上橋會桑等も如只今次第にて勿體なくも朝廷を擁し奉り正
義を抗し周旋盡力之道を相遮り候ときは終に及決戦候外無之との事

一冤罪も御免之上は雙方誠心を以相合し皇國之御爲に碎身盡力仕候事は不及
申いづれ之道にしても今日より雙方皇國之御爲皇威相暉き御回復に立至り
候を目途に誠心を盡し屹度盡力可仕との事

弟においては右之六廉之大事件と奉存候爲念前申上候様戰不戰とも後來之事
に相係り候皇國之大事件に付御同様に承知仕候て相違之儀有之候ては終にか

る苦身盡力も水之泡と相成後來之青史にも難被載事に付人には必知らせずとも御同様には能く々々覺置度事と奉存御分袂後も得と愚按仕毛頭無御隔意處を以内々大兄まで爲念申上候儀に付右六廉得と御熟覽被成下自然も弟之承知仕候儀相違之儀も有之候はゞ必々御存分に御直し被成遣候て此書狀之裏へ乍失敬御返書御認め被下候て幸便に屹度無御相違御投じ被成遣候様偏に々々奉願上候實に此餘之處は機會を不失が第一にていか様之明策良計にても機會を失し候ては萬之ものか一つほとも役に相立ち不申事により候ては却て後害と相成候事も不少兎角いつでも正義家は機會を失し候等之事は其例し不少終に姦物之術中に陥り候事始終に御座候間御疎も無之事に御座候へ共此處は精々御注目被爲成候て御論述皇國之大機必無失却御回復之御基本相立候處奉祈處に御座候○乙丑丸一條小事には御座候へ共委曲御承知之如く一身に取り候ては困苦千萬にて且海軍興廢には屹度相係り候事に付何も逐一御存之譯に付兼て存じ通に相運び弊國之海軍も相興り候様無此上吳々も奉願候何分にも小

松大夫吞込吳不申候ては實以困迫此事に御座候隨て海軍は廢滅に至り可申かと懸念仕候先は前條之次第愚按迂考仕兎角一應可申上と奉存相認候儀に付前條委曲申上候通之次第に付得と御熟覽を賜り必々御裏書にて御返書偏に奉願上候其中必々時下御厭第一に奉存上候乍失敬御序之節小西吉氏等其外諸彦へ可然御致意奉願候委曲御禮書は歸國之上出し可申と奉存候爲其勿々頓首拜

正月念三

尙々本文之處は吳々も得と御熟覽を賜り萬一も承知仕違への處は御直し被成遣候て必々幸便御裏書御答偏奉願上候此餘之處は只々機會之處而已掛念至極に御座候大事は元より小事にても必成敗は多く機會之失不失に有之申候此邊之儀は吳々も御助力皇國之御爲奉祈念候○前田恭齋子へ藥禮之事御願仕奉恐入候且恭齋子より詩作も送られ候に付其返答も可仕と奉存居如御承知出立前大混雜にて且々出立仕候位之次第に付其儀も其儘打置候間甚以不情不信之處報顔之仕合に御座候御逢も有之候はゞ此邊之處宜敷御斷り被

成遣候て彼藥禮之處も何にてもよろしくつまり品物にても可然奉願上候失禮之段奉恐入候無此上皇國之事は不及申上乍恐私事も種々御願申奉恐懼候擧て何もよろしく奉願候只々御面會之折を奉待候其中御答は幸便に奉願上候爲其閣筆頓首

龍 大 兄 松 菊 生

極密御獨拆

(裏面朱書)

表に御記被成候六條は小西兩氏及老兄龍等も御同席にて談論せし所に毛も相違無之候後來といへども決して變り候事無之は神明之知る所に御座候

丙寅二月五日

坂 本 龍

(木戸公自叙の要領)

十二月薩の黒田了介木戸を尋て馬關に至る談話一日切に上京を勸む坂本龍馬來て馬關に在り傍より頻りに黒田の説を贊す木戸以爲らく素顔上京して薩

人に面會するは心忍ばざる所なりと因て他人をして上京せしめんと欲す高杉井上等切に木戸を推す遂に公命あり木戸をして往かしむ乃ち耻を忍び意を決し諸隊中より品川彌二郎三好軍太郎早川渡土州浪士田中顯助を伴ひ黒田と共に船上り大坂に着したるは翌年正月四日なり翌日上船澗川を遡る天王山下を過ぎ齊しく慨然流涕す五更伏見に達す西郷吉之助村田新八等迎て共に京に入り薩州邸に至り留ること殆んど二旬其間大久保一藏小松帶刀桂右衛門等交々出で接し殊に歡待を極む而も彼我共に一言の兩藩の公事に涉るものなし木戸は其盡期なきを見て將に翌日を以て辭し去らんとせる日に於て坂本龍馬入京し木戸を訪ふて兩藩の誓約如何と問ふ木戸未だ一も其等の事なしと答ふ坂本甚だ喜ばずして曰く予等の兩藩の爲めに擲身盡力するもの決して兩藩の爲めに非らず偏に天下の形勢に顧み夢寐も安ぜざる所のものあればなり然るに兄等は足を百里の外に勞し兩藩の要路相面接しながら在再十餘日を費し遂に空しく去らんとす其意實に解すべからず何ぞ肝膽を吐露し大に天下の爲め

に將來を協議せざると木戸答へて曰く足下の言固より善し然れども此事自から其遠源あり始め我長州は海内危殆の形勢を袖手觀望するに忍びず寡君乃ち奮然意を決し大に天下の爲めに盡力せんとし危難に處して敢て自から利害を顧みず予等亦一意寡君の旨を輔佐し君恩の萬一に報ひんとす幕府前後反覆し我長州終に甚しき逆境に陥る而も獨り自から條理に依頼し天下に孤立して以て今日に至れり予等上下固より之れを以て臣子の分として自から安んじ敢て怨むる所なし薩州の地位は則ち自から長州と異なり試に見よ薩州は公然天子に朝し公然幕府に會し公然諸侯に交る薩州たる者自から天下に對し公然盡す所あるべし長州は則ち天下皆敵にして旌旗已に四境に迫る一藩の士人只其心中に安ずる所のものを以て一死之に當らんとす固より活路なし長州の立脚地實に危嶮の極と謂ふべし今にして長人自から口を開き薩州をして我と事を共にせしめんとせば是れ彼を我危嶮の地に誘ふものにして援助を請ふに似たるものあり是れ長人の心とせざる所にして予の耻る所なり縱令長州と事を共に

せざるも薩州にして皇家に盡す所あらば長州は滅すと雖ども亦天下の幸なり予は決して我より口を開くこと能はずと龍馬木戸の動かすべからざるを知り敢て深く讓めす而して薩人亦俄に木戸の出發を留む著者以爲らく其間坂本の軒旋ありしなり一日西郷自から口を開き方今の形勢を語り遂に相謀て六條を列して將來を約す龍馬亦其席に列す翌夜京都を發し大坂に下り留ること數日曩きに約する所の六條は前途重大の事項たるに或は誤聞なきを保すべからざるを以て一書を作り龍馬に質す龍馬紙背に違誤なきを誓て之れを還す始め京都を去るや黒田村田等數人木戸を送つて大坂に至り黒田は遂に木戸と同伴し歸途共に藝州に至り長州に來る此時に方り防長は舉國必戰を期し士氣益々振ふ此際薩州の我に通せることを知らしめんには士氣弛緩の虞あり因て敢て人をして之れを知らしめず獨り之れを主公と要路數輩に告げたり

是に於て木戸等は京を辭し歸途に就き協定二十一日に成り即日歸途に就きしもの、如し三十一日桂西郷談決の委詳を聞たることを記し又翌慶應三年正月二十二日夜の日付にて木戸に二十三寄せたる品川の書翰に昨年は昨夜京地發足仕御供申上歸國候云々とあるより推して之を知る

日大坂より上に掲ぐる書翰を坂本に寄せ二十五日復た黒田了介を伴ひ舟大坂を發し二十七日廣島に着し在藝使節と會晤し二月六日山口に歸りて復命す公甚だ之れを嘉みす坂本は正月二十三日伏見に赴き將に明日を以て三吉慎藏と共に入京せんとし其夜幕人の爲めに襲撃せられて負傷し厓に身を以て免れて伏見の薩邸に入る是れ恰も木戸が大坂より書翰を發したる日なり療養若干日三吉と共に京に入り朔日既にして小松帶刀西郷吉之助將に歸國せんとせるを以て之れに従ひ京都を發し十九日大坂に赴き三月五日大坂を發し鹿兒島に赴く七日馬關に着し三吉は上陸して復命す當時薩藩士土持左平太藩の内命を銜み廣島に在り屢、我使節と款語し既にして其歸藩に際し路を枉て山口に來り政府員と會見す亦相互融和の一端に外ならざりしなり

(小田村赤川より上ノ關代官へ送れる書)

前略然は是迄藝州滞在之薩州藩士土持左平太此度薩州へ下向掛け密用有之山口へ立寄政府之内へ相對致度儀拙生共へ相頼申候何卒各様被仰合山口迄海陸無

別條被罷越候様御配意可被成下候彼仁拙生共滯藝旅宿へ毎々罷越國事に付申談置候儀も有之尙政府向に於ても兼て承知も有之儀に御座候間御疎は無之事に候得共別て御丁寧に御取扱可被成候委細は此仁口頭にて御承知被成置御取計可被下候爲右草々如此に御座候恐惶謹言

二月六日

黒田了介の木戸等と共に山口に來るや公之れを引見し厚く待つ黒田留ること日あり二月十四日品川彌次郎に命じ黒田と共に廣島に赴き機を見て京攝に上り事情を探らしむ其十九日品川は黒田と共に舟三田尻を發し廣島に至り留まること日あり其二十九日黒田と共に廣島を發し三月朔日藝州草津より船に乗り四日大坂灣に達し小松等と薩船三邦丸に會し當時歸國揚其六日京に入り薩邸に潜伏す是れより品川は専ら防長趣旨の在る所を世人に告白するを目的とし防長士民の歎願書を始めとし比年來我藩より朝幕其他に出したる公文書の謄本を種々の手段を以て世上に散布することを力め是れ日も足らざるの狀況なり品川が自己の寫字のみにて足ら

ざる爲め贈本の送付を促せし黒田は其下旬再び廣島に赴き尋て山口に來り留まること類の事屢其書翰中に散見す
日あり三月晦日黒田より木戸への書翰に曰く小生にも初筑前宰府之櫛川村與十郎同伴にて恙越す賦にて御座候夫は幕小監徒目付等宰府へ差下り公卿方御引分け之事御達し申との事にて尙又於大坂精々探索仕候處虛説にて小生丈は又々爰元へ罷下り精々情實を探索し幾先に京師へ可達旨云ひ付られ候て藝下仕候

(品川より木戸への書翰)

曳續き御苦慮之程奉恐察候黒田氏私共無異漸昨夜藝着仕土持寓居之後へ潛居罷在候間此段御放念可被下候爰元之事情は國貞君御歸山にて委細御聞取と考何も不申上候胡蝶丸三邦丸一艘は江戸へ參り大砲など積み下り候よし薩之蒸氣艦も六七日後當地通行之よし左すれば小松大しまなども頃日は定て歸國に可相成と考候村田なども頃日は御地發途かと案じ居候(二月二十三日)

(同上)

當地之様子も中々十日二十日には決局相付不申と相考居候に付様子次第一先上京仕又々下藝可仕哉とくろ田とも相談し居申候(二月二十六日夜)

(同上)

私儀當月朔日藝州草つ出帆翌日尾ノ道より揚陸晝夜通にして同四日播州明石まで參同地より船にのり其夕刻天保山沖にて薩三邦丸にのり小松其外に面會被仰聞候趣意を述べ候ところ天朝并列藩への書面は暫く見合せ機に臨みて差出方可然と申事ゆへ其旨に隨ひ今以懷中仕候浪士書面士民歎願書などは日々手筋を以四方に配り申候意外之手筋等も有之御所中へも數部分配仕候京着之上形勢目撃仕候處強て珍事も無之恐多事ながら朝威は日にまし衰微此節は二條殿下なども尹宮と合體尹宮は會賊を頼み殿下は橋姦を御依頼遊され何も尹條一會桑之處にて内決之上朝廷御會議と相成真の表方之御會議にて國事掛之御方々様も唯決議之段御聞まで之事にて未前之事は丸て洩れ不申候よし○昨日久市正三殿へ參殿に相成右等之御話有之唯々御歎息のみよし實に悲歎之至に御座候先日正三殿御國之事よりして嫌疑掛り幽囚いたされ居候有栖川殿其外之諸太夫放囚之事など御建白に相成候ところ殊之外朝廷より御譴責有之以後屹度建白等之事仕間敷尙諸藩士往來仕り藩士之議論とも承り上言などは

別してよろしからずと御叱りを蒙らせられ候よし○尾州は大きに此度之處置
 不同意之よしなれども御承知之通りの國からゆへ何も手を出す事は不相成候
 へども周旋方なども段々上京罷在候に付國情之書面等も暗に手に入れ置候因
 之松田も今以上京不仕如何哉と按し居候世上へ流布之手筋は山之如く有之候
 間日夜謄寫して持參之書等も暗に配分仕候間此段御放念可被下候明朝より對
 州人歸國之よしに付荒まし時情申上候尙便りも有之候はゞ此度之士民歎願書
 其外御送り方奉願上候私も右之次第故當分は滯京仕る積りゆへ此邊之處よろ
 しく御頼申上候(三月十四日)

(同上)

昨日薩坂邸より五卿様方五藩へ御轉座之事に付昨日監察小林甚六郎下向之よ
 し申來り右に付クロ田氏此度筑まで下參に相成馬關へも一寸立寄られ候様願
 置候間委細現場之情實御聞取可被遊候且又申談書再度之歎願書何卒幸便に早
 々御送り日夜奉待候私儀も歸國之事クロ田氏より内々相談も有之候得共元よ

り御國を出るときより決局のつく迄は微意を遂げ度決定仕候事故今更歸國之
 意も無之今暫滯留之段願置候間御面會に相成候へばよろしく御噂失敬ながら
 奉願上候申談書板本何卒御送り四方より山の如く望み候へば謄寫の間なく大
 きに込り申候御送方偏に奉願上候(三月十六日夕)

纏て乙丑丸事件の如何を見るに木戸の入京して薩邸に在るや互に未だ論決の機
 會を得るに至らざりし如し二月中旬に及び薩藩村田新八川村與十郎木藤市助京
 都より山口に來る公之に謁を賜ふ村田川村は特に乙丑丸事件に關する使命を帶
 ふ木藤は單に歸藩の途次修交の爲め來りしもの如し當時坂本龍馬も來藩の意
 あり伏見にて遭難の爲め果さず乙丑丸に付ては姑く之を鹿兒嶋に廻航せんこと
 を提議し我政府之を諾し一段落を進めたり同月下旬村田川村は再び上國に向ひ

木藤は太宰府に向ひ相前後して馬關を去る
村田川村木藤は京都より同行せし如し村田川村に關する小松の添書坂本の書翰共に二月六日付なり土方伯回天實記に木藤は二月六日京都發とあり品川の二月二十六日夜の書翰に依れば同月十七日頃三人とも三田尻に在りし如し木藤は十九日山口に着し藩主に謁せしこと同天實記に見ゆ村田川村も其頃着せり木藤は二十六日黒崎に着し二十七日太宰府に着せしこと同天實記に見ゆ村田川村は二十七日付木戸への告別書あり此等諸證憑皆左に之を収録す二十六日付木戸宛佚名の書あり山

口滯在中の厚意を謝し馬關にて高杉伊藤等に
面晤の事に言及せり蓋し木藤の告別書なりx

(小松より木戸への書)

一翰拜呈仕候遠路無御恙御歸國之上益御多祥被成御座珍重奉賀候然者其砌は
萬事失敬相働候儀殘情不少奉存候しかし緩々御高話拜承大幸之至奉存候扱か
の蒸氣艦之條兼て承知之趣も有之候付尙勘考之上御相談申上儀有之村田新八
川村與十郎細々申含差出申候間御聞取被下候て宜敷御裁判可被下候爰許之形
勢等は兩人より御聞取可被下候兎角御配慮之程御察申上候何も筆紙に盡兼候
仕合御座候爲天下金玉御保愛被成御座候様奉祈候先は此旨任便御起居御尋迄
如斯御座候恐々不備

二月六日

小松 帶 刀

桂 君 閣 下

再啓諸君へ別段一書も呈不申候間宜敷御鶴聲可被下候

(坂本の書)

此度之使者村新同行にて參上可仕なれども實に心に不任儀有之故は去月二十
三日夜伏水に一宿仕候處不計も幕府より人數さし立龍を打取るとて夜八ツ時
頃二十人計寢所に押込み皆手ことに鎗とり持口々に上意々々と申候付少々論
辯も致し候へども早被殺候勢相見へ候故無是非彼高杉より被送候ビストール
を以て打拂一人を打たをし候何れ近間に候へばさら耳あと射不仕候得ども玉
目少く候へば手をおいながら引取候者四人御座候此時初三發致し候時ビスト
ールを持し手も切られ候得共淺手にて候其ひまに隣家の家をたゝき破りうし
ろの町に出候て薩之伏水屋敷に引取申候唯今は其手きづ養生中にて參上と、
のはず何卒御仁免奉願候何れ近々拜顔萬奉謝候謹言々々

二月六夕

龍

木 圭 先 生 机 下

(品川より木戸への書)

本書は後文に出す二十六日夜の品川の書の別啓なり村田川村木藤は將に山口に赴かんとし黒田
は將に山口を去り廣島に赴かんとし三田尻にて相逢ひしなるべし此書に依れば黒田は村田等の

x
乙丑丸紛
糾の原因
は仍第六
編上補遺
(五七四
頁)を參
看せよ

將に提議せんとせし乙丑丸鹿兒島廻航に反對せり其意は此艱難の際に船艦を奪ふ如き動作は不可なりと云ふに在り但し村田等は之を聽かさりしなり書中の海軍局員とは長瀧三田尻の海軍局員の意なるべし

別内啓先日村田河村御國罷越趣意は乙丑艦一件に付京師政府よりの命を受け右艦一先鹿兒島表乗廻し薩公相談之上有無之返答可仕との事にて兩人態々参り候由に御座候然る處黒田面談にて大きに議論に相成黒田申候にはかゝる切迫の事情を見受け折角頼に致し居候船を暫時之間にもせよ乗廻すなど、申事有之候ては不相濟儀と論破いたし京師政府之處はクロ田歸京之上此般相斷木藤は歸國之上此般可申述との論決傍書に「十」に相成居候ところ翌十八日村田申候には今朝海軍局より某参り談話之處強て入用も無之様な口氣有之貴兄申ところと齟齬いたし候と又々黒田へ詰懸候處クロ田全く左様にては無之戰爭に相成候へば御入用には相違無之たとへ此船はともかくも危急之節別船でも借用傍書に「此談は先日大道にて可相成位ひの事故決して左様にては無之と論破いたし置直に分袂發足仕候決して山口にても夫故船一件は不申上と推察仕候

二人は村田川村を指し一人は木藤を指す如し(追補)土佐勤王史に依るに二月十日木戸より坂本への書は村田川村は遠藤村木藤路欣喜此來訪に御座候誠留に付何事も御察被下度候と見ゆ三人の事明なり

此談も船中にて承り決して他言無之様精々申候へどもクロ田が苦心内々申上置候間御含み置御他言無之様伏して奉願上候爲其勿々頓首(二十六日夜)

(二十一日付木戸より廣澤北條へ書翰の一節)

一薩人罷越候儀不別事先達て乙丑丸乗組之人數如御承知識論沸騰始終之處治り兼候様子に被相察候間必竟彼乗組人數彼方へ引受吳候様相頼置候處於國許評決候事に付歸國の上得と寡君へも申入何とか評決可仕に付乗組人數を何卒乙丑丸にて彼國迄送り届吳候様にとの事に御座候且又藝國邊之情實等も承り二人は早々上國一人は歸國之由に相聞候

(村田川村より乙丑丸乗組員への書) ×

先日粗御咄申上置候乙丑丸御船弊國へ此節廻船之儀山口にて木戸君へ及御談候處御方御一列にて廻船彌以聞濟被下別て仕合之至に御座候就ては馬關へ差御し相成居候俵米之儀も其節積込方御取計ひ被下候筈に御座候に付左様御心得被下度尤此御方様是迄御乗込之人數は廻船之節は別て御斷り申上置候事御

座候に付是以其通木戸君御承知被下居候に付此段用事まで一筆爲御心得如此得御意候以上

二月二十四日

小谷 耕藏様
菅野 覺兵衛様
村田 新八
川村 與十郎

要用

(村田川村より木戸への書翰抄)

花翰拜誦此節は參上之處始終御世話遠路態々御歸府被下何共御厚志不淺殊に珍品御惠贈重疊難有御禮申上候扱蒸氣艦之儀廻船御聞濟別て大幸之至奉存候猶御國へ御廻船之節は外に別艦乗込之者多々御座候其人數を以改て乗廻り方可仕云々(二月二十七日)

而して薩藩政府に於ては當初購入に際し長藩主より彼藩主への依頼ありて藩主間相互の親裁に出づるの狀ありしを以て更に藩主間相互の意思疏通に因りて以て解決の便を得んと欲する意あり長藩を以て之れを見れば當初の事必らずしも

此書は黒田了介が其所見を品川に漏らし長藩より使者を遣り意に遣り通思の疏通を計るを勸告したるものなり高杉伊藤に遺書命じたるは蓋し此原

然らざるも上杉宗二郎が薩藩に交渉せし所は或は此の解釋に近きものあら薩人中此意見を有する者あること漏れ來れり會、高杉伊藤の二人薩行を冀ふ事あり遂に二人をして公の親書を奉じて鹿兒島に赴かしむるに決したり

(品川より木戸への書抄)

去年來御配意之船一件に付黒田より縷々承り候ところクロ田申候には此一件に付ては上杉氏山口において君公に拜謁いたし候處蒸氣艦買入之事御直に御頼みに相成候に付直に歸國此段修理大夫并小松などへ相談いたし候處諸器械之儀は如何様とも可仕候へども艦と申ものは何國より何國某に賣渡いたし候段諸方へも達し候位の事ゆへたやすく買得不相成段斷候處上杉氏國情并君公より御頼み相成候邊を以縷々説得せられ漸買入候處右之次第に相成何とも不相濟事に候右に付桂先生御上京其邊之處御頼みに相成候へども君公と君公との取相故孰れ寡君相談之上ならでは不相捌と申事に御座候薩國元においても彼是疑惑を生じ候ものも不少候様相聞候に付一應御挨拶として内々御使ひでも御差遣に可相成哉御直翰でも參り候へば尙更よろしく黒田も此邊之處大

此書は黒田了介が其所見を品川に漏らし長藩より使者を遣り意に遣り通思の疏通を計るを勸告したるものなり高杉伊藤に遺書命じたるは蓋し此原

に望み居申候實は此論先日船中にて内々私へ話し候に付藝着之上直に可申越と申置候處クロ田申候には御多忙之中是等之事申上るは餘り恐入候故言はぬ以前にして吳候様申事に付捨置申候處今夕寓居にて色々之話より此の談に相成候ところ十分右之使節之望み有之様洞察致し候に付右之使節論小生之論にして木戸まで内々相談仕り候ては如何哉と談じ候處大きに得心之事に付愚按申上候間何卒御熟慮なし可被下候小松西郷も多分歸國に相成居可申候左すれば直に船の人数引取之事も論決可仕候薩公御捌とは申もの、孰れ小松か西郷か居らねば何も運び不申候夫はともかくも一應之御挨拶として御使ひ参り候様有之度事と幾重も奉祈候乍併御買入後何ぞ御挨拶有之たかも存じ不申候へども黒田より承り候處にては何も無之よしクロ田申處は只君公より君公へ御頼みに相成候處へ目をつけ居候間此邊之所篤と御汲取御熟慮偏に奉頼候(二月二十六日夜)

惟ふに佛蘭西の意向は佐幕なり勤王の諸藩は之れが牽制に努めざるべからず否

らざれば國家將來の事憂ふべきものあるのみならず銃砲船艦の購入等亦多く不便を見るべし薩藩既に密に英と親む我亦井上伊藤等の緣故に因て英公使と意を通ずる所あり今春二月に至り英公使將に不日鹿兒島に遊ばんとする風説あり或は之れを稱して薩英會盟と謂ふ高杉伊藤之れを聞き以爲らく事甚だ重大なり我亦之れに加はらざるべからずと是れ二人自ら往て之れに當らんと欲し之れを藩政府に請ひし所以なり薩藩政府公の親書を得て乙丑丸事件を解決せんと欲する意あるの報亦偶々此際を以て至る上掲品川の書翰是に於て二月二十七日高杉に公の親書を授け命ずるに接薩使を以てし伊藤を之れに添へ鹿兒島に赴かしむ親書及び贈品に關し「御直書は高春請谷へ相渡申候御進物は爰元佳品無之に付此度は谷より於彼藩誰そへ演説仕置追て幸便被差送候都合に有之候」と記せるものを發見せしも其文面及び贈品未だ詳ならず此文中高春は井上にて谷は高杉の事なり二人命を受け薩船の通過を待つ至らず會々三月六日ガラバ汽船横濱に至らんとし馬關を過ぐ二人乃ち其歸崎を待ち馬關より便乗せんことを約す英公使西下はガラバ歸崎後なるべきことを聞き得たるを以て時機を失ふの虞なきを以てなり其二十一日に至りガラバ汽船歸て馬關に至る二人即ち其船に乗じ其

日夜半長崎港に入る

(高杉よりの木戸への書抄)

承候得ば英人薩土と會和之事御座候由弟も知らぬ顔にて其席へ加り見度候爾し是も眞に君命共御座候はゞ難有候得共自所望には無之候日本も三百年や四百年に回復出來申間敷候慨嘆々々(二月二十日)

(同上)

追啓

薩英會盟之節同席へ加り度申上候處今日伊藤來訪右及相談候處隨分面白き事と申居候に付相行れ候事に候はゞ伊藤同伴崎陽行被仰付候はゞ仕合申候右御周旋奉頼候速なる方宜敷かと奉存候拜白

二月二十一日夜勿々認

尙々相行れ候はゞ千萬仕合奉存候趣意は薩先生之御供を仕而已御座候却妙々々

(伊藤よりの木戸への書)

過日鴻城にて拜別即日出發歸關仕候爾後薩船通行船日々相待居候へ共今以見當り不申候いづれ近日通行可仕に付見受候へば直様罷越相通置可申と奉存候ガラバへも近日之中書簡差送右之都合に取計らはせ可申と奉存候此段は御安心奉願候いづれ此事被行候へば御一人御越ならでは不相叶候事に付東行君へ歸來御噂仕候固より御同論にて自然左様相成候へば自ら御越有之度就ては私も是非從行仕度左すれば旁都合宜敷可有之と奉存候且此會へは是非爲後日に御加り無之ては不相濟事に付機會を誤り候等之事無之様仕度ガラバへ懸合置凡期限相決候事承り候へば崎陽迄も出懸置申候へば猶更以大丈夫之事に付兎角東行君御越に相成御決論相着候へば速に被仰越置候様只管奉願上候云々(二月二十一日夜)

(伊藤よりの木戸への書抄)

瓊章御投與被仰付奉謹讀候先以老臺御壯榮可被成御座爲邦家奉賀候木藤市助

出關會て江戸にて識面之人にて旁話故舊都合宜敷御座候然處此度は別段差急候由にて明早曉出發筑前へ渡海仕候都合に御座候今夕東行先生一同大坂樓にて饗應仕候陳先日略御話申上置候英人薩へ参り候事に付ては是非政局之御中より大夫之御名目を以御越無之ては不都合と愚考仕候に付過日了巖出萩之節委細東行先生及び私より呈書仕置候次第疾く御承知被爲在候御事と奉拜察候右に付ては東行君自ら御越有之度之御注意私を從行させ度に付一同参り可申との御望可相成は早々御決議被仰付度奉願上候隨分此會は邦家之安危にも可係事に付肝要なること、奉存候其上者木藤市助話にては幕佛之交際逐日て親敷相成候趣旁油斷のならぬ時節と奉存候小松西郷も近日下向當港通船之趣に付ては其節便船にて罷越候位之都合ならでは機に後れ可申乎と煩念仕候夫故何卒右之御命令速に御下しに相成居申候へば萬幸不過之と奉存候旁御勘考奉願上候書他三好軍太郎出關仕候て鴻城之御模様伺之上萬可申上候大砲一事は縱令へ河崎へ謀り候共長府の政局舉て奸物之世にて關中之人心も殆相離れ居

候位に御座候長府正義之士より段々私共へ出山情實申通急に退奸進正之御處置を本藩より不被仰付ては後患難計と追々被論迫候位之勢に御座候井上少輔杯も丸て引籠り居申候由何分賄賂之盛なること夥敷事と市街道路之ものと雖驚愕仕居申候近日前段委敷事情可申上に付其節御英斷御處置奉願上候尙薩行之事は別段東行先生より可被仰越候に付可然御取捨奉願上候貴酬旁呈書仕候恐惶頓首

二月念五夜三更

字

一

拜

廣寒老臺

玉座下

尙々老母及び醜妻共萩にて奉得拜顔候由毎々奉勞御神慮奉恐入候

(高杉の書)

朶雲奉拜讀候隨尊命薩人應接相談候左様御承知可被下候薩も御盡力を以追々親和之萌有之爲邦家奉大慶候從是は失信ぬが專要に奉存候申も疎に御座候得

共其邊御同局中へも兼て御示教有之度奉頼候了巖和尚好便に相考一書相托候處急に御出山に付間違に相成因重て奉得尊慮候間左様御承知可被遣候追々伊藤にも承候薩人英夷應接近々有之由にて小松西郷なども西行之由御座候弟も昨年春輔同行崎陽罷越少々及談話候譯も有之此度春輔同伴薩人之末席に相加候はゞ外國人へ之都合至て宜敷且御國御爲之一因に可相成事に付別人を被差越儀候はゞ弟へ被仰付候はゞ難有奉存候和議以來は應接も致來候儀に付都合は至て宜敷御座候何卒其邊御深慮之上御周旋被下候はゞ難有奉存候小松西郷蒸氣艦にて當處通行致候由に付其節便船を借り候はゞ甚妙と存候月末か來上旬かには通船之様子御座候間前以命令下り居候はゞ事速に相行候儀と奉存候旁御配慮奉頼候藝州應接事未不始候哉小笠原も書生上りの男永井も同斷にて山縣敬宇とは宜敷角力と存候此角力は隨分相方面白き決論にも可相成之處後角力肝要之儀と奉存候兎角長州人は初め脱兎後如處女所願は始は處女後脱兎之如く有之度奉頼候弟輩假令崎陽行致候ても戰鬪相始候へば速に一策をもち

て歸國可仕候隨分妙策有之らんと存居候旁弟崎陽行は願ふ處御座候御推察可被下候様奉頼候其他山々可申上事も御座候得共餘り多辯に涉り候付是にて閣筆申も疎候得共爲邦家御自重專要に奉存候恐惶謹言

二月二十六日

赤馬關隱人

東 行 拜 白

老梅書屋先生座下

(高杉の書)

奉拜讀候不相替御盡力被爲在奉恐賀候弟事も依舊碌々消光仕候間乍憚御安意可被下候態々御投書被遣候段御信切之程不堪感佩乍爾決て御懸念は御無用に奉存候實は今月六日からは當港通行橫濱罷越候其歸懸之便を借り候約束に御座候右ガ印罷越候儀は即英薩和會之事に御座候右故誤期之事毛頭無之候間左様御承知可被下候弟も此度之行は少々決心致せし事も有之候何卒爲風爲雨毛利御家之御盛興を祈る而已御座候委細之處は丸で井上聞多氏へ談置候間御聞

取奉願候尊兄へは義を失ふかも不存候得共心中には不愧不負候間不惡御含可
被下候弟先年俗論と一戰之節肩印に認候文句 雖蒙惡名于天下欲爲毛利隱
忠士 御一笑可被下候弟報國心事始終如此御座候段々申上度事も御座候長
言無益因而閣筆(三月十三日)

二白時候御厭申も疎に奉存候頓首

老梅書屋先生玉机下

東行生拜

(井上の書)

此時井上は故ありて快々樂まず己れ亦高杉伊藤と共に洋行せんとせしも山縣狂
介林半七久保松太郎等の説を容れて思ひ止りたり本書竝下掲伊藤の書は此事の
消息をも漏せり

分袂後益御多祥奉賀候今に形勢も不變實に陰晴無度諸事曖昧之事のみ世之習
ひとは乍申行末之事如何成果候哉と云て曠日彌久うるさき事に候今度谷林兩
士薩行之事色々遠大之策も有之少々は滯留之由歸關之上承り候□□去留共に
弟等之敢て異論不仕事柄は克々承り居り申候中々書中杯に申上候次第にも參
り不申候後謁口述可仕候追々眞知己も去り弟も同行之意も起り候得とも山狂
林半久保杯よりも一先藝之模様見合候様との事故是も異論なく順ひ申候格別

戰爭之模様も不相見候はゞ弟も追跡候内心に御座候當月中も見合せ候はゞ粗
時勢相分り候半と案じ居候乍去日々心細く世上よりは廢物にいたされ一身之
處置にも込り候得とも凡模様之決し候迄は小郡へ幽居之覺悟に御座候乍去二
十日頃に兩士出立之積り故見立次第引移り之心積りに仕居候今一應拜青萬申
上度事も色々御座候間山口迄罷出候歟御出關とも御座候歟御聞せ奉頼候若し
勢も時も不來曖昧之事のみ打續き候はゞ弟も早々去國之意に候此之事は必々
兄又老母へ洩ぬ様奉頼候他は拜青之上と萬申上縮候草々謹言(三月十四日)

廣寒老兄

世

外

(伊藤より木戸への書抄)

此度東行君への芳簡拜讀色々御煩慮之趣も被爲在候哉拜察仕候處過日ガラ
ハ通行之節略様子承り候邊も有之旁不失機様工夫仕居候間御放念可被下候委
曲は東行君御返簡にて可被爲在御了承候東行君御高慮も有之歸來少々遅々に
及び可申哉も難圖候處其邊之事は萬端東行君より事細世外君へ縷々御申殘相

成可申事と奉存候付他日御聞取可被爲在様伏て奉冀候尤開戰端動干戈等之形勢に至り候へば片時も速に歸國之論に有之申候に付更に御氣遣不被爲在様奉禱候世外君は當分滯關依然と流寓乎或は小郡邊へ遜居を構乎之論未決に御座候處實に奇才卓識之士をして空敷此多難御時節を過させ候事いかにも殘懷之事と奉存候政局にても其人を不捨と申御主意はいかにも感佩仕候へ共其人を用ふると云御主意無之ては捨之も同體乎と愚考仕候此多事之日に當りて區々之嫌疑を而已恐れ果決雄斷進選之御處置無之は實に殘念之事と奉存候唯今之儘に曠日彌久御過ぎ被爲在候へば終に一身を見捨脱然之思を抱かせ候様可相成乎と苦念仕候固より老臺之御一處置にては決て外見も有之旁御六ヶ敷事と奉存候へ共廟堂諸君之御任乎と奉存候放蕩無頼も自由之身にては難止乎と懸念仕候兎角此等之事は今更老臺不申上ても相濟候事に御座候へ共此度去關仕候へば世外君にも老臺にも暫時御離別申上候事に付區々之言不惡御憐察奉願上候(三月十四日)

高杉伊藤は既に長崎に着す而も二人の志す所は皆に薩英會盟に加はるの目的を達し及び乙丑丸の紛議解決に任ずるのみに止らず實は再び洋行せんことを企畫せしなり初め二人以爲く長幕事件未だ遽に解決に至らず隨て開戰猶日あるべく而して日本對西洋問題は他日益重要案件たるへしと故を以て高杉は切に一たび西洋に航して目撃研鑽する所あらんと欲し伊藤之れを賛す加之佛國の意向我勤王派に利あらざるが爲めに之れが牽制の策を講ずるは刻下の急務なりしこと亦二人の胸間に往來せし所なるが如し二人の志は井上も亦之れを賛したり而して二人の既に接薩使として程に上らんとするや木戸は事を以て萩に在り井上等は獨り木戸に告ぐるに其實を以てせんとし木戸は之れが爲めに急に馬關に赴きたるも高杉等既に船上れるの後にして遂に相見るに及ばざりき

(井上の書)

急飛を以申上候過日井留歸り便にも申上候様谷林兩士薩行之儀に付ては表は其名にて薩之方相濟候上は支那邊にて留學之積り何れ方今は空日消光候より

も未來之大策肝要之時節には尤之事に候就ては未來之事杯は弟一人承知候て至て重荷之事故是非とも老兄には御出關諸事御申合せ被成下候はゞ凡内事を致す人丈は篤と談判不仕ては内外齟齬候ては成業之目的も無覺束候且弟一人承知候て他之有志杯に被責候て申開き無覺束次第に御座候て又一人荷擔足も腰も立ぬ目に逢候ては實に苦敷候間御憐察候て何も御打置此書届次第御發途奉頼候二十日間には定てガラバ船着仕候半と奉存候若自然夫より内に出帆に相成候迎も一應御出關伏て奉希候他は拜青と萬申上縮候草々頓首

三月十八日

二白幾重早々御出浮奉待候以上

廣 寒 老 兄

(伊藤の書)

兩三日間よりいづれ出帆可仕都合に可相成と奉存候處ガラバ船横濱よりかへり不申日々相待居申候萩城之光景は如何之模様は御座候哉と懸念仕候爲差御

用無御座候へば折角東行先生も御待故一寸急に御出關被爲在候ては如何可有御座候哉左すれば色々被仰合置御都合も宜敷可有御座乎と愚考仕候書外奉期拜青候幸便呈書勿々拜白

三月十八日

松 菊 先 生

虎 皮 下

(高杉の書)

唯今ガ印來關今宵出帆之覺悟御座候餘り御家門かしさに任せ一筆遣申候委細之儀は井多氏承知候間御直に御聞取可被下候必竟毛利之御家之末萬歳を祈而已御座候爲風爲雨毛利氏忠臣たらんことを願而已也區々心事御憐察所祈御座候老臺も何卒御勉強被下候様奉頼候必ず海外より宜敷便りも有之候付御待可被成候井多にも何卒馬關滯留相成候様奉願候云々(二十一日)

東 行 生 拜

松菊先生玉机下

一六八

(高杉の書)

ガ印船來着御來關存居候得共不得已出帆仕候色々御咄仕度事も御座候へば世外氏へ丸て談置候間御聞取可被下候云々

二十一日夜認

崎陽縷々可申上候以上

松 菊 先 生 東 行 生 拜

玉 机 下

而して高杉伊藤の長崎に入るや小松西郷は歸藩して在らず市來六左衛門等藩邸を留守す二人之れと會見して薩行の事を謀る市來曰く鹿兒島亦未だ時勢を知らざる年少輩あり君等にして往く或は齟齬を生ぜん使事の如きは請ふ之れを此地に於て受けんと之れに加ふるに英公使も當時急に鹿兒島に來らざるべきの報を得たれば二人市來の言に従ひ鹿兒島行を止め市來と使事を授受し高杉は長崎に

留り伊藤をして一たび馬關に歸らしむ是れ使事を復命し又英公使に回答を要する事ありて之れを謀らしむるが爲なり英公使に回答を要する事は蓋し會見一件なり會 廣島應接の破裂を傳ふるものあり是に於て乎高杉等の計畫復た又一變せり事は別章に詳なり

案ずるに高杉書中に謂ふ所の義弟は即ち南貞助にして昨年四月山崎小三郎竹田庸次郎と共に留學を命ぜられたること前卷に出づ而して三人共に馬關よりガラバの所有船に搭し英國に向へり竹田は故ありて一旦上海上り歸國し年餘後渡航せり又野村は即ち井上勝なり遠藤は此後ち日ならずして歸朝せり左掲書中に記する所は此諸人の苦學の状をも見るべきに因り全掲す

(高杉の書)

拜呈兩先生御清榮爲邦家御盡力可被爲在奉恐賀候弟事も長崎薩邸罷越候處幸に側用人市來六郎右衛門在邸にて御使者之事及談判候處六郎右衛門申候には實は地下も僻地にて京師當地之邸などは違ひ固陋之者も不少儀に付當邸にて御濟せ被下候はゞ却て仕合申候乍爾必城下へ御出浮無之ては不相濟候へば

一六九

素より御誘引可致と之事に付御書之御趣意も内々申入當御邸にて市來引請御書相渡并御進物等も差出御使者相濟せ候事に御座候鹿兒島迄參不申とも隨分薩邸之面振も相明り候事に御座候右に付弟事は近々船便有之次第上海迄罷越候事御座候英ミニストル來關之一條も有之薩へ御使者之復命も有之旁之處を以近々之内春輔に一應歸關を賴候事に御座候其節春輔より委細申述候間御直に御聞取可被下候○壬戌丸買代不足之分楊井謙藏手附金鐵砲代不足之分今日にては捨物にして有之候處餘り殘念に付ガラバへ及相談候處ガラバも必請合も不致候得共周旋致みんと申候然處矢庭に右定約書并請取等無之ては不相濟と申候間兩條之分共此度春輔へ御渡被下候様奉賴候是亦國益を益す之一端御座候若兩條之書面山口萩などに御座候はゞ御取寄被成下候様奉賴候著者曰丸買代は賣代の誤字にて村田が上海にて賣却したるときは代價受取の殘餘なり又楊井手付金は鐵砲買入の爲め手付金を拂ひ外商其供給を爲し得ざる爲め其金を返却せしむべき殘餘なる如し後章に載する伊藤の書に可成は銃にて受取り來らんとあるにて知らる○ミニストルへ之返答は薩之跡を一步退き蹈み候位が宜敷かと奉存候邦家之危急を凌之事に付御計略を以御見物之爲軍艦へ御出

被成不計ミニストルに御逢被成候との儀と申位にては如何哉と奉存候木主大兄御深慮被下度奉賴候○薩には家老新納刑部五代才助先日英より歸着日々外國之事に手を附候様子に御座候既に昨夜も米利幹に五人書生を遣せし也金も餘程入る様子不敢顧是我邦所不及○倫頓より書翰到來遠藤は今年正月頃出立此節歸國様子なり此に可驚一事あり義弟同行山崎生倫頓にて病死す是亦金なども少く寒貧よりして病を起し候様子なり可悲可愧是亦國家耻辱之一端なり此事などを君上へ御聞せ致しなば嗚々御歎息と奉察候實に此兩人難義を見候様子に御座候遠藤は學文も不出來より歸國せし様子也山尾野村隨分能出來候様子左すれば兩人之遊學料は御送り相成候ても不惡様奉存候山口へ被仰越春輔之便に御托し有之度奉賴候山崎も殘念は殘念に御座候得共日本人にて埋骨西洋候者未有之長門人之先鋒是亦他邦に勝れる處同人之薄命は可悲なれども如此名臣あるは國家之盛なるならずや少々の遊學料を惜む位にては困入候政府左様御傳聲奉賴候○御賴之軍艦代不足之處有之候由是亦春印便に御送被下

度候御存之通弟共出足之節弟は千金春印五百金薩行之御勘渡も差引候位之仕向弟は馬關へ引移之入費も有之夫より出候位故兩人にて千金有無之勢彼是に付一應春印歸關致候譯に付何卒今少し金も相運ひ候様御周旋奉頼候乍爾弟は金之事と申候事至てきらひに付政府に六りと言へば夫れにて宜敷御座候委細は春印より御直御聞取可被下候○聞多君へは色々御厄害を御頼致置候處家内の者共は歸萩致候哉其邊程能御取爲奉頼候南部之遺婦も宜敷御頼申上候此度決心罷在候付少々なりとも學文成就せねば歸國は不仕候旁御承知可被下候○春印歸關蒸氣船なれば隨分速可仕夫れ迄に御兩人様共御出關有之度奉頼候先は用事而已勿々如此御座候入江和作其外南部へも萩へも書翰不送申候間宜敷御致聲奉頼候春印歸關之節何も縷々可申述候頓首拜白

三月二十八日認

二白爲邦家御自重專要申も疎奉存候松菊先生へ申上候萩之愚父へ御逢も御座候はゞ程能御慰め被下置候様千萬奉祈候拜

松 菊 老 臺 東 行 狂 生
世 外 老 臺 座 下

(伊藤の書)

幸吉歸崎不仕候付ガ印大に怒申候付早々御返可被遣夫而已態々此人參り候事に御座候委細直に御聞取可被遣候

拜別後愈御安康可被成御滯關奉賀候出足之節は彼是不容易奉懸御高配奉恐入候都合船路風順宜敷二十一日夜半頃着船仕候着船之上も岸良河崎等同行にて殊之外都合宜敷即夜入邸野村同宿今以同處に相滯居申候小松西郷其外歸國市來六左衛門一人出崎中にて別段委敷事情は相分不申候へ共御使者一條は市來存寄にて却て鹿兒城に堂々と參り不申當地にて相濟候方可然との事に御座候其儀は彼是彼の國にても少壯輩未解兩國之眞情實ものも有之旁以雙方不爲ならざる様取計ひ度との主意に有之申候左すれば直様渡海之つもりに御座候處

實は御承知之通金も甚以拂底崎陽之雜費且は衣服之取調等を相除き候へば僅に兩人兩三月を支候而已にて甚無覺東奉存候に付東君は是れより直様渡海僕は蒸氣船を雇ひ一應一寸近日歸關之つもりに御座候に付何卒老臺之御配慮を以竊に桂君當り御謀り御良策奉願上候委細東君より可被仰越候に付別段委敷不申上候然處僕歸關大主意は東君御使者之復命は不及申彼の横濱より之論に付確然たる御返答相成置不申てはいかにも不都合乎之様奉存候ガ印も其論故是非一應歸關之覺悟に御座候尤一兩日滯關直様出浮之都合に付東君より被仰越候事件は一日も速に御取計ひ置可被遣候尙僕歸關論は他人之耳に人らす方が宜敷と奉存候其御含に被爲入可被下候

一先達て御頼相成候ゴンボート代金三ヶ一御拂渡可相成約定にて御座候處五萬兩御拂渡相成候に付六千ドル餘り御拂不足に相成居申處ガ印よりは非約定通り御渡被下候様申事に御座候是は佐藤基作能く承知に御座候僕歸關候へばガ印よりは非持參吳候様達て相頼申候右に付歸關之節はガ印之書簡佐

藤迄送らせ可申と奉存候尙其節受取は船將より差出候都合にて可然と奉存候野村其外之金も其節持參之覺悟に御座候に付兩條共桂君被仰合置御運び置被遣候様伏て奉願上候

一當正月仕出之英より野村書簡相達申候處遠藤謹介歸國之模様ニ被察申候此節無程着船乎と奉存候山崎小三郎南同行之處兩人共無金にて着英之上大に困窮にて朝夕衣食之事も難辨晝夜共衣服をも不替且居處に火爐等も無之深冬を凌ぎ誠に無窮之貧困を致候由居住は彼之クーパー之内に居候由ハリソン父之世話にて有之候處誰一人金を出候と申ものも無之送光せし中山崎は勞瘵之病を得殊之外難義仕候折柄ハリソン父より月別二十五パウンド宛を救ひ吳候由にて夫よりドクトルウイレムソン方へ轉居同人夫婦至極懇切に致候由然處其中に山崎は病氣日に深入終に病院に參り療養致居候趣野村より申參り候處此節英人ホーム申人本國より渡來申には山崎は當 march 之始頃終に病死仕候と申居候實に不堪悲泣事と奉存候野村書中に云らく山崎之

病氣畢竟衣食不足朝夕餘り之困難を經其上異郷言語等も不通且は自國之事を煩念して不休終に此病を醸すに至る此以後は必ず外國へ人を出すなれば先づ金等の事を辨其上ならでは決して送り呉れ不申様との事に御座候野村は分拆精密學を執行仕候由山尾はスコットランドに在て造船局に入候由兩人共隨分學業成立の由に承り及候巨細御拜面之上委敷可申上候前文申上候緊要之事件は片時も速に御運置可被遣候其他薩國情實等東君御書中にて御了承可被爲在候爲其誠惶謹言

三月二十八日

春 畝 生

尙々歸關候へば奇隊之銃は取歸可申つもりに御座候金之御用意御通達被成置可被遣候僕歸關之節は木圭君老臺是非共御滯關奉願上候自然御出關無之候へば國家之事務に大關係仕候事に付是非早々御出關相成居候様奉願上候

世外老臺 玉座下

木圭君御轉覽奉仰候

當時產物交通上長薩の關係又益々接近し撫育局吏員大塚正藏は長崎に赴きて薩邸吏員と協商する所ありて互に有無を交易せり乙丑丸を以て米五百石を廻送する準備ありしも後ち幾も無く之れを送出す亦此時に在り是れ蓋し客冬坂本龍馬が薩藩の爲め請求せし糧米の一部なり而して藩内に於ては舶來品の使用を寛にし會所を設けて之れが販賣に任じ以て資金を増殖し藩國の緩急に應ずる計を爲せり是れより先き諸士男女共に舶來の天鰯絨を夜服の襟及び帶等に用ふるを許し尋て三月中旬唐物會所を萩山口三田尻の三地に設け唐物を販賣せしめ唐物は改印を受くるに非らざれば民間に於て販賣することを得ざるの制を設けたり

(大塚の書)

一翰奉呈上候先以御勇健可被爲成御座珍重之御儀奉存候將亦御上坂御一件御首尾好先般御歸山被爲在候段奉恐悅候次に私儀追々被仰聞候崎行思ひ立正月十七日出帆仕二月四日着船同十五日迄彼地滯留同夕乘船直様出帆昨夕無滯歸關仕候往來共不順にて無餘義日數無益に相掛り奉恐縮候彼地においては心願通り相調諸事内取組薩州用達へ木と申大商是は薩隣屋敷内は續きにて產物交易掛り野村宗七大心配殊の外都合宜永久萬々歲留守居其外殊の外心切實以感

心仕候就ては茶其外彼方申通り速に繰出候處第一と奉存候右取組の次第彼是現場之趣近日出山仕直に可申上と奉存候爰許罷越居候齋藤取組之儀は砂糖米鹽牛馬鯨骨之類を以て是亦船好取摘出仕候心得に御座候間是亦御氣遣被成間敷候彼地にて堀二郎事當時伊地智壯之允よりも頼に御座候旁御安心之爲急便を以書外御面拜之節に申上縮候恐惶謹言

三月五日

正

藏(花押)

猶々本文之趣乍恐山田様其外様へも御口合奉願上候以上

木 戸 様

追啓

唐反物其外一萬八千兩程買入取歸り夫々取分け萩山口へ送り出仕候心得に御座候右送り荷物水上彼是多分造用も相掛り候と別紙申出一通差越申候間御一見之上御推察御引受之山田様へ篤と御談之上萩三田尻急速御沙汰相成候様奉願上候以上

(北條の書)

念三之尊書昨日相達拜誦無御障御着關奉大賀候爰元其後大に寥々之事に御座候扱は薩州渡米之儀被仰下關地には殘米少も無之由吉田舟木邊も當年は如形御米拂切及不足候位中々金に操合難相調候得共丸に違約に相成候もいかゞ敷奉存候付此内於吉田御手置米漸五百石程受込候分を其儘相渡候都合に申合手子之者一人爲拂方差出候間右五百石にて當度は何分相濟候様精々被仰入可被下候此餘は御説之馬關にて買米とも相運ひ候様御取計可然哉是も北國登り少き模様相聞候間いかゞ可有之哉何分乙丑丸は五百石にて是非御濟せ被下候様奉存候外には一粒も差廻し候手段無之候實は此五百石も極々難澁之分操出し申候間不惡御合可被下候

一谷伊東出帆後にて御相對無之由遺憾之事に御座候御地當節光景如何
一角力も今日切にて三田尻へ罷出候様之風聞に御座候
一谷遠遊渡之金之一條にて久保御役斷申出候哉に申越候とふも行掛り致方も

無之事に付何卒不平を不生滞關仕候様御諭教可被下候

先は急便貴答可申上草々申留候時下御自保是祈候小生も月に入出山可仕哉と相合申候萬緒鴻城にて縷々可申上候草々頓首

三月二十五日

新左衛門(華)

貫治様

(越荷方報告抄)

三田尻より被差廻候乙丑丸用事相濟せ昨十一日馬關出帆致候右様御承知可被成候尤米五百石石炭三萬八百斤用心金三百兩外に綱具其外仕調代千兩申出へ對し百五十兩飯料其外往二十日分相渡置申候(四月十二日)

第二十二章 慶應二年夏期の大勢

小笠原閣老の命令○薩藩の出兵辭退○進擊の期日○總督等の出陣○進擊の奏聞及勅諭○毛利氏に對する宣戰書○開戰○幕軍の不利○宍戸小田村の放還○五卿事件

閣老小笠原壹岐守廣島に抵り我が三支侯吉川氏及び二老臣に出藝を命じ我が應否の如何を待たず更に公父子孫三支侯吉川氏及び二老臣の出藝を命じ期するに四月二十一日を以てし大坂に在りては之れを從軍諸侯に布告し若し期に至りて命を奉ぜずんば直に進擊すべきことを令せり薩藩は初めより再征の説に反對し且つ連合提挈の密約既に長薩兩藩の間に成れり是を以て今や長幕兩者の關係日に切迫するを見て四月十四日邸監の名を以て書を幕府に上り再征の名なきを論じ假令進軍の命あるも薩藩は斷然出師を辭すべきの意を陳せり

(薩藩の上書)

即今内外危急之時節防長御處置之儀其當否に依り皇國之御興廢に相拘り候重事にて實以不容易儀に候處追々御達之趣も被爲在猶又來る二十一日迄に大膳父子被召呼若此度御請不仕候へば御討入相成候に付相心得御差圖を奉待候様被仰渡之趣承知仕候一昨年尾張前大納言殿總督として被差向伏罪之筋相立解兵迄相成候處却て御譴責同様の御都合にて就中神速御上洛之朝命御請無之而已ならず却て不容易企有之由を以て御再討被仰出御進發相成終に今日に立至り候御討入之時宜に相成候へば天下の亂階被爲開候事實明白なる事に御座候朝廷より時世相應の御處置を以て寛典に被處候御達の御趣意も被爲在候處御奉戴無之由傳聞仕り天下衆人物議喧々不堪聞次第に御座候征伐は天下の重典國家の大事後世青史に耻さる名分大義判然と相立其罪を鳴し令を聞かずして四方響應いたし候様無之候ては至當とは申難尤も凶器は妄に不可動之大戒も有之當節天下之耳目相開候へば無名を以て兵機不可振は顯然明著なる譯に御座候況んや國人不可討之と謂ふに却て撥亂濟世之御職掌にて動搖を被醸出

候場合に相當候前條天理に相戻り候戰鬪は於大義御請難仕假令出兵の命令承知仕候共不得止御斷申上候間虚心を以御聞届被下候様奉願候京都詰重役共より申上候様申越候付此段申上候以上

松平修理大夫内

寅四月

木場傳内

幕府書を見て却下せんとす薩藩聽かず反て閣老に見へて幕府の違勅失政を數へ却下の令を拒む此事に當りしは大久保一藏なり幕府更に薩侯の署名すべき旨を命ず乃ち薩侯松平修理大夫の名を以て前書の意を反復す

(薩侯の書)

別紙家來共より言上之趣兼て申聞置候趣意に御座候處既に長州之儀御請書不差出候節は一同討入候様被仰渡候趣承知仕候御決定之上不容易御儀と恐入候得共皇國之御大事に相拘且名分條理不相立候ては御請難仕儀兼て確定之旨趣有之別紙にも申上候通於大義難相濟不得止御斷申上候間宜敷御聞届被下候様

相願候以上

四月

松平修理大夫

閣老は又此書を却下せんとしたるも大久保は抗拒して服せず因て勝安房守を江戸より召し大久保等と應接せしめ漸く文書の提出を止めたりと云ふ成辰始末に曰く板倉伊賀守は大久保を召され幕府に對して陪臣の申立とありては受取り難しとありたるに翌日修理大夫殿の名前にて差出したり板倉殿は一夜の中に薩州との往復は爲し得ざるべきに斯く改めたるは幕府を欺くの所爲なり此儀如何にと詰責せられたるに大久保は是れは仰せとも覺へ候はず拙者共は全權にて出京し居れば拙者共の申立は即ち修理大夫の申立なり重役共よりとありては不都合なりとの御沙汰に付主人名前に改めたる迄の事にて候と答へければ板倉殿も押返すべき辭なくして已まれたり代りて松平伯耆守殿より薩州は幕府と御縁ある間柄なれば御情義に對しても此書面は却けらるべしとありたるに大久保は左の御間柄なればこそ他家の申し得ざる事も御爲を思ひて申出で候なれと答へて承はらざりしとは聞えし右に付幕府は大に困却して先に非征長論を爲して押籠められたる勝安房守を特に江戸より呼寄て薩州に應接すべしと命じたりければ安房守は大久保及び岩下佐次右衛門に面會し幕府の老中などいへる相手にも足らざるものを苦しましむるは貴君方の所業とも覺えずと云へる意表の語にて漸く此書面を其手に留め置く事是れより先き廣島に在りては五月一日を以て小笠原閣老より取計ひしとは聞えしと是れより先き廣島に在りては五月一日を以て小笠原閣老より處分令を下し命じて二十日を期し奉命書を進致せしめ尋て我が使節安戸備後助小田村素太郎を拘禁し其五日閣老自ら藝の諸兵を率ゐて東照宮の廟を拜し暗に兵威を示し大坂に在りては同月七日稻葉閣老をして上京せしめ翌八日廣島

の狀を朝廷に奏す十九日吉川氏より歎願書を廣島に致し書面は十八日附なり二十日の期限を延べて二十九日と爲さんことを請ふ小笠原閣老之れを許せしを以て二十四日之れを布告し若し其期に至り命を奉ぜずんば速に問罪の師を進むべきに由り翌六月五日を期し總軍進撃すべき旨を令す而して閣老松平伯耆守は藝州に下り若年寄京極主膳正は四國方面の諸軍を提理するが爲め之れに赴き總督徳川茂承は六月三日軍艦に搭し大坂を發して廣島に赴き同日小笠原閣老は九州方面諸軍の指揮に當らんが爲め廣島を發して小倉に赴く二十九日の期限に至り長藩奉命せざるの故を以て六月七日一橋慶喜松平越中守參内して問罪の師を發すべき旨を朝廷に奏す其文に曰く

五月朔日毛利大膳父子裁許申渡し興丸へ家督申付一家の政事向は毛利淡路毛利讃岐毛利左京吉川監物へ申渡し猶過激の舉動に及び候家來共の内重立候者廣島へ呼出し餘の者共も夫々處置仕るべき段同五月八日奏聞を遂げ候通に御座候右は何れも家來共の儀に付早々歸國二十日迄に當人の請書差出すべき

旨申渡置候處十八日に至り吉川監物より使者を以て大膳父子始め申渡候裁許之條々達命の儀闔國の士民惑亂名代の者歸邑掛け不都合の儀も有之漸く今節罷歸道路掛隔の場所迅速三末家申合の都合も難出來二十日の期限差迫り如何にも手段難相成候間二十九日迄猶豫の儀歎願仕り大膳父子へ達命不届事實餘儀なく候間申立通り承届萬一右期限迄請書差出さざる節は速に問罪の師差向くべき旨をも達置候處闔國士民疑惑憂憤切迫の情狀鎮撫難届候間此上寛大の沙汰有之候様三末監物より申出で彼より歎願致候期限に至り終に請書差出さず是迄國情之程推察の上斟酌盡し候處右始末に至り朝命遵奉致さず裁許違背候條國家の大典不相立候間餘儀なく問罪の師を差向け梗命の者を征討仕り候此段遂奏聞候以上

是に於て二條關白以下諸卿參内し即日勅詔を一橋慶喜に下す曰く

毛利大膳父子裁許之儀先般經天聽其末申達候處及違背候に付問罪之師差向候段遂奏聞被聞食候大樹には永々滯坂此上模様は寄進發にも可及大儀に被思召

候速に奏追討之功可奉安宸襟候様討手之諸藩へも可申聞旨御沙汰候事

八日幕府は勅詔を諸軍に布告し別に我に對する宣戰の書を發す

毛 利 興 丸

一昨子年家來之者共京師亂入禁闕へ發砲候條於大膳父子其罪難遁嚴科にも可被仰付候處恐懼謝罪三家老之首級備實檢其後彌恭順謹慎之趣に付天幕の御主意を以て格別寛典の御裁許五月朔日申渡二十日を限り御請書可差出筈に候處二十九日迄猶豫之儀吉川監物より願出候に付承届候處闔國士民疑惑憂憤切迫之情狀鎮撫難届を以て此上寛大之御沙汰被仰出候様三末家監物より又候書面差出右期限に至り御請書不差出候是迄も至艱之國情御斟酌恩威兩道を以國家之大典被正候處終に御請不致候條天幕之命を尊奉不致御裁許違背不届至極に付問罪之師被差向候間此旨可相心得候尤梗命之者御誅鋤被成候御主意に付無罪之細民末々之者妄に動搖致間敷候

幕府が進撃の勅允を得たる前日戰端は既に大島郡に開かる是れより日ならずし

て藝州石州小倉の諸方面齊く開戦す而して未だ二旬ならざるに諸道の幕軍皆敗れ我兵進みて南方大島郡を恢復し藝州方面に向へるものは玖波を奪ひ將さに大野に侵入せんとし石州方面に向へるものは益田を取り濱田城に向ひ小倉方面に向へるものは門司田之浦を破り漸次小倉城に迫らんとし今や形勢一變して幕軍は獨り防長二州の地に侵入すること能はざるのみならず我兵の進撃に對し守勢を取らざることを得ざるに至れり事は別章に詳なり廣島駐在の閣老松平伯耆守宗は形勢の日に非なるを見初め京坂に於て豫期する所に反し容易に二州を壓服すること能はざるを察し竊に謂へらく長藩をして命に應ぜしめんとせば先づ宍戸備後助小田村素太郎を宥し之れを國に歸し其歡心を得之れをして其政府紳に士民に説き兵を退けしめ幕軍も亦同時に進撃を止め仍て長藩よりは前日の處分令に對して奉命書を上り然る後ち更に嘆願する所あらしめ己れ自ら其嘆願書を携へ大坂に歸りて幕府に説き以て平和の局を結ぶに若かずと因て遽に宍戸小田村を放還して萬一の僥倖を謀りしも固より何等の効あらざりしなり翻て五卿事件の如何を

觀るに幕吏小林甚六郎等前月末既に筑前二日市に至り四月一日五藩の周旋方を召集し告ぐるに五卿を延ゐて大坂に至り然る後ち其復位復職の事を周旋せんが爲めに五卿に謁せんと欲する意を以て筑前藩周旋方乃ち小林の爲め謁見を五卿に請ふ薩藩は此事に關し五藩の間未だ確然たる議決あらざるに此事あるを怪み小林と筑前藩との間に密約の訂結あらんことを疑ひ三日堀直太郎は水野溪雲齋に告るに暫く謁見を猶豫せんことを以てし且つ事情を本國に報告せんが爲めに即日太宰府を發して歸國の途に就けり是れより先き薩藩は既に小林甚六郎等の將に太宰府に至らんとする急報を得て黒田嘉右衛門川畑伊右衛門伊集院直右衛門三雲藤一郎等三十八人に命じ急に太宰府に赴かしむ黒田等途にして堀直太郎の歸るに遇ひ共に其月四日を以て太宰府に着し小林甚六郎を旅舎に問ひ語て曰く寡君朝幕の命を奉じ臣等をして五卿を守衛せしむ若し五卿を大坂に引致し復位復職の事を謀らんと欲せば宜く先づ之れを上奏し勅裁を以て命を寡君に下すべし寡君にして朝旨を奉じ臣等に命せば臣等謹みて命を奉ぜん然らずして臣